

県道新吉富豊前線関係埋蔵文化財調査報告（1）

市丸城居屋敷遺跡・六郎堂ノ前遺跡 六郎神田遺跡・六郎桜木遺跡

—豊前市市丸・六郎所在遺跡の調査—

福岡県文化財調査報告書 第179集

2003

福岡県教育委員会

いち まるじょう い や しき ろく ろう どう の まえ
市丸城居屋敷遺跡・六郎堂ノ前遺跡
ろく ろう かん だ ろく ろう さくら ぎ
六郎神田遺跡・六郎桜木遺跡

—豊前市市丸・六郎所在遺跡の調査—

福岡県文化財調査報告書 第179集

序

ここに報告する市丸城居屋敷遺跡・六郎堂ノ前遺跡・六郎神田遺跡・六郎桜木遺跡は県道新古富豊前線改築工事に先立って発掘調査された遺跡です。

市丸城居屋敷遺跡は岩岳川右岸の微高地に位置する、戦国時代の平城跡と江戸時代の集落跡の複合遺跡であり、六郎堂ノ前遺跡・六郎神田遺跡・六郎桜木遺跡は佐井川左岸の扇状地に位置する、弥生時代末から古墳時代初めに営まれた集落跡の一部や、中世以降の生活地です。

これらの遺跡の調査成果は、この地域の当時の生活環境や歴史の変遷を知る上で、の好資料といえるでしょう。

発掘調査から報告書作成にいたる間には福岡県豊前土木事務所・豊前市・同教育委員会の諸機関をはじめとして、地元有志の方々のご協力を得て、これを無事に終了することができました。深く感謝する次第です。

また、本書が教育・研究、文化財愛護思想の普及にわずかなりとも寄与できれば望外の喜びとするところであります。

平成15年3月31日

福岡県教育委員会

教育長 森山 良一

例言

1. 本書は県道新吉富豊前線改築工事に伴って発掘調査を実施した、豊前市市丸に所在する市丸城居屋敷遺跡、同市六郎に所在する六郎堂ノ前遺跡・六郎神田遺跡・六郎桜木遺跡の報告書である。
2. 発掘調査・報告書作成は、福岡県土木部道路建設課の執行委任を受けて福岡県教育庁総務部文化財保護課（旧指導第二部文化課）が実施した。
なお、調査・報告書作成に関して福岡県豊前土木事務所、豊前市・同教育委員会・新吉富村教育委員会の多大な御協力を得た。
3. 金属器は、福岡県立九州歴史資料館において、同館学芸第二課加藤和歳の指導の下で、整理を行った。
4. 掲載した図は、遺構を小池・秦・飛野の他、川野礼子・三吉きよみ・佐山彰子・田坂はつみが、遺物を小池・秦・飛野・平岡春美・棚町陽子・堀江圭子・久富美智子・田中典子・坂田順子・江口幸子・藤原さとみ・堀ノ内久美子・中村洋子・橋之口雅子が作成したものを秦の他、豊福弥生・原カヨ子・江上佳子が製図したものである。
5. 掲載した写真は、遺構を小池・飛野・秦が、遺物は九州歴史資料館において同館参事補佐石丸洋、また、同氏の指導の下、文化財保護課整理指導員北岡伸一が撮影したものを使用した。
なお、市丸城居屋敷遺跡の空中写真は（有）空中写真企画による。
6. 使用した方位は、市丸城居屋敷遺跡は磁北、六郎堂ノ前遺跡・六郎神田遺跡・六郎桜木遺跡は主として座標北である。
7. 本書のⅠ・Ⅱ章とⅢ-ⅠのⅠ区の遺構については小池が、それ以外は秦が担当し、Ⅲ-2・3は小池が、Ⅲ-4は飛野が執筆し、秦が編集した。

本文目次

I. はじめに	1
II. 位置と環境	3
III. 調査の内容	8
1. 市丸城居屋敷遺跡	8
2. 六郎堂ノ前遺跡	126
3. 六郎神田遺跡	133
4. 六郎桜木遺跡	135

図版目次

市丸城居屋敷遺跡

図版1-1. 市丸城居屋敷遺跡周辺地形 (南上空から)	2. I～Ⅲ区全景 (上空から)
3. I区全景 (上空から)	
図版2-1. I区1・2号礎石建物跡 (上空から)	2. I区1号礎石建物跡柱5・10 (東から)
3. I区1号礎石建物跡柱12 (西から)	4. I区1号掘立柱建物跡 (上空から)
図版3-1. I区2号土坑 (東から)	2. I区3号土坑 (東から)
3. I区4号土坑 (東から)	4. I区1号H形土坑 (東から)
5. I区1号円形土坑土層断面 (東から)	6. I区1号井戸 (西から)
7. I区1号埋甕遺構 (西から)	8. 作業風景
図版4-1. I区1号石組土坑 (北東から)	2. 同 (南東から)
3. 同上遺物出土状態 (南東から)	4. I区1・2号大土坑 (上空から)
図版5-1. I区1号大土坑 (南東から)	2. 同右列部分 (南東から)
3. I区1号大土坑・1号集石遺構 (南東から)	4. I区1号大土坑土層断面 (南西から)
図版6-1. I区1・2号集石遺構 (北東から)	2. I区1号集石遺構東部 (北東から)
3. 同上土層断面 (南東から)	4. I区1号大土坑石臼出土状態 (南西から)
図版7-1. I区3号集石遺構 (北西から)	2. I区1号溝状遺構漆器出土状態 (北西から)
3. I区1号溝状遺構石組裏込土層断面 (南西から)	4. I区1号溝状遺構土層断面 (北東から)
図版8-1. II区全景 (上空から)	2. II区1号掘立柱建物跡 (上空から)
3. II区1号土坑 (上空から)	4. II区3号土坑 (北東から)
図版9-1. II区4号土坑 (北東から)	2. II区5号土坑 (南西から)
3. II区6～8号土坑 (西から)	4. II区6号土坑遺物出土状態 (南東から)

- 図版10-1. II区7号土坑土層断面（南東から）
 3. II区10号土坑（北東から）
 図版11-1. II区12号土坑・1号桶埋設遺構（上空から）
 3. II区1号胎衣埋納遺構（東から）
 5. II区1号桶埋設遺構（南西から）
 7. II区1号井戸（南西から）
 図版12-1. II区2号溝状遺構土層断面（北東から）
 3. II区5号溝状遺構土層断面（北東から）
 図版13-1. II区北側落ち込み（南東から）
 3. 同上2（南東から）
 図版14-1. III区全景（上空から）
 3. III区1号井戸（西から）
 5. III区3号井戸（北から）
 図版15-1. IV区全景（上空から）
 2. IV区1号掘立柱建物跡・1号欄跡・排水管遺構（上空から）
 3. 同上柱1柱根出土状態（北東から）
 図版16-1. IV区2号掘立柱建物跡（上空から）
 3. IV区2号土坑（南東から）
 5. IV区4号土坑（北から）
 図版17-1. IV区8・9・14～16号土坑・1号井戸（東から）
 3. IV区10号土坑（北東から）
 5. IV区13号土坑（北東から）
 図版18-1. IV区15号土坑（西から）
 3. IV区1号埋甕遺構（南から）
 図版19-1. IV区2号井戸（南から）
 3. 同上（北から）
 図版20. I区出土土器・瓦1
 図版21. I区出土土器・瓦2
 図版22. I区出土陶磁器1
 図版23. I区出土陶磁器2
 図版24. II区出土土器・瓦・ガラス玉
 図版25. II区出土土器・瓦・ガラス瓶
 図版26. II区出土土器
 図版27. II区出土陶磁器1
 図版28. II区出土陶磁器2
 図版29. 1. II区出土陶磁器2
 図版30. 1. III区出土土器
 2. II区9号土坑（東から）
 4. II区11号土坑（北東から）
 2. II区石橋遺構（北東から）
 4. II区2号胎衣埋納遺構（北西から）
 6. 同遺物出土状態（北東から）
 8. II区2号井戸ⁱ（東から）
 2. II区3・4号溝状遺構土層断面（北東から）
 4. 作業風景
 2. II区西壁土層断面1（南東から）
 4. 同上3（南東から）
 2. III区1号土坑（北から）
 4. III区2号井戸（北から）
 2. IV区1号土坑（北東から）
 4. IV区3号土坑（北東から）
 2. IV区7号土坑（北から）
 4. IV区11号土坑（北から）
 2. IV区1号桶埋設遺構（北西から）
 4. IV区2号埋甕遺構（北から）
 2. 7号溝状遺構石組部（西から）
 2. III区出土陶磁器
 2. IV区出土土器1

図版31 N区出土土器2・土製品

図版32 N区出土陶磁器1

図版33 N区出土陶磁器2

図版34-1. ビット出土土器

2. 攪乱出土土器・土製品

3. 遺構検出面出土陶器

4. 出土地不明ガラス瓶

図版35 ビット出土土器2・陶磁器

図版36-1. 弥生・古代の出土土器

2. 土製品・磁器製品

3. 砥石・石製品

図版37 市丸城居屋敷遺跡出土石臼・台石

図版38 市丸城居屋敷遺跡出土石臼・金属製品

図版39 市丸城居屋敷遺跡出土簪・木製品

六郎堂ノ前遺跡

図版40-1. 六郎堂ノ前遺跡空中写真1（東南方向を望む 正面は雄熊山と八面山）

2. 六郎堂ノ前遺跡空中写真2（北西から）

3. 六郎堂ノ前遺跡空中写真3（南東から）

図版41-1. 1号竪穴住居跡と1号土坑（北から）

2. 同上（東から）

3. 1号竪穴住居跡遺物出土状況（東から）

図版42-1. 六郎堂ノ前遺跡調査風景

2. 六郎堂ノ前遺跡出土遺物

六郎神田遺跡

図版43-1. 六郎神田遺跡調査区全景1（北から）

2. 六郎神田遺跡調査区全景2（南から）

3. 六郎神田遺跡調査区I区（北から）

六郎板木遺跡

図版44-1. 六郎板木遺跡調査区全景（北西から）

2. 1号溝（西から）

3. 2号溝（南西から）

図版45-1. 3号溝西半（西から）

2. 1号溝出土遺物

3. 3号溝出土遺物

挿 図 目 次

第 1 図	周辺遺跡分布図(1/50,000)	4
第 2 図	市丸城居屋敷遺跡位置図(1/2,000)	8
第 3 図	市丸城居屋敷遺跡遺構全体図(1/200)	8 - 9
第 4 図	I 区 1・2 号礎石建物跡実測図(1/80)	9
第 5 図	I 区 1 号礎石建物柱穴出土遺物実測図(1/3)	10
第 6 図	I 区 1 号孤立柱建物跡実測図(1/80)	12
第 7 図	I 区 1～3 号土坑実測図(1/30)	13
第 8 図	I 区 1～3 号土坑・1 号円形土坑出土遺物実測図(1/3)	14
第 9 図	I 区 1 号大土坑実測図(1/80)	16
第10図	I 区 2 号大土坑・1～3 号集石遺構実測図(4 は 1/30、他は 1/60)	18
第11図	I 区 1・2 号大土坑出土土師質土器実測図(17 は 1/4、他は 1/3)	19
第12図	I 区 1・2 号大土坑出土土質土器・陶器実測図(7・9・18 は 1/4、他は 1/3)	21
第13図	I 区 1・2 号大土坑出土陶磁器・瓦実測図(11・12 は 1/2、他は 1/3)	22
第14図	I 区 4 号土坑・1 号円形土坑・1 号石組土坑・1 号便所遺構実測図(1/30)	23
第15図	I 区 1 号井戸・1 号埋塞実測図(1 は 1/30、2 は 1/15)	25
第16図	I 区 1 号石組土坑・1 号井戸・1 号埋塞出土遺物実測図(8 は 1/4、他は 1/3)	26
第17図	I 区 1・2 号溝状遺構実測図(1/60)	27
第18図	I 区 1 号溝状遺構出土土器実測図(11 は 1/4、他は 1/3)	28
第19図	I 区 1 号溝状遺構出土陶器実測図(1/3)	29
第20図	I 区 1 号溝状遺構出土陶磁器実測図(1/3)	30
第21図	I 区 2 号溝状遺構出土土器実測図(1/3)	32
第22図	I 区 2 号溝状遺構出土陶磁器実測図(1/3)	33
第23図	I 区西端上層出土遺物実測図(1/3)	35
第24図	II 区 1 号孤立柱建物跡実測図(1/80)	37
第25図	II 区 1～4 号土坑実測図(1/30)	38
第26図	II 区 5～8 号土坑実測図(1/30)	39
第27図	II 区 3・4・6 号土坑出土遺物実測図(3 は 1/8、他は 1/3)	40
第28図	II 区 7 号土坑出土遺物実測図(1 は 1/1、2 は 1/4)	41
第29図	II 区 9～11 号土坑実測図(1 は 1/40、2 は 1/30、3 は 1/20)	42
第30図	II 区 9 号土坑出土瓦実測図(1/3)	43
第31図	II 区 12 号土坑・1 号榑垣設置構・1・2 号胎衣埋納遺構・石壁遺構実測図(3・4 は 1/10、他は 1/30)	45
第32図	II 区 1 号桶埋設置構出土陶磁器・土製品実測図(15～17 は 1/2、1/3)	46
第33図	II 区 1・2 号井戸実測図(1 は 1/30、2 は 1/40)	49
第34図	II 区胎衣埋納遺構・井戸出土遺物実測図(1/3)	50
第35図	II 区 1 号溝状遺構出土土器実測図(1/3)	52

第36図	Ⅱ区1号溝状遺構出土陶器実測図(1/3)	54
第37図	Ⅱ区1号溝状遺構出土磁器・瓦実測図(1/3)	55
第38図	Ⅱ区2号溝状遺構出土土師質土器実測図(8は1/4、他は1/3)	56
第39図	Ⅱ区2号溝状遺構出土遺物実測図(1/3)	58
第40図	Ⅱ区3～5号溝状遺構出土遺物実測図(1/3)	59
第41図	Ⅱ区北側落込出土遺物実測図(1/3)	60
第42図	Ⅱ区西壁土層断面図・2～5号溝状遺構土層断面図(1/60)	62
第43図	Ⅱ区西壁・北壁出土遺物実測図(1・6～9は1/2、他は1/3)	63
第44図	Ⅲ区1～5号土坑実測図(1・5は1/30、他は1/40)	65
第45図	Ⅲ区1～3号井戸実測図(1/30)	67
第46図	Ⅲ区1・2号井戸出土遺物実測図(1/3)	68
第47図	Ⅲ区1号溝状遺構出土遺物実測図(1/3)	69
第48図	Ⅲ区2・3号溝状遺構出土遺物実測図(1/3)	70
第49図	Ⅳ区1・2号堀立柱建物跡・1号溝状遺構実測図(3は1/60、4は1/40、他は1/80) ...	73
第50図	Ⅳ区1～6号土坑実測図(1/30)	75
第51図	Ⅳ区7・8号土坑実測図(1/30)	76
第52図	Ⅳ区1・3・6・7号土坑出土遺物実測図(1/3)	77
第53図	Ⅳ区9～12号土坑実測図(1/30)	78
第54図	Ⅳ区13～18号土坑実測図(4は1/60、他は1/30)	80
第55図	Ⅳ区12・13・15号土坑出土遺物実測図(1/3)	81
第56図	Ⅳ区1号桶埋設遺構・1・2号井戸・1・2号埋没遺構・排水管遺構実測図(4・5は1/15、他は1/30) ...	83
第57図	Ⅳ区1・2号埋没遺構出土遺物実測図(1/3)	85
第58図	Ⅳ区井戸・桶埋設遺構・排水管遺構出土遺物実測図(6は1/4、他は1/3)	86
第59図	Ⅳ区1～3・9号溝状遺構石組部実測図・同上層断面図(1/30)	87
第60図	Ⅳ区1号溝状遺構出土遺物実測図(1/3)	88
第61図	Ⅳ区2号溝状遺構出土土器実測図(1/3)	89
第62図	Ⅳ区2号溝状遺構出土瓦質土器・陶器実測図(1/3)	90
第63図	Ⅳ区2号溝状遺構出土陶器挿鉢実測図(1/3)	91
第64図	Ⅳ区2・3号溝状遺構出土遺物実測図(1/3)	92
第65図	Ⅳ区6・7号溝状遺構石組部実測図(1/60)	93
第66図	Ⅳ区6・7・9号溝状遺構出土遺物実測図(1/3)	95
第67図	Ⅳ区9・12号溝状遺構出土遺物実測図(1/3)	97
第68図	Ⅳ区暗渠遺構実測図(1/60)	99
第69図	Ⅳ区暗渠遺構出土遺物実測図(5は1/4、11は1/2、他は1/3)	100
第70図	Ⅳ区3号溝状遺構南側整地層出土土器実測図(1/3)	101
第71図	ピット出土土師質土器実測図(1/3)	102
第72図	ピット出土瓦質土器実測図(1/3)	103
第73図	ピット出土陶器実測図(1/3)	104

第74図	ビット出土磁器・ガラス瓶実測図(1/3)	105
第75図	遺構検出面出土遺物実測図(1/3)	107
第76図	出土地不明・攪乱出土遺物実測図(6は1/2、4は1/4、他は1/3)	108
第77図	弥生～古代の出土土器実測図(1/3)	109
第78図	市丸城居屋敷遺跡出土金属製品実測図(1/3)	110
第79図	市丸城居屋敷遺跡出土木製品実測図(1/3)	110
第80図	市丸城居屋敷遺跡出土石製品実測図 1 (1/3)	111
第81図	市丸城居屋敷遺跡出土石製品実測図 2 (1/4)	112
第82図	市丸城居屋敷遺跡出土石製品実測図 3 (1/4)	113
第83図	市丸城居屋敷遺跡出土石製品実測図 4 (1/4)	114
第84図	市丸城居屋敷遺跡出土石製品実測図 5 (1/4)	115
第85図	市丸城居屋敷遺跡遺構変遷図(1/800)	117
第86図	市丸城想定範囲(1/5,000)	119
第87図	市丸城居屋敷遺跡出土水琴窟復元図と類例	122
第88図	高村焼系こね鉢・焙烙の変遷(1/6)	123
第89図	豊前各地の近世土師質・瓦質土器(29は1/36、8・10・11・36・41・42・49・51は1/30、他は1/18)	124
第90図	六郎堂ノ前遺跡・六郎神田遺跡・六郎桜木遺跡位置図(1/2,000)	127
第91図	六郎堂ノ前遺跡遺構配置図(1/200)	127
第92図	1号竪穴住居跡実測図(1/60)	128
第93図	1号竪穴住居跡出土土器実測図 1 (1/3)	129
第94図	1号土坑実測図(1/60)	130
第95図	1号竪穴住居跡出土土器実測図 2、1号土坑土器実測図(1/3)	131
第96図	六郎神田遺跡遺構配置図(1/200)	133
第97図	六郎神田遺跡出土土器実測図(1/3)	134
第98図	六郎桜木遺跡土層図(1/80、1/200)	135
第99図	六郎桜木遺跡出土土器実測図(1/3)	137
第100図	六郎桜木遺跡出土石製品実測図(1/2)	137
第101図	明治30年頃の豊前平野 (1/50,000)	138

I はじめに

ここに報告する六郎ならびに市丸所在遺跡の調査原因は県道新吉富豊前線の道路改築工事（拡幅）である。この道路は地元で港湾道路と言われるように宇島港整備に伴って整備された歴史を有する道路で、大正時代には乗合自動車の路線となっており、新吉富村中心部から豊前市市街地への通路として利用者の多い道路である。

豊前市六郎付近は豊前市小石原の工業団地造成地に近いが、自動車の大型化に伴い離合がスムーズになるように復員拡幅が進められている。

平成8（1996）年度以降、福岡県豊前土木事務所から同教育庁京築教育事務所に對し、この道路拡幅に係る埋蔵文化財の協議が行われ、用地取得の進捗に連動して、文化財の有無確認の依頼が順次なされた。これを受けて同教育事務所職員は、平成9年2月5日に大字六郎字桜木部分で試掘調査を実施し、土器片が集中出土したことから、急遽作業員を投入して収拾する調査を実施した。本地区の工事内容が幅2～3mの拡幅であり、面的な調査を実施することが難しかったため、六郎桜木遺跡としてトレンチ調査を行った。

平成9年度には平成9年11月13日に字神田で、12月25日に字堂ノ前で試掘調査を実施し、字堂ノ前で竪穴住居跡や柱穴状ピット、字神田で遺物包含層と柱穴状ピット群などを確認した。このため本発掘調査についての協議を行い、平成9年度末までに現地発掘調査を実施することで協議が整い、執行委任の手続きをとって平成10年2月から現地調査に着手した。

また、平成11年度には平成11年10月18日に大字市丸の拡幅予定地で試掘調査し、近世の遺構を確認した。市丸は市丸城の伝承地であることから、城郭遺構についても検証の必要があり、本調査を実施することで協議が整い、平成12年1月26日から現地調査に着手した。当初、教育事務所担当職員が調査を担当していたが、遺構が密に分布し、遺物も豊富であったため調査には予想以上の時間がかかることが予測されたため、教育庁文化財保護課から調査担当者を1名増員して効率化を図った。

新吉富豊前線に関しては、平成13年度に新吉富村中村地区で橋梁改築に伴う拡幅が予定されており、試掘調査を実施した結果文化財の存在が確認され、新吉富村教育委員会が発掘調査を実施している。今後も、平成11年度実施の市丸城居屋敷遺跡調査区域の東側から大字森久にかけて拡幅が計画されているので、順次文化財調査の対応が必要になろう。

今回報告する各遺跡の遺物整理業務については、現地発掘調査終了後直ちに実施した水洗作業をはじめ、他の業務の合間を縫って断続的に行ってきたが、平成14年度に本格的な遺物整理業務・報告書作成を実施することで協議が整い、執行委任の手続きをとった。

実際の本発掘調査は、六郎桜木遺跡を平成9年2月5日～2月6日に、六郎堂ノ前遺跡と六郎神田遺跡を平成10年2月2日～2月16日の間に、市丸城居屋敷遺跡を平成12年1月26日～3月31日に実施した。

これらの遺跡にかかわる平成9・10・11・14年度の調査関係者は次のとおりである。

	平成9年度	平成10年度	平成11年度	平成14年度
福岡県教育委員会				
総 括				
教育長	光安 常喜	光安 常喜	光安 常喜	森山 良一
教育次長	松枝 功	藤吉純一郎	藤吉純一郎	三瓶 寧夫
総務部長			岩本 誠	松本 通憲
文化課長	松尾 正俊			
同参事	柳田 康雄			
文化財保護課長		石松 好雄	柳田 康雄	井上 裕弘
同参事		柳田 康雄	井上 裕弘	橋口 達也 (課長技術補佐)
			橋口 達也 (課長技術補佐)	久芳 昭文 (課長補佐)
同課長補佐		角 伸幸 (課長補佐)	角 伸幸 (課長補佐)	
同課長技術補佐		井上 裕弘		
同参事補佐		橋口 達也 (調査第一係長)	児玉 真一 (調査第一係長)	佐々木隆彦 (調査第一係長)
		中間 研志	中間 研志	
総 務				
文化課管理係長		角 伸幸	角 伸幸	古賀 敏生
同主任主事		鶴我 哲夫	佐藤 雅二	鎮守 俊明
調査・報告書製作				
参事補佐		小池 史哲 (京築教育事務所)	小池 史哲 (京築教育事務所)	小池 史哲 (福岡市文化課)
				飛野 博文 (調査第一係)
技術主査	飛野 博文 (京築教育事務所)			
主任技師			秦 憲二 (調査第一係)	秦 憲二 (調査第二係)
整理担当				
技術主査		伊崎 俊秋 (調査第二係)		
主任技師		吉田 東明 (調査第一係)	重藤 舞行 (調査第一係)	岸本 丰 (調査第二係)
				今井 涼子 (調査第二係)
技 師				大庭 孝夫 (調査第二係)

なお、発掘調査から報告書刊行にいたる間には、地元在住の方々をはじめ豊前土木事務所、豊前市・同教育委員会、京築教育事務所をはじめとする関係各位のご理解・ご協力をえることが出来た。また、いうまでもなく、発掘調査・整理作業に携わっていただいた多くの方々の参加があったはじめてなした事業でもある。特に、地元の方々にはひとかたならぬご協力を賜り、無事に発掘調査を終了することができたことを、深く感謝いたします。

II. 位置と環境

旧石器時代後期の資料は大平村下唐原¹¹¹、新吉富村萱場¹¹²や豊前市青畑¹¹³などの洪積台地でナイフ形石器や剥片尖頭器などの利器（15,000年前頃）や、網石刃核（12,000年前頃）が発見されていて、大平村金居塚遺跡¹¹⁴や豊前市中村で採集された神子柴タイプ局部磨製片刃石斧などは、旧石器時代最終末から縄文時代草創期に移る頃のものともみられる。

縄文時代早期は豊前市吉木遺跡¹¹⁵で遺構ははっきりしないが、山形・格子目・楕円押型文土器、条痕文土器、無文土器がまとまって出土しているほか、豊前市小石原泉遺跡¹¹⁶、新吉富村垂水遺跡¹¹⁷、宇野代遺跡¹¹⁸、大平村土佐井遺跡¹¹⁹、西方遺跡¹²⁰などでも僅かながら押型文土器片が出土している。前期の遺物は、大平村土佐井遺跡¹¹⁹、豊前市小石原泉遺跡¹¹⁶、新吉富村宇野代遺跡¹¹⁸などから出土し、中期の土器は土佐井遺跡¹¹⁹と小石原泉遺跡¹¹⁶、本耶馬溪町枋洞穴遺跡¹²¹、椎田町小原岩陰遺跡¹²²で若干出土していて、椎田町東高塚弘法田遺跡¹²³で船元式土器が比較的多く出土した。後期になると新吉富村宇野台遺跡¹¹⁸や豊前市小石原泉遺跡¹¹⁶に初頭頃の土器が発見され、中津市榎野貝塚¹²⁴や宇佐市石原貝塚¹²⁵など山国川以東に貝塚が形成されるのに比して、以西に貝塚がみられない。しかし後期前半から後半の住居跡が多数発見されていて、大平村土佐井遺跡¹¹⁹、上唐原遺跡¹²⁶、東友枝曾根遺跡¹²⁷、豊前市狭間宮ノ下遺跡¹²⁸、川内楠木遺跡¹²⁹、中村村石丸遺跡¹³⁰、椎田町山崎・石町遺跡¹³¹、坂本下ノ森遺跡¹³²などで住居跡が調査された。また後期後半から晩期初め頃には、東友枝曾根遺跡¹²⁷の30点をはじめ、大平村原井三ツ江遺跡¹³³、上唐原清遺跡¹³⁴、下唐原寺前遺跡¹³⁵、中津市高畑遺跡¹³⁶などから十個が出土していて、福岡・大分県内全体出土量の大半を占める上偶出土の密集地域になっている。しかし晩期になると住居跡発見例が減少する傾向がある。

弥生時代初頭頃の顕著な遺跡はないが、前期末以降の遺跡で注目すべき事例があり、豊前市鬼木四反田遺跡¹³⁷などに船載舟網器が発見され、新吉富村牛頭天主遺跡¹³⁸やその南側の中桑野遺跡¹³⁹、大平村桑野遺跡¹⁴⁰などでは中期前半頃の大規模な柱建物跡を含む大規模な集落、中期後半の環壕などが発見されている。また築城町安武深川遺跡¹⁴¹では中期後半には小鍛冶ながらも鉄器製作を行っていた痕跡がみられ、後期前半の鳥の絵を描いた土器も出土している。また築城町十双遺跡¹⁴²では楽浪系土器や銀製品も出土していて、大陸からの新しい文化を積極的に取り入れていた様子が窺える。後期の山国川中流域で、自然堤防上に立地する大平村郷ヶ原遺跡¹⁴³、上唐原遺跡¹⁴⁴を含む大規模な環壕集落が調査されていて、邪馬台国成立期の社会を考える上でも注意を要する地域となっている。

弥生時代の首長墓の可能性のある墳墓としては、大平村大塚本遺跡¹⁴⁵で中期方形墳丘墓が発見されている。この地域での一般的な墓は土槨墓や石槨墓があり、山国川自然堤防上などに後期後半から終末期の甕槨墓が散見される。また終末期には穴ヶ葉山遺跡¹⁴⁶の石蓋土槨墓群などに、鏡片を副葬するような墓もある。

古墳時代の首長層の墳墓として、山国川下流域では大平村下唐原の能満寺3号墳¹⁴⁷が堅穴式石室をもつ全長33mの前方後円墳である。すでに盗掘を受けており、主体部の攪乱上・盗掘坑から



- | | | | | | | |
|------------|-----------|-----------|-----------|------------|------------|------------|
| 1 市丸城跡 | 23 久路土佐道跡 | 45 シンバワ道跡 | 67 新日道跡 | 89 上野道跡 | 111 下原原色道跡 | 133 小山田古墳跡 |
| 2 六郎堂ノ御遺跡 | 24 久路土佐道跡 | 46 寺ノ道跡 | 68 山田古墳 | 90 地野道古墳 | 112 小松道跡 | 134 西ノ道跡 |
| 3 六郎神田道跡 | 25 久路土佐道跡 | 47 北道跡 | 69 山田道跡 | 91 宇野台古墳跡 | 113 龍満寺古墳 | 135 龍満寺古墳 |
| 4 六郎坂木道跡 | 26 久路土佐道跡 | 48 小宮道跡 | 70 ハッ下ノ道跡 | 92 高木道跡 | 114 下原原色道跡 | 136 龍満寺古墳 |
| 5 市丸城跡 | 27 久路土佐道跡 | 49 龍満寺ノ道跡 | 71 丸道跡 | 93 牛久道跡 | 115 下原原色道跡 | 137 上野道跡 |
| 6 市丸三反田道跡 | 28 新宮田道跡 | 50 土佐道跡 | 72 トコノ道跡 | 94 中野道跡 | 116 下原原色道跡 | 138 上野道跡 |
| 7 六郎坂木道跡 | 29 龍満寺ノ道跡 | 51 ナカノ道跡 | 73 中野道跡 | 95 中野道跡 | 117 中野道跡 | 139 中野道跡 |
| 8 小川原道跡 | 30 竹毛道跡 | 52 原道跡 | 74 龍満寺ノ道跡 | 96 中野道跡 | 118 下原原色道跡 | 140 中野道跡 |
| 9 龍満寺ノ道跡 | 31 龍満寺ノ道跡 | 53 コシノ道跡 | 75 龍満寺ノ道跡 | 97 龍満寺ノ道跡 | 119 下原原色道跡 | 141 龍満寺ノ道跡 |
| 10 今市道跡 | 32 龍満寺ノ道跡 | 54 龍満寺ノ道跡 | 76 ウルノ道跡 | 98 今市道跡 | 120 下原原色道跡 | 142 龍満寺ノ道跡 |
| 11 下原道跡 | 33 龍満寺ノ道跡 | 55 安道跡 | 77 龍満寺ノ道跡 | 99 龍満寺ノ道跡 | 121 龍満寺ノ道跡 | 143 龍満寺ノ道跡 |
| 12 古木ウツロ道跡 | 34 中野道跡 | 56 安道跡 | 78 中野道跡 | 100 龍満寺ノ道跡 | 122 龍満寺ノ道跡 | 144 龍満寺ノ道跡 |
| 13 古木ウツロ道跡 | 35 龍満寺ノ道跡 | 57 龍満寺ノ道跡 | 79 龍満寺ノ道跡 | 101 龍満寺ノ道跡 | 123 上ノ道跡 | 145 龍満寺ノ道跡 |
| 14 古木ウツロ道跡 | 36 龍満寺ノ道跡 | 58 龍満寺ノ道跡 | 80 龍満寺ノ道跡 | 102 龍満寺ノ道跡 | 124 龍満寺ノ道跡 | 146 龍満寺ノ道跡 |
| 15 三毛門道跡 | 37 龍満寺ノ道跡 | 59 安道跡 | 81 龍満寺ノ道跡 | 103 龍満寺ノ道跡 | 125 龍満寺ノ道跡 | 147 上ノ道跡 |
| 16 三毛門道跡 | 38 龍満寺ノ道跡 | 60 宇野道跡 | 82 龍満寺ノ道跡 | 104 龍満寺ノ道跡 | 126 龍満寺ノ道跡 | 148 龍満寺ノ道跡 |
| 17 龍満寺ノ道跡 | 39 龍満寺ノ道跡 | 61 龍満寺ノ道跡 | 83 龍満寺ノ道跡 | 105 龍満寺ノ道跡 | 127 龍満寺ノ道跡 | 149 龍満寺ノ道跡 |
| 18 上七ヶ道跡 | 40 龍満寺ノ道跡 | 62 龍満寺ノ道跡 | 84 龍満寺ノ道跡 | 106 龍満寺ノ道跡 | 128 龍満寺ノ道跡 | 150 龍満寺ノ道跡 |
| 19 上七ヶ道跡 | 41 中野道跡 | 63 龍満寺ノ道跡 | 85 龍満寺ノ道跡 | 107 龍満寺ノ道跡 | 129 龍満寺ノ道跡 | 151 龍満寺ノ道跡 |
| 20 龍満寺ノ道跡 | 42 フルノ道跡 | 64 龍満寺ノ道跡 | 86 龍満寺ノ道跡 | 108 龍満寺ノ道跡 | 130 龍満寺ノ道跡 | 152 龍満寺ノ道跡 |
| 21 龍満寺ノ道跡 | 43 カツ道跡 | 65 龍満寺ノ道跡 | 87 龍満寺ノ道跡 | 109 龍満寺ノ道跡 | 131 龍満寺ノ道跡 | 153 龍満寺ノ道跡 |
| 22 久路土佐道跡 | 44 ハンタ道跡 | 66 龍満寺ノ道跡 | 88 宇野道跡 | 110 龍満寺ノ道跡 | 132 上ノ道跡 | |

第1図 周辺道跡分布図 (1/50,000)

四獣鏡と菱鳳鏡片が出上している。近接する西方古墳も全長60m級の前方後円墳で、両者はともに4世紀代の古墳で、この流域での首長墓とみられる。また吉富町櫛生山古墳は5世紀中頃の前方後円墳で、前方部が失われているため全長はわからないが、後円部径は17mに復元できる。堅穴式石室から人骨・鉄矛・鉄鏃、墳丘からは埴輪が出土しているが、前方後円墳としてはやや規模が小さい。6世紀後半代の吉富町天仲寺古墳は小首長層の墳墓とみられる石室全長9.7mの複式構造の巨石横穴式石室で、7世紀初頭頃までの追葬がみられるが、巨石墳は新吉富村吉岡の巨石塚もあり、大平村穴ヶ葉山古墳とともに国造クラスの豪族墓である可能性が高い。天仲寺古墳も大きく墳丘が削られているが、前方後円墳の可能性も指摘されている。穴ヶ葉山古墳は線刻壁画をもつことから、史跡指定されている。このほかにも丘陵部にやや規模の小さな横穴式石室を主体にする円墳や、横穴墓が群集している。

自然堤上や扇状地の平坦部で発見される古墳時代住居跡のなかには、5世紀頃からし字煙道付きカマドが付設されたものがあり、オンドルのように床の一部を暖房する施設らしいが、高句麗の影響とみられる。豊前市小石原泉遺跡でも発見されている。生業関係では蛸壺、有溝土鍾や棒状有孔土鍾などが多数みられ漁労の痕跡も注目される。また専門的要素が強いが、大平村下唐原大久保遺跡で5世紀末～6世紀初めに操業された埴輪窯は九州でもまだ3例しか発見されていない貴重な発見があった。また、完形に近い家形埴輪も出土している。

友枝川の東岸に面した大平村唐原神龍石は、水門、列石、土塁などを繋いだ総延長1.2kmほどで、小規模な方の神龍石だが、最高所からは椎田から宇佐あたりの海岸部が望め、速く対岸の周防側側の山並みや、背後の上毛郡、下毛郡の平野部一帯が見渡せる位置にあり、おそらく朝鮮半島での緊張に関連して筑紫の朝倉広庭宮に進出した（661年）斎明天皇の避難ルートを確認するために、山国川河口近くに設けられ、これを支える集団も居ただろうと想像される。近年の調査で、礎石建物の存在も確認されている。また、新吉富村垂水廃寺は7世紀末頃に創建された古代寺院で、伽藍配置などは未詳ながらも帰化系氏族の建立によるとみられ、6～7世紀に須恵器や瓦を焼成した新吉富村山田窯跡や国指定史跡大平村友枝窯跡で焼かれた新羅系瓦が大半使用され、一部百済系の瓦も使用されている。

正倉院に残る大宝二年（702年）残簡戸籍「豊前國上毛郡塔里」は後の和名類聚抄記載の「多布」とみられる大平村唐原付近に、「加白久也里」は「炊江郷」とみられる豊前市大村周辺に想定され、渡来系の姓が多いとされる。和名類聚抄には「加牟豆美介」という記述があつて、上身郷もみられる。また藤原広嗣の乱（740年）に関係する「登美鎮」は軍事施設らしく、海路と河川沿いの交通の要衝であつた吉富町などを含む山国川下流域に登美鎮があつたとする説もある。

律令体制では豊津町に豊前国府、豊前国分寺・国分尼寺が設置され、上毛郡では新吉富村の国史跡大ノ瀬官衙遺跡に郡衙が設置されていたらしい。柵に囲まれた55m前後×60m前後の区画の中に、4×7間の正殿と2×12間の脇殿、その他に六脚門の存在が確認されている。区画の外にも多くの掘立柱建物跡が見られる。そして新吉富村フルトノ遺跡は郡に先立つ郡評跡らしい。区画は持たないものの大型掘立柱建物跡が整然と並んでいる。1辺10m規模の大型堅穴住居跡があるのも興味深い。

大宰府と国府を繋ぐ官道（駅路）のうち豊前豊後ルートは豊津町の豊前国府から推田町越路、福岡、豊前市松江、荒堀、上毛郡衛、垂水庵寺、上毛郡衛、勅使道を経て、宇佐に向かうコースの幅6に規模の直線道路であったことが、各地での発掘調査で発見された路床面や側溝を繋いで復元が可能になった。現在の地割に名残を残す条里区割りも、官道を基準にしていたらしい。

青銅鈎帯が出土した豊前市大村石畑遺跡、円面硯、緑釉陶器が出土した荒堀雨久保遺跡などの例は官人層居住区か官衙関連遺跡であろう。また豊前市久路田六田遺跡では官道と異なる南北方向の五メートル幅道路遺構が発見されていて、豊前市久路上郷鈴田遺跡で石帯、久路土輪遺跡でも鈎帯が出土している。

律令体制の公地公民制は、やがて貧富の差や豪族層の中間搾取などによって変質して荘園化して行くが、この地域は宇佐神宮領に組み込まれていたようである。

平安末期から中世の宗教関係遺跡としては、国宝銅板経をはじめ多くの経塚、経筒が発見された豊前市求菩提山修験道遺跡群や如法寺跡などがあり、吉富町鯉生山古墳主体部脇からは経筒が出土している。

鎌倉時代には「下り衆」である宇都宮氏が犀川町木井馬場を拠点として京都・楽上郡に勢力を張った。南北朝時代には衰退し、替わって大内氏が豊前地方に進出する。

豊前市大村天神林遺跡、大村石畑遺跡は大内氏に与した宇都宮一族の山田氏の居館らしく、鳥越今井野遺跡や市丸三反田遺跡で中世の富豪農民層の屋敷あるいは居館、新吉富村城ヶ森遺跡、大平村今蔵遺跡、三毛門放生田遺跡でも居館跡が調査された。大村天神林遺跡からは金箔を貼った土師器など、多くの遺物が出土しており、大村石畑遺跡とともに大村城関連の施設と考えられている。

南北朝以降は、本地域は大内・毛利氏と大友氏の勢力争いの場となり、山城や平山城が多く築かれた。

註

1. 小池史哲1993「第一章 旧石器時代 第二節 豊前地方の旧石器遺跡」『豊前市史 考古資料』
2. 小池史哲1993「豊前遺跡」『豊前市史 考古資料』
3. 新田昭仁編1999「吉備向原遺跡・永久遺跡」豊前市文化財調査報告書第12集 豊前市教育委員会
4. 飛野博文編1997「金居塚遺跡Ⅱ」一般国道10号豊前バイパス関係埋蔵文化財調査報告書第7集 福岡県教育委員会
5. 横田義幸1997「衣採及び関連資料」前掲4所収
6. 高橋 章編1990「吉木遺跡」福岡県文化財調査報告書第83集 福岡県教育委員会
7. 小池史哲1993「小石原東遺跡」『豊前市史 考古資料』
8. 渡辺正久1983「福岡県築城部新吉富村垂水遺跡調査報告」『古文化談叢』第11集
9. 小川孝樹編1995「宇野代遺跡」一般国道10号豊前バイパス関係埋蔵文化財調査報告書第1集 福岡県教育委員会
10. 高橋幸編1990「土佐井地区遺跡」大平村文化財調査報告書第6集 大平村教育委員会
11. 大平村教育委員会が整理中
12. 前掲7
13. 前掲9
14. 賀川光夫1987「原史」『本郷漢学』
15. 緒方 泉編1992「小原谷Ⅰ」松田町文化財調査報告書第4集 松田町教育委員会
16. 推田町教育委員会が整理中
17. 賀川光夫1985「柳野貝塚」『中津市史』
18. 坂本憲弘他1979「石原貝塚・西和貝塚」宇佐市教育委員会・大分県教育委員会
19. 小池史哲1997「上原遺跡Ⅱ」一般国道10号豊前バイパス関係埋蔵文化財調査報告書第6集 福岡県教育委員会
20. 小池史哲・末永浩一1999「大平村東友枝遺跡の調査」『考古学ジャーナル』443号
21. 坂本祐子編2000「狭間宮ノ下遺跡（遺構編）」豊前市文化財調査報告書第13集 豊前市教育委員会

- 坂梨新了編2001『狭間宮ノ下遺跡(遺物編)』豊前市文化財調査報告書第14集 豊前市教育委員会
22. 豊前市教育委員会が整理中
23. 水ノ江和同編1996『中村石丸遺跡』熊田道路関係埋蔵文化財調査報告第8集 福岡県教育委員会
24. 小池史哲1992『山崎遺跡』椎田バイパス関係埋蔵文化財調査報告第7集 福岡県教育委員会
- 高橋 卓編1988『石町遺跡』椎田町文化財調査報告第2集 椎田町教育委員会
25. 椎田町教育委員会が整理中
26. 小池史哲1989『原井三ツ江遺跡』大平村文化財調査報告第5集 大平村教育委員会
27. 古村玲徳編『上原下路遺跡Ⅱ』…飯河川山岡川築堤関係埋蔵文化財調査報告3
28. 大平村教育委員会が整理中
29. 貫川光夫1965『高畑遺跡』『中津市史』
30. 豊前市教育委員会が整理中
31. 飛野博文・杉原敏之1994『牛頭天王遺跡 垂水高木遺跡』新古高村文化財調査報告書第8集
32. 馬川弘毅『中島野遺跡』新古高村文化財調査報告書第3集 1978
33. 杉原敏之編1997『桑野遺跡・上の熊遺跡・小松原遺跡』上巻一般国道10号線豊前バイパス関係埋蔵文化財調査報告第6集 福岡県教育委員会
34. 木下修・水ノ江和同編1991『安武深田遺跡』椎田バイパス関係埋蔵文化財調査報告第4集 福岡県教育委員会
35. 中岡信志編1992『トノノ遺跡』椎田バイパス関係埋蔵文化財調査報告第8集下巻 福岡県教育委員会
36. 飛野博文1998『鶴ヶ原遺跡』一般国道10号豊前バイパス関係埋蔵文化財調査報告第10集 福岡県教育委員会
37. 小池史哲1996『上原遺跡Ⅰ』一般国道10号豊前バイパス関係埋蔵文化財調査報告第5集 福岡県教育委員会
38. 小川泰樹編1998『大塚本遺跡』一般国道10号豊前バイパス関係埋蔵文化財調査報告第9集 福岡県教育委員会
39. 飛野博文1993『穴ヶ葉山遺跡』大平村文化財調査報告書第8集 大平村教育委員会
40. 飛野博文1994『能満寺古墳群』大平村文化財調査報告書第9集 大平村教育委員会
41. 飛野博文編1997『Ⅲ3 西方古墳』『金屋塚遺跡Ⅰ』一般国道10号線豊前バイパス関係埋蔵文化財調査報告第4集 福岡県教育委員会
42. 伊崎俊秋編1991『輪牛山古墳』吉富町文化財調査報告書第3集 吉富町教育委員会
43. 酒井仁夫1983『天神寺古墳・広通寺古墳』吉富町文化財調査報告書第1集 吉富町教育委員会
44. 新古高村1995『新古高村史』
45. 酒井仁夫1983『穴ヶ葉山古墳群』大平村文化財調査報告書第3集 大平村教育委員会
- 飛野博文・末永浩・1999『史跡穴ヶ葉山古墳』大平村文化財調査報告書第10集 大平村教育委員会
46. 前掲7
- 47・48. 大平村教育委員会が整理中
49. 森田勉編1976『垂水庵寺』新古高村文化財調査報告書第2集 新古高村教育委員会
50. 森田勉1981『友枝瓦窯跡・山田瓦窯跡』九州古瓦図録 九州歴史資料館
51. 高橋 卓1988『友枝遺跡』大平村文化財調査報告書第4集 大平村教育委員会
52. 矢野和昭1997『大ノ瀬下大坪遺跡』新古高村文化財調査報告書第10集 新古高村教育委員会
- 矢野和昭1998『大ノ瀬下大坪遺跡Ⅱ』新古高村文化財調査報告書第11集 新古高村教育委員会
53. 新古高村教育委員会が整理中
54. 豊前市教育委員会が整理中
55. 徳辺元明1992『荒瀬南久保遺跡』福岡県文化財調査報告書第99集 福岡県教育委員会
56. 豊前市教育委員会が整理中
57. 豊前市教育委員会が整理中
58. 豊前市教育委員会が整理中
59. 小田高・雄1985『九州古代文化の形成』下巻 学生社
- 重松敏美・宮小路賀安・丸山康晴1976『求菩提山経塚』豊前市教育委員会
- 重松敏美他1977『求菩提山』豊前市文化財調査報告書第2集 豊前市教育委員会
- 高橋 卓編1989『求菩提山修験道遺跡』福岡県文化財調査報告書第84集 福岡県教育委員会
- 豊前市教育委員会1992『求菩提山』豊前市文化財調査報告書第8集 福岡県教育委員会
60. 酒井仁夫編1983『如法寺』豊前市文化財調査報告書第4集 豊前市教育委員会
61. 小田高・雄他1983『岡田氏収集考古資料集成』吉富町教育委員会
62. 豊前市教育委員会が整理中
63. 豊前市教育委員会が整理中
64. 大平村教育委員会が整理中
65. 新古高村教育委員会が整理中
66. 大平村教育委員会が整理中
67. 古田東明1995『三毛門放生田遺跡』福岡県文化財調査報告書第121集 福岡県教育委員会

Ⅲ. 調査の内容

1. 市丸城居屋敷遺跡

市丸城居屋敷遺跡は、豊前平野西部の岩岳川によって形成された沖積平野の微高地に位置しており、本来の標高は現在よりもやや高かったようだが、宅地開発による削平のため、旧状を留めない。遺跡は中世の平城館として周知されており、市丸集落の中心部に広がっている。

今回の調査区は、豊前市大字市丸214-1・215-1・216-1にあたり、遺跡の西端にあたる。調査範囲は宅地であり、大きく攪乱が入っていることが予測される南東隅は、あらかじめ調査範囲から外している。

遺構が密に分布するだけでなく、整地層が存在しており、下層遺構を調査するために手掘りで整地層を掘削しなければならず、調査が予想以上に時間のかかるものとなったため、調査担当者を1名増員して対応した。

調査区は、便宜状4区に分け、西からⅠ～Ⅳ区の名称を付けている。遺構としては区をまたいでいるが、遺構・遺物の説明は区ごとに行う。

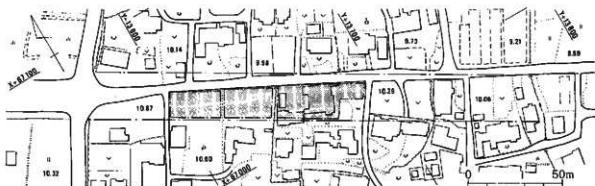
なお、本遺跡出土遺物の分類・時期観は、中国製陶磁器は横田・森田¹¹⁾分類、備前焼は岡壁¹²⁾分類、陶器措鉢は佐藤¹³⁾編年、瓦質土器は谷口¹⁴⁾編年、国産陶磁器は「九州陶磁の編年¹⁵⁾」の各論文を参考にした。

1) Ⅰ区の遺構と遺物

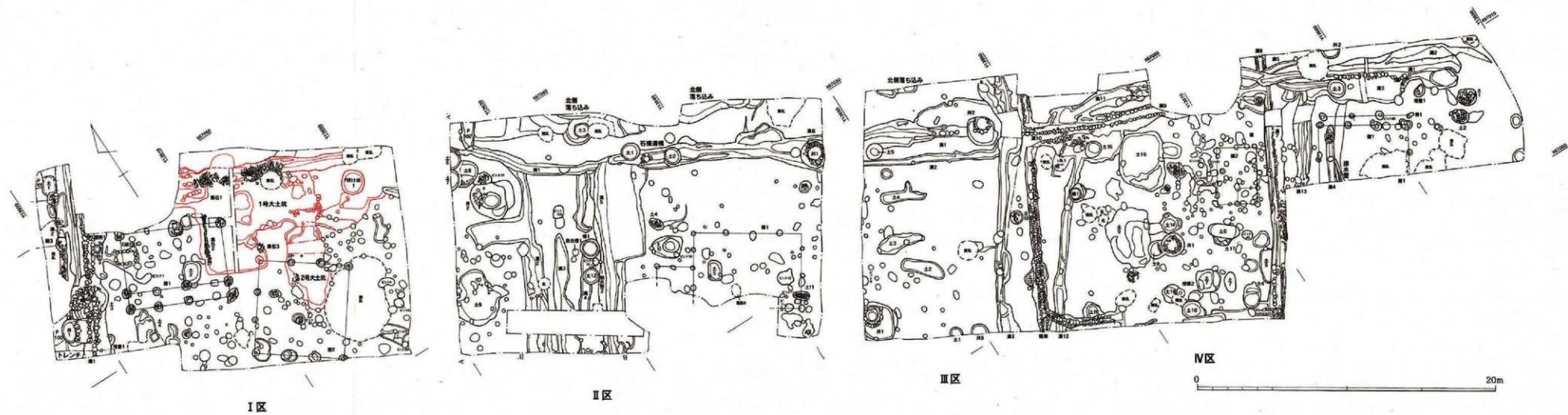
Ⅰ区からは、礎石建物跡2棟、掘立柱建物跡1棟、土坑4基、円形土坑1基、大土坑2基、石組上坑1基、便所遺構1基、集石遺構3基、井戸1基、埋甕遺構1基、溝状遺構3条が検出された。

1号礎石建物跡（図版2-1～3、第4図）

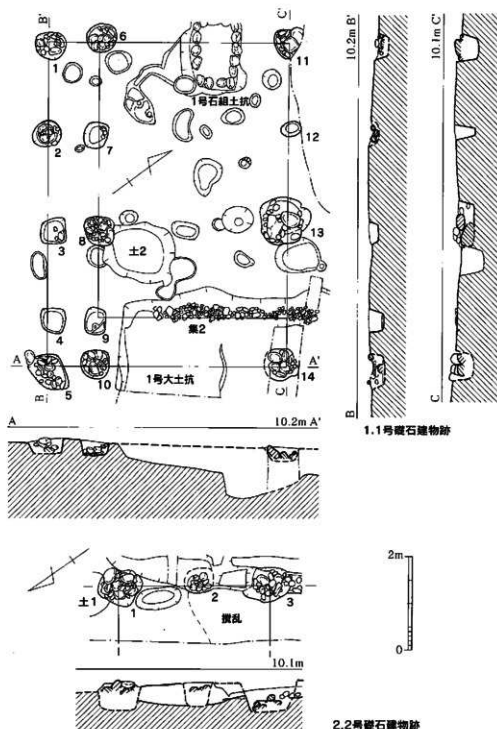
Ⅰ区の南側に、2号土坑と1号大土坑を切って検出された。3.94×5.93mを測る1×3間に、1.1m幅の底があるいは軒が南・東の2辺に付く建物に復元される。主軸はN-54°-Wで、1号



第2図 市丸城居屋敷遺跡位置図(1/2,000)



石組土坑の主軸と一致し、かつ2号集石とは垂直になる。柱穴は方形のものがほとんどである。礎の入るものは、小礎を柱穴縁辺に配し、中央に人頭大の礎を1個から数個、中央が平坦になるかやや窪むように置いている。したがって、これは根礎石であり、本来はさらにこの上に礎石を据えていたと推定される。礎の入っていないものも、柱穴が浅いことから、本来は礎が入っていたであろう。柱12のみ円形掘り方で石を持たないことから、ここには他のものと同様の柱は立たなかったものと思われる。



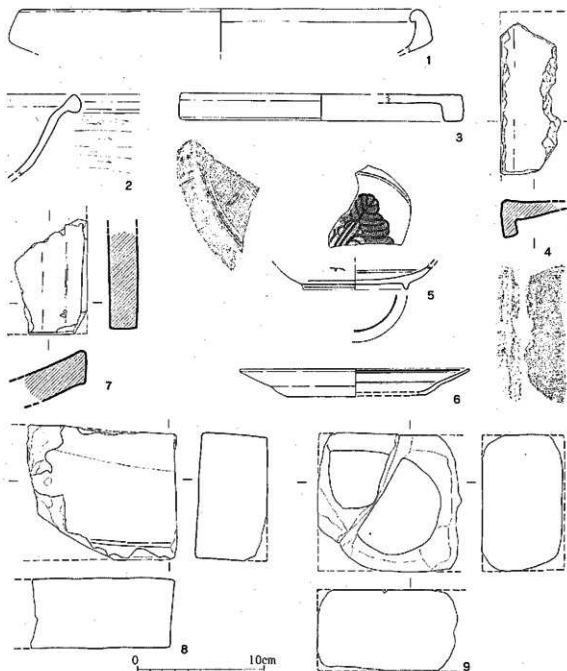
第4図 I区1・2号礎石建物跡実測図(1/80)

柱穴は大きいもので1辺100cmあるが、1辺60cm前後のものが多い。この大きさに見合う平な石材は3号土坑に見ることができる。柱穴の深さは15~20cmと非常に浅い。

出土遺物(図版34-1・35・36-3、第5図1~9・第80図1)

土師質土器(第5図1・2) 1は柱4から出土した焙烙で、口縁部はナデ、体部は未調整。本来黄白色だが、外面は煤付き、内面も使用のため変色している。2は柱3から出土した鉢で、外面は削り、内面はナデ。内外白灰色を呈し、変色は認められない。

瓦質土器(第5図3・4) 3は蓋で、天井部は未調整、内面はハケ、口縁部はナデであることから、天井部を下にして成形したものであろう。色調は内外黒色を呈する。19c代か。4は柱8出



第5図 1区1号礎石建物柱穴出土遺物実測図(1/3)

上の平面方形の瓦葺蓋で、上端に端部の肥厚部分の一部が残っているため、方形の隅部分に近い部位とわかる。天井部はハケ、側面は磨きだが単位は不明。内面から口縁部内面まで目の細かい布目痕が残る。口唇部の外端部に段があることから、この段までの型で成形したものと分かる。

染付（第5図5・6） 5は皿で、外面に烏か花文、見込みに大根か蕨か型紙刷りされている。呉須は青紺色で透明釉を全面にかけ、畳付のみ釉剥き、高台内面下端に砂目が付着する。胎は白。6は柱4出土の上げ底の皿で、口縁部にコバルトブルーに発色する界線がある。19cの肥前系か。

平瓦（第5図7） 7は柱4出土で、凹面は板状工具によるナデ。端面に砂目が付く。凸面に変色があり、凹面は本来の器面で側面には煤が付着する。

レンガ（第5図8・9） 8は柱7出土のレンガで、コーナー部分が融解してガラス化している。赤茶褐色を呈する。9は柱8出土のレンガで焼成不良のためか、非常に軟質で触るだけで砂が崩落する。器面がほとんど残っておらず、色調も暗灰白色を呈し、器面は煤が付着する。

磁石（第80図1） 1は上面のみ使用痕が残る、他面は欠損している。天草石で、26gを測る。

2号礎石建物跡（図版2-1、第4図）

1区の北西隅に、1号土坑・2号溝状遺構を切って検出された。1号礎石建物跡と同様の礎の入る方形柱穴が3基のみ検出されており、柱間スパンから南北に伸びることはない。渠行2間の西に展開する建物跡を想定した。1号礎石建物跡の北辺の延長上に柱3があり、渠行の方向が等しいことから、1号礎石建物跡の一部とも考えられるが、1号礎石建物跡は北には展開しないと思われるので、別遺構として報告する。

渠行1.64mで、主軸はN-54°-Wと推定される。柱穴内の礎は1号礎石建物跡に近いが整っていない。柱穴の径は大きいもので長軸95cm、短軸80cmあるが、柱2だけがやや小さく、入る礎も少ない。礎を取り除いて掘削しなかったため、柱穴の深さはわからない。出土遺物に図化できるものはない。

1号掘立柱建物跡（図版2-4、第6図）

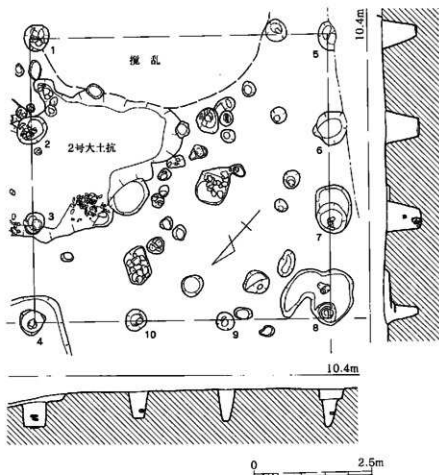
1区の南東隅に、2号大土坑と切り合って検出されたが、前後関係は不明。6.06×6.14mを測る3×3間の建物跡で主軸はN-45°-W。柱穴は平面円形で、径は大きいもので長軸62cmあるが、30cm前後のものが多い。深さは65～80cmで、比較的残りが良い。柱痕は検出されなかったが、柱穴の中心に小礎が集中しており、扁平な石が正置するものがあることから、中位で柱を据え直しているようだ。出土遺物に図化できるものはない。

1号土坑（第7図）

調査区北西隅部で発見された楕円形の土坑で、2号溝の西側に近接する。南端部に礎石根締め集石が乗るが、本来は南北2.3m、東西0.95m、深さ0.2m強の規模である。黒色土を含んで濁った黄褐色砂質土が堆積していた。

出土遺物（図版20・22、第8図1～4）

1・2は土師質の焙烙で、1は外面の口縁下は削り、外面口縁部から内面はナデ。白黄橙色を呈する。内外黒灰色だが、焼成によるもの。2は口縁部内面が玉縁状で、外面の口縁下は削り。外面口縁部から内面はナデ。口唇部より外面は煤付、内面は黄橙色を呈する。高村焼系。3は瓦質火鉢の脚部で、内外摩滅している。内外淡黒灰色を呈する。19c代か。4は染付の端反碗で、やや暗い透明釉が白色の胎にかかる。外面に花文、見



第6図 1区1号掘立柱建物跡実測図(1/80)

込みに崩れた「寿」が淡暗青灰色の呉須が素描きされている。見込みにハマの目跡が4ヶ所あり、髹付は釉刺ぎ。肥前V期の1820～1860年代。

2号土坑 (図版3-1、第7図)

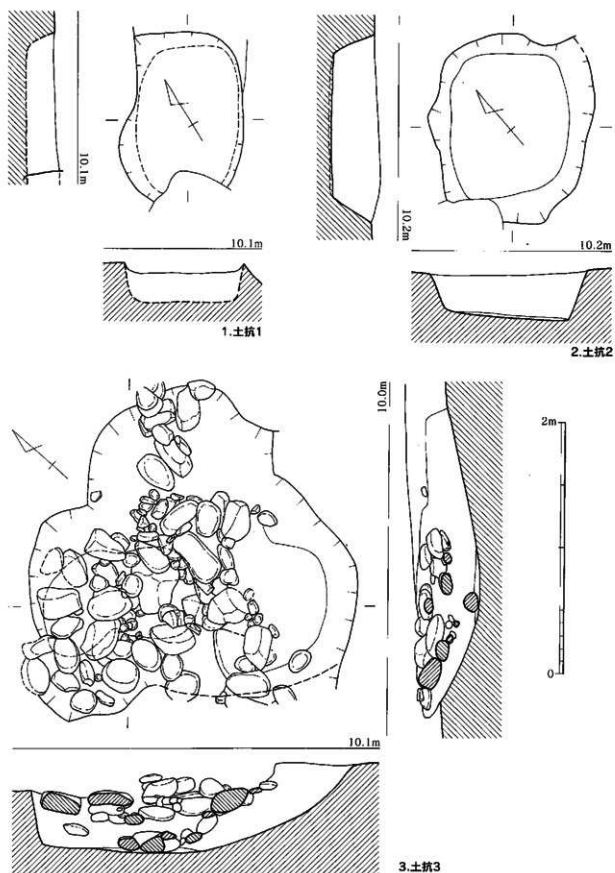
1区のはほぼ中央部で発見された不整形の土坑で、南西部に礎石根締め集石が乗るので、礎石建物に先行する時期の土坑である。長辺1.5m、短辺1.2m、深さ0.4mの規模。

出土遺物 (図版20、第8図5～7)

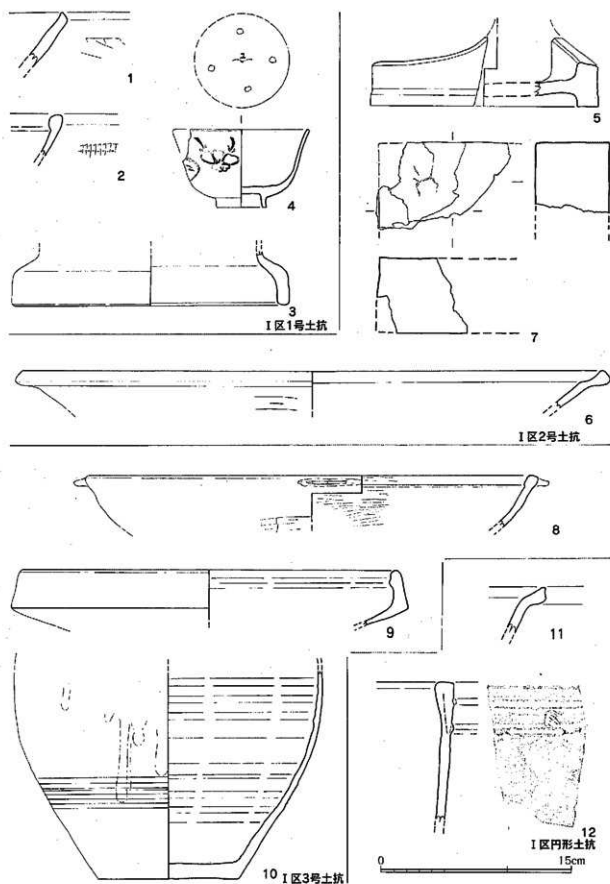
5は土師質の焔炉であろう。大きな風口がつくものと思われるが、確証に欠ける。内外黄橙色で変色は見られない。6は土師質土器の鉢で、外面の口縁下は削り。外面口縁部から内面はナデ。本来黄白色だが、内外若干くすむのは煮沸使用のためか。7はレンガで、黄橙色から赤褐色を呈する。1面未調整の面がある。

3号土坑 (図版3-2、第7図)

1・2号溝埋没後の掘削による不整形土坑で、集石が伴う攪乱的な土坑と判断して調査したが、



第7图 1区1~3号土坑实测图(1/30)



第8图 I 区1~3号土坑·1号凹形土坑出土遗物实测图(1/3)

この集石は1号井戸と1号溝を繋ぐ敷石的な施設であった可能性が高い。

出土遺物（図版20・22・36・3・38、第8図8～10・第80図5・6）

土師質土器（第8図8・9） 8は耳状把手の付く焙烙で、外面の口縁下は削り。外面口縁部から内面は丁寧な磨き。外面煤付、内面は橙白色を呈する。高村焼系。9は焙烙で、外面の口縁部から内面はナデ。外面体部は未調整。外面には煤付。内面には黄橙白色。

陶器（第8図10） 小型甕で、内外暗灰緑色の灰釉をかけた後、暗褐色と乳白色の薬灰釉を流し掛けしている。底部は釉剥ぎで削った痕跡が残る。胎は暗黄灰色。口縁部がないため不明瞭だが上野・高取系の17c代か。

砥石（第80図5・6） 5は上面にのみ擦痕が見られ、端部に使用痕が残る。他の平坦面は成形時のもので、下端面のみ新欠である。減り具合から、ほとんど使用されていないようだ。天草石であろう。6は上面には使用痕があるが、下面は平滑ながら使用していない。上端面は欠損後端部と面を整える目的で擦られている。下端面と左側面は、面は擦られていないが端部が整えられている。右側面は全ての縁に2～3mmの切り目を入れた後で割っており、その後は面や端部の処理をしていない。上面に見られる沈線は2～3mmで、使用痕としては幅が狭く深すぎるので、右側面に見られた分割のための切り目と考えられる。茶褐色の筋の入ることから天草石であろう。

鉄製品（第78図7） 2枚の板状鉄片が接合されたもので、鋳造品の可能性がある。

4号土坑（図版3・3、第14図）

3号土坑の南東側に発見された不整形土坑で、コンクリート基礎と溜樹で南半部を失うため、長方形ないしは溝状かも知れないが不明ながら北端部が僅かに深い。浅い部分の中央部では溜樹下にかかるように赤化した硬化焼土面が確認された。陶器片があるが、小片のため図化できない。

出土遺物（図版38、第78図11） 11はヤスリで磨いた面が剥離することから鋳造品か。

1号円形土坑（図版3・4・5、第14図）

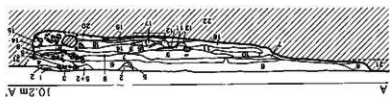
I区の東北隅部に発見された円形土坑で、直径1.6m、深さ0.4mの規模。黄灰色砂質層に掘り込まれ、黒色土と黒色土と黄褐色混じりの茶褐色土が堆積していた。

出土遺物（図版20・38、第8図11・12、第78図8）

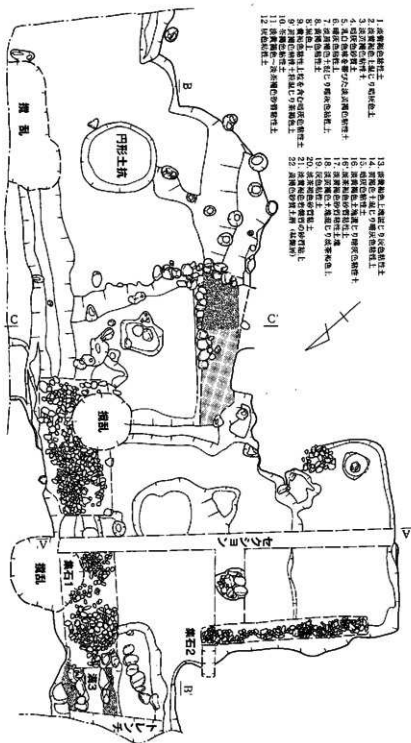
11は土師質鉢で、内外ナデ。外面口縁部は淡灰黒色。外面下と内面は灰白色を呈する。12は瓦質灰鉢で、外面の口縁下に2条の貼付突帯があり、突帯間にスタンプによる施文がある。外面は黒灰色、内面はぶい灰色を呈する。ピット7出土のものと同一個体の可能性がある。第78図8は不明鉄製品で、ブリキ状の板を折り返して中空にしたもの。

1号大土坑（図版4・4、5・1～4、6・4、第9図）

I区の北半部の落ち込みを大土坑として掘り下げたが、東西約14m、南北の最大約7mの範囲である。堆積土の状況は低地部分の盛土であり、1・3号溝で区画された部分の整地であろう。そして1号集石遺構は更に時期の下る整地面であることになる。調査区域南側を含めた屋敷地の



- 1 弥生前期の土
- 2 弥生前期の土
- 3 弥生前期の土
- 4 弥生前期の土
- 5 弥生前期の土
- 6 弥生前期の土
- 7 弥生前期の土
- 8 弥生前期の土
- 9 弥生前期の土
- 10 弥生前期の土
- 11 弥生前期の土
- 12 弥生前期の土
- 13 弥生前期の土
- 14 弥生前期の土
- 15 弥生前期の土
- 16 弥生前期の土
- 17 弥生前期の土
- 18 弥生前期の土
- 19 弥生前期の土
- 20 弥生前期の土
- 21 弥生前期の土
- 22 弥生前期の土



10.0m C'



弥生前期の土

0 2.5m

第9図 I区1号大土坑実測図(1/80)

高地側を掘削した土砂を低い側に盛土しているため、地山に含まれる硬い粘土塊のブロックが含まれている。堆積土の下層が旧地表でなく、部分的に岩盤状の粘土塊の露呈する面であることから、低い部分はそれ以前の北側区画部分を平坦化させた掘削面であった可能性が高い。

なお、大土坑東南部のL字形列石は、3号溝から約3.0m南側に位置していて、東側の短い列石面から西側に約3.0mの位置にある畦状の突起と対峙し、列石の東側約3.0mにも段がみられ、南側では2号大土坑に続く。また畦状突起は南西側に隅丸の角を介して段に続く。南北土層図においても、3号溝から2.7m、4.3mの位置に段や堆積土の変化がみられるので、盛土整地時以前に何らかの区画単位あるいは地下げの作業単位があったとみななければならず、L字形列石が3号溝区画時よりも先行することになる。

2号大土坑（図版4-4、第10図）

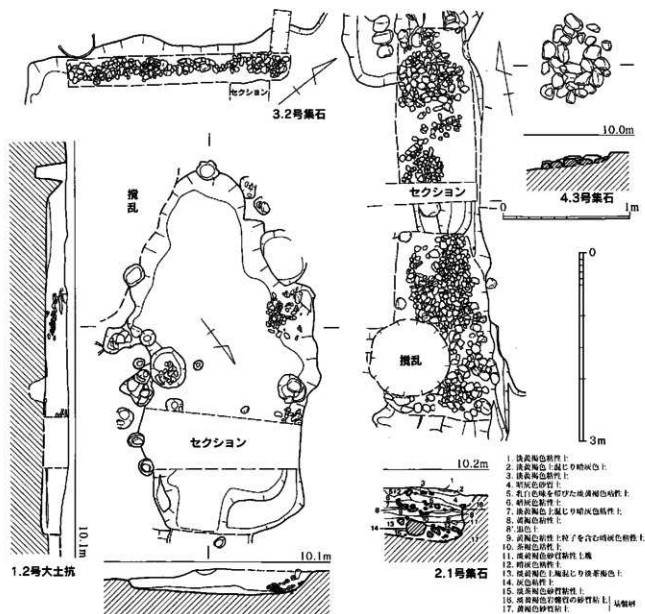
1号大土坑の南西側に続く落ち込みであり、南北約5.0m、東西約3.0m、深さ0.3m前後の落ち込みで、池地を造作しようとしたものか、あるいは地形の傾斜によって溝状に浸蝕された落ち込みを拡張するようにして土取りした跡であろう。

1・2号大土坑出土遺物（図版20・22・36・2・3、第11～13図・第80図10）

整理段階で、1・2号が混在したため、一括して報告する。

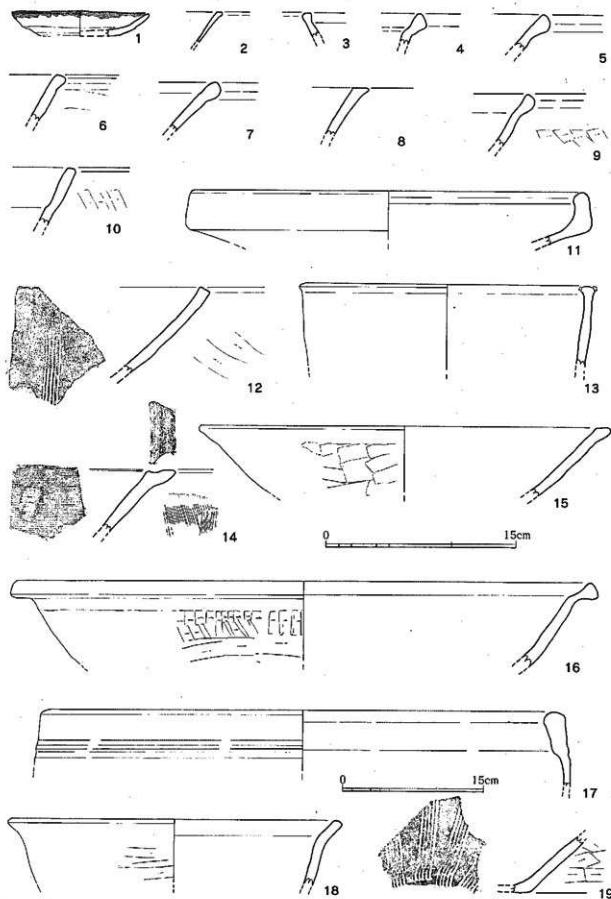
土師質土器（第11図1～19） 1は土師器の灯明皿で、口縁部に煤が付着している。底部は糸切り。内外橙褐色を呈する。口径10.8cm、器高1.9cmで、体部中に屈曲を持つ特徴から北九州市小倉城下屋敷跡1号土坑出土の土師皿に近く、17c前半と考えられる。

2は小型器種で杯だらうか。器壁の薄い小型器種である。内外ナデで、暗褐色を呈する。3は口縁が内湾する小型器種で鉢になるか。内外ナデで、外面淡黄灰色、内面橙色を呈する。4～10は口縁部が外にやや肥厚する鉢の口縁部である。4は口縁部がクの字に屈曲するもので、全面摩滅している。外面黄白色、内面灰白色を呈する。5は口縁部が玉縁状で、外面の口縁下は削り、外面口縁部から内面はナデ。白黄褐色を呈する。6は外面の口縁下は削り、外面口縁部から内面はナデ。外面白黄褐色、内面橙色を呈する。7は内面口縁下に小さな段をもつもので、外面の口縁下は削り、外面口縁部から内面はナデ。外面は炭化物が付着し、内面は淡灰黄色を呈する。8は口唇部に面をもつもので、外面は炭化物が付着し、口唇部から内面は茶褐色を呈するので、外蓋で煮沸使用されている。9は外面が削り、外面口縁部から内面はナデ。外面は煤付、内面は灰茶色。10は内面口縁下に小さな段をもつもので、外面の口縁下は削り、外面口縁部から内面はナデ。外面は煤が付着していないがくすんでいる。内面は淡黒茶色を呈する。11は焙烙で、外面口縁部から内面はナデ。体部は未調整。外面は煤付、内面は淡黄白色。12は口縁部がやや内湾する鉢で、外面の口縁下は削り、外面口縁部から内面はナデの上に5本単位の摺目が入る。外面は煤が付着していないが黒灰色でいぶされている。内面にはぶい黄褐色を呈する。13は身の深い鉢で、口唇部は端部が欠損しているが、内面には丸みをもち、外面には突出するものと思われる。全体に器壁が剥離しているが、使用のためであろうか。14は口唇部にわずかに窪みのある平坦面をもつもので、外面は縁下が縦ハケ。内面は横ハケ。口縁部は内外ナデ。色



第10図 I区2号大土坑・1～3号集石遺構実測図(4は1/30、他は1/60)

調は内外明黄褐色で、変色は見られない。15は8と同一個体の可能性があるが若干口縁形態が異なる。外面の口縁下は削り、外面口縁部から内面はナデ。外面は煤が付着していないが黒灰色でいぶされている。内面は茶褐色を呈する。16は鉢である。外面の口縁下は横方向の削りで、工具端部が短い単位で残っている。外面口縁部から内面はナデ。外面は橙黄白色で焼成時にくすんでいる。黄茶内面は白色。17は大甕で、内外ナデ。タタキ成形と考えられるが、内面にはタタキ当て具痕がナデ消されている。内面口縁部には剥離があるが、使用時のものかもしれない。内外はいぶされているようで暗灰色を呈する。18は口縁部が肥厚せず反する鉢で、外面の口縁下は削り、口縁部はナデ。内面は工具によるナデ。内外淡褐色で、内面には鉄分が吸着してい



第11图 I区1・2号大土坑出土土師質土器実測図(17は1/4、他は1/3)

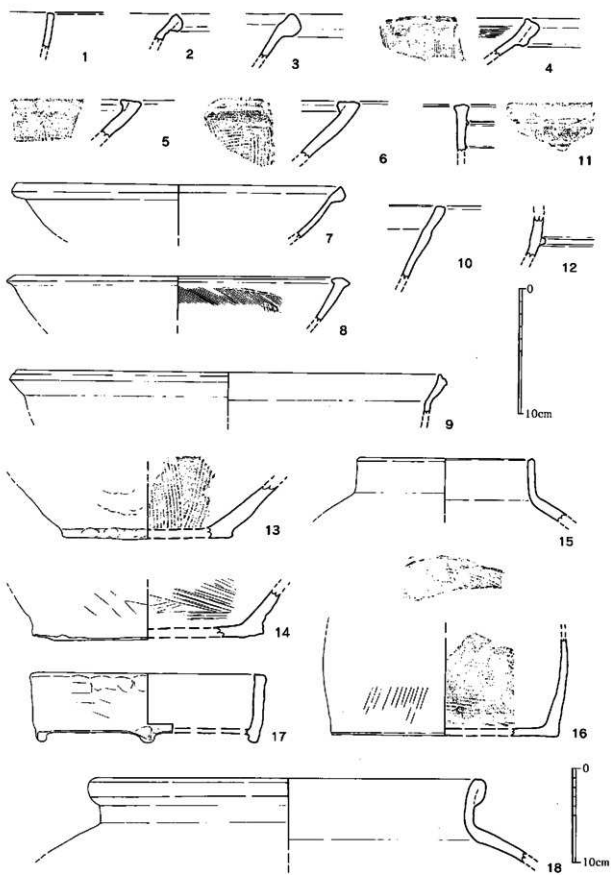
る。19は外面の口縁下は削り、外面口縁部から内面はナデの上に5本単位の描目が入っている。底部はナデ。内外風化しており、黄灰色を呈する。

瓦質土器（第12図1～17） 1～10は鉢の口縁部である。1は口縁にゆがみがあるので、片口の可能性がある。外面ケズリ、外面口縁部から内面はナデ。内外にふい暗白灰色。2は外面の口縁下部までケズリ。内面はナデ。3は内外ナデ。外面煤付で黒茶色、内面灰色。4は外面ケズリ、外面口縁部はナデ、内面口縁部は目の細かいハケで、9～10本単位の描目が見られる。外面は灰黄茶色でス付。内面は黒灰色を呈する。5・6は同一個体の可能性があるが、色調が若干異なる。外面から口縁部内面までナデ。内面は横ハケの上に描目が入る。外面は黒灰色、内面は5が灰色で、6は暗白色を呈する。7は外面ヘラ削り、外面口縁部から内面はナデ。淡灰色を呈し、外面煤付。8は口唇部が丸みをもって肥厚する鉢で、外面はナデ、内面には細かいハケ。描目が部分的に見られる。色調は淡灰色を呈する。9は内外ナデ、内外灰～黒灰色を呈し、外面に炭化物付着。10は口縁内面に小さな段を有するもので、内外ナデ、内外灰～黒灰色を呈し、外面に炭化物付着。11は火鉢の口縁部で、内外ナデ。突帯間には菊花文のスタンプが入る。色調は内外灰～黒灰色を呈する。12は湯釜の胴部片で、小さな突帯が貼り付けられている。内面白灰色、外面は煤が付着する。13・14は鉢の底部である。13は、外面は押さえの上をナデ、内面は横ハケの上に描目が入る。底部には板状圧痕が残る。色調は外面黒灰色、内面灰黄茶色。14は外面がヘラ削り、内面は横・斜めのハケが入る。底部には板状圧痕と思われる凹凸が残る。15は湯釜の口縁部で、内外ナデで、灰色を呈する。器面の荒れなどは見られない。16は小型の甕か。体部は丸みを持っており、上位は内湾するものと思われる。外面はハケをナデ消している。外底部はナデ、見込みはハケ。内面は横ハケで、器面の斑状刺摩が見られるので、煮沸使用している可能性がある。外面は部分的に燻されて光沢をもつ、内面は灰白色を呈する。17は小型の火鉢で、外面は板状工具による横ナデ、口縁部が指頭圧痕。内面はナデ。外面は灰色、内面は黒灰色。

陶器（第12図18、第13図1～5） 第12図18は甕の玉縁口縁部で、内外ナデ。外面から内面口縁部まで暗灰褐色、内面は茶褐色で、胎はにぶい灰褐色。備前焼Ⅳ期で15c代。第13図1・2は陶器擂鉢で、1は外面の体部下端には指頭圧痕がある。使用のため描目が潰れて平滑になっている。底部も摩滅しており、調整方法がわからない。描目は8本単位。無釉で、胎は暗灰色。唐津系と思われる。2は貼付け高台をもつ底部で、外底部は回転ヘラ削り。描目は10本単位の幅広のもの。鉄釉を全面に厚くかけ、胎は橙色で、内外ともに釉剥ぎや重ね焼きの痕跡が見られない。上野・高取系Gタイプで18c末～19c中葉。3・4は京焼き風の陶器碗で、黄灰色の鉄釉が全面にかかる。髹付は釉剥ぎ。胎は黄白色で4は貫入が日立つ。17cの唐津系か。5は陶器の灯明受皿で、底部糸切り。内面は鉄釉がかかっており、受け部分は欠損しているため、傾きは不明。外面は露胎。胎は暗茶褐色。肥前系か上野・高取系で、18c末～19c代。

白磁（第13図6） 中国製の小さな玉縁口縁をもつもので、乳白色の釉を白色の胎にかけている。横田・森田分類の白磁Ⅲ類にあたる。11c中頃～12c前半代。

染付（第13図7） 仏教器で、濃青灰色の呉須で透明釉をかけ、胎は白色。型紙刷の蛸唐草を施す。肥前Ⅳ期の1690～1780年代。

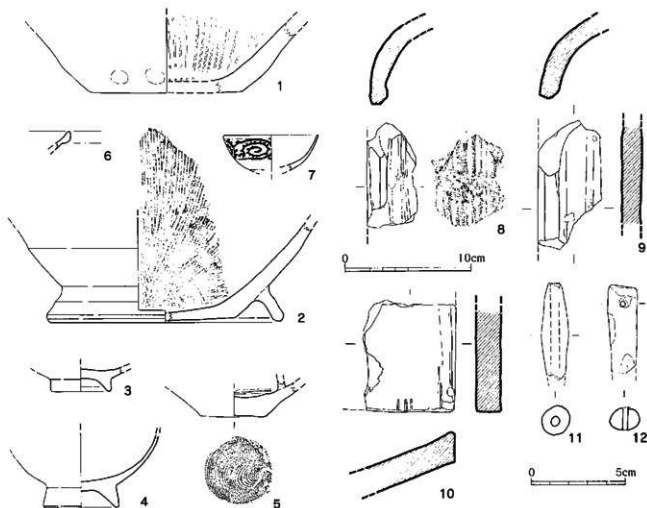


第12図 I区1・2号大土坑出土瓦質土器・陶器実測図(7・9・18は1/4、他は1/3)

瓦（第13図8～10） 凸面にナデ、凹面に横脊痕を残す。8は両面灰色。9は凸面黒色。凹面黒灰色。10は平瓦で、凹面に板状ナデの痕跡が残る。土師質のような淡黄白色を呈す。

土錘（第13図11・12） 11は管状土錘で、にぶい暗黄灰色を呈し、9.7gを測る。12は棒状土錘で、にぶい暗橙色を呈し、12.6gを測る。

砥石（第80図10） 10は4面使用しており、上面がもっともよく使用されているが研磨痕はほとんどない。長石石英斑岩製で変色は見られない。27.2gを測る。



第13図 Ⅰ区1・2号大上坑出土陶磁器・瓦実測図(11・12は1/2、他は1/3)

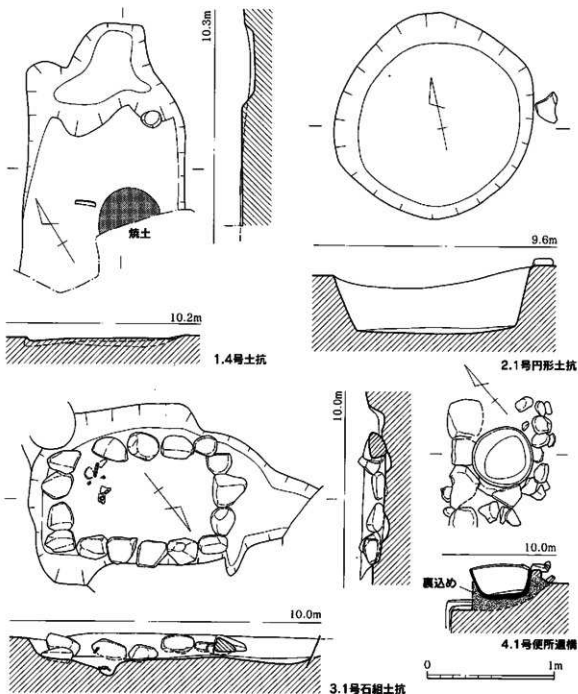
1号石組土坑（図版4-1～3、第14図）

1号溝の東側に近接して発見された。長辺1.8m、短辺1.4m、深さ0.2mも残らない規模で、北西側が溝状に飛び出す不整長方形の掘り方に、円礫を一段に並べて、長辺1.1m、短辺0.6mを区画している。区画内には暗灰色泥じりの暗黄褐色土が堆積していたが、石の間などに目貼りや板材などの痕跡は確認できなかった。区画内では南東部で骨製櫛と漆塗碗らしい漆膜が床面から浮いた状態で発見され、磁器碗片が床面の小ピットから出土した。骨製櫛は西側に歯を向けて

いたが、長さ10cm、幅2.5cmの大きさ。漆膜は1.5cm四方ほどの大きさであったが、骨製櫛とともに脆弱なため、図示に耐えない。

出土遺物（図版22、第16図1・2）

1は陶胎染付の筒形碗の底部片で、見込みに崩れた「寿」を配する。呉須は外面が淡青灰色、見込みは暗緑青灰色。透明釉が薄く発色が悪く、乳白色の白磁のように見える。畳付は釉剥ぎ。胎は白色。肥前V期の1780～1810年代。2は陶器碗で、白色の灰釉を全面にかけ、畳付は釉剥ぎ。胎は橙色。高取焼系か。



第14図 1区4号土坑・1号円形土坑・1号石組土坑・1号便所遺構実測図(1/30)

1号便所遺構 (第14図)

1号溝の東肩部で発見された。列石の上に堆積した土砂を掘り込んで陶器甕を据えた際の漆喰が残る。北側に僅かに傾いた状態で埋設されていた。

1号集石遺構 (図版5-3、6-1~3、第10図)

3号溝と1号大土坑の北端部を覆う小砂利の集積である。軟弱な地盤を堅固に締めるために施されたものであろう。長さ約6.0m、幅1.2m前後の広さで、上面はほぼ平坦で標高10.0m前後。概ねN-63°-W方向を向き、3号溝上部に相当する。

出土遺物はいずれも小片のための図化していないが、土師質土器片の他、瓦質の摺鉢片で、10本単位の揃目がある胴部片。銅緑釉のかかる陶器碗片が出土している。

2号集石 (図版6-1、第10図)

1号集石の西端部から約1.8m離れてほぼ直角方向に発見された小砂利の集積で、1号大土坑の一部を覆う。長さ約3.2m、幅0.2m前後の広さ。主軸方向N-27°-E方向を向き、上面はほぼ平坦で、標高10.0m前後である。1号集石と期を同じくして施設された可能性が高い。

遺物は、銀化した瓦片や陶器片がわずかに出土している。

3号集石遺構 (図版7-1、第10図)

1号大土坑の南端部で発見された小砂利の集積。直径約0.6mの規模で、上面の標高は9.8m前後。1・2号集石のような帯状でなくスポット的な集積であるので、むしろ礎石塊石の下に根締めであろう。

出土遺物 (第16図3)

3は土師質大甕で、口縁部内面は細かいハケ、肩部は同心円文のタタキ当て具痕の上端部のみが残り、当て具痕自体はナデ消されている。色調は黄白色を呈し、変色は見られない。

1号井戸 (図版3-6、第15図)

調査区南西隅部で発見された井戸で、2号溝埋没後に掘削されている。石積みの楕円形井戸枠を有するが、西側は擾乱で上部を失う。南北約1.2m、東西約0.8mの広さで、約1.0m分まで掘り下げたが、時間的制約などで全掘できなかった。

出土遺物 (図版20・22・37、第16図4~7、第81図2・3、第82図2)

4は土師質の蓋で、天井部は敷き台から外して未調整。それ以外はナデで、調整時の指紋が残る。黄褐色を呈し変色はない。5は土師質鉢で、口縁部から外面は煤付きで、内面は使用のため灰色に変色しており、明瞭に分かれることから、外蓋で煮沸されたと考えられる。6は染付の半球形碗で、やや暗い透明釉がかかり、胎は白色。発色の悪い黒茶色のコンニャク印判による星梅鉢文と、見込みに五弁花が入る。木原波佐見系V-3期(1780~1810年代)。7は半磁器とでもいうべき堅緻な陶器の皿で、銅緑釉が外面に薄く、内面に濃くかかるため、外面オリーブ色、

内面濃緑灰色を呈する。外面下位は露胎。胎は灰色。肥前陶器Ⅳ期の1690～1780年代。

石臼 (第81図2・3) 2は茶臼の上臼で、復元径は19.2cmである。上面のノミ痕ははっきりせず、擦り目はよく使い込まれており摩滅しているところもある。擦り目の単位がわかることはないが5分割であろう。石材は多孔質の凝灰岩で、白色粒子を多く含む。変色はなく、淡灰色を呈する。1.9kgを測る。3は上臼で上面のノミ痕は見られない。擦り目はよく摺られて摩滅しておりほとんど残っていない。多孔質の軟質凝灰岩で小豆色を呈する。2.90kgを測る。

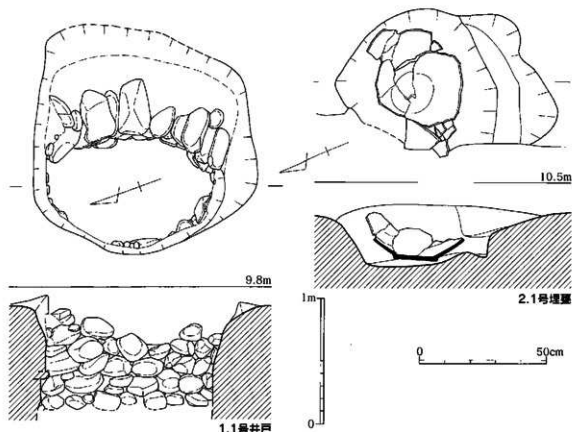
台石 (第82図2) 平坦面をもつが、加工痕は見られなかった。面を持って剥がれる性質の石材のためか。堅緻な凝灰岩で、側面は削られていることから、本米大きいものであったとわかり、石棺や古墳の石室石材のようにも見える。表面は風化しており、擦痕も観察できない。上面は斑状剥離があり、赤変している部分もあるので火を受けているのは間違いない。10.15kgを測る。

1号埋甕 (図版3-7、第15図)

1号溝の東肩に近接して発見された。素掘りの土坑に素焼きの甕が埋設されたもので、胴下半部のみが残されていた。甕底部は約3°南側に傾く。

出土遺物 (図版21、第16図8)

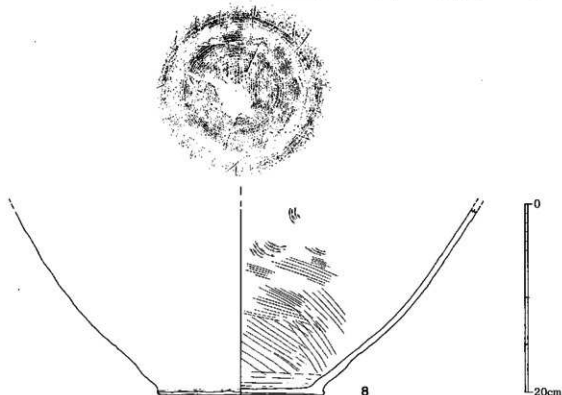
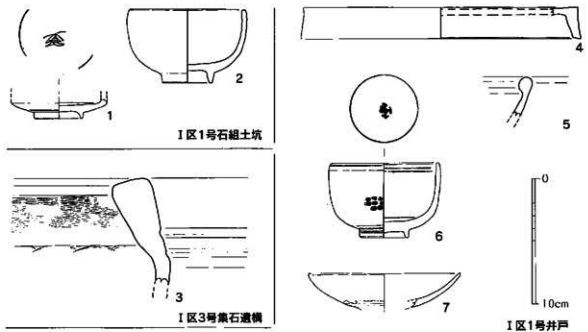
土師質の大甕で、外面は地中に埋設されていたため器面が剥落しているため調整不明。内面は中位が同心円文のタタキ当て具痕、下位はハケ。見込みは回転ハケ目。外面黄橙褐色、内面黄白色で、変色は見られない。水甕として使用されたか。



第15図 I区1号井戸・1号埋甕実測図(1は1/30、2は1/15)

1号溝状遺構 (図版7-2~4、第17図)

調査区西端部で発見された溝で、西側に隣接して先行する2号溝と一部重複する。約20m分の長さを確認し、更に南北方向に延びる模様だが南側は調査区域外、北側は排土下（解体前の家屋使用時の便槽や浄化槽?を除去した大きな覆乱部分）に潜る。溝の中央部に積石列石が施設されて、幅0.3m、深さ0.4mほどの流路空間を得ている。この列石面は概ね主軸方向N-30°-E

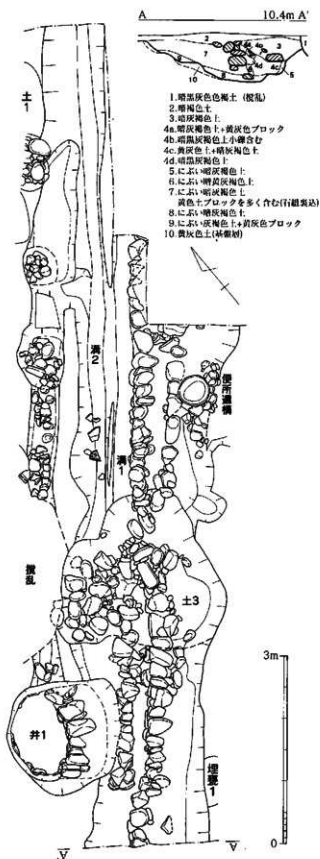


第16図 I区1号石組土坑・1号井戸・1号埋裏出土遺物実測図(8は1/4、他は1/3)

を向く。南半部に溝を覆う積石が幅約1.5 m四方ほどの広さに発見された。西側から東側へ下る2・3段の階段状をなしていて、おそらく南西側にある1号井戸に関連して、溝にアクセスする施設であったと推定される。

出土遺物 (図版20～23・36・2・3、第18～20図、第80図7)

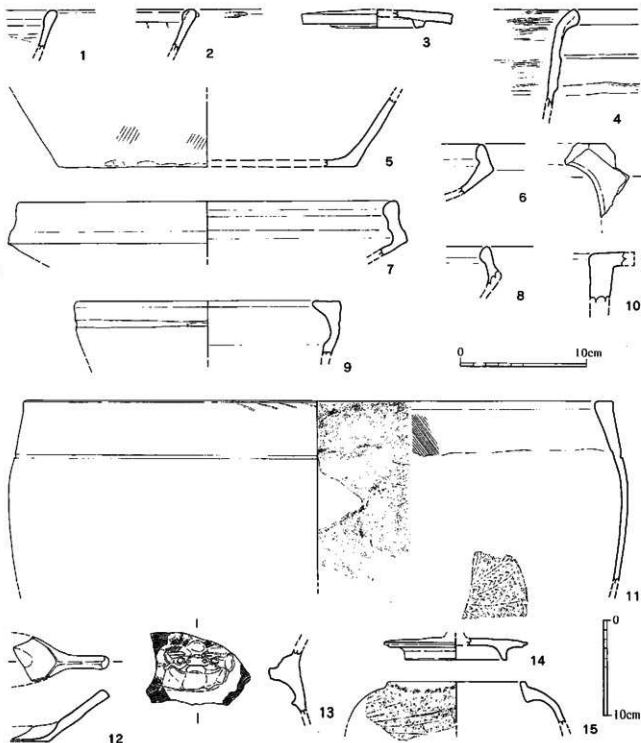
土師質土器 (第18図1～12) 1・2は口縁内面が玉縁状に肥厚する焙烙で、2は外面に貼付耳状把手の一部が残る。双方とも外面から口縁部内面はナデ。内面口縁下は板状工具によるナデで、2には工具端が残る。外面は黒灰色、内面はぶい暗褐色で、口唇部で明瞭に分かれる。3は湯釜の蓋で内外ナデ。色調は黄褐色を呈する。4は身の深い鉢で、外面に帯状の貼付突帯がある。内面は光沢を持つ丁寧なミガキで、外面はナデ。内外橙黄褐色を呈する。1・2・4は高村焼系であろう。5は身の深い鉢の底部であろうか。外面は黄褐色。内面は黄白色で器面が摩滅しているのは使用のためであろう。底部は平滑にナデられている。6～8は焙烙で、内外ナデ。外面はスガ付着しており、灰黒茶褐色を呈し、内面は黄白～橙色。9は小型の焔炉の口縁部で、内外ナデ。外面は灰黄白色、内面は口唇部まで変色が見られ、使用している。10は焔炉の上端であろう。体部は立方体で、その上に方形板に隅円方形の孔が穿たれたものを被せている。内外黄褐色で使用による変色は見られない。11は大甕で、外面から口唇部までナデ。体部から口縁部は同心円文のタタキ当て具痕が残る、口縁部はその上にハケ、体部はナデ。外面の体部器面が摩滅しており、埋設していた可能性が高い。19c代か。



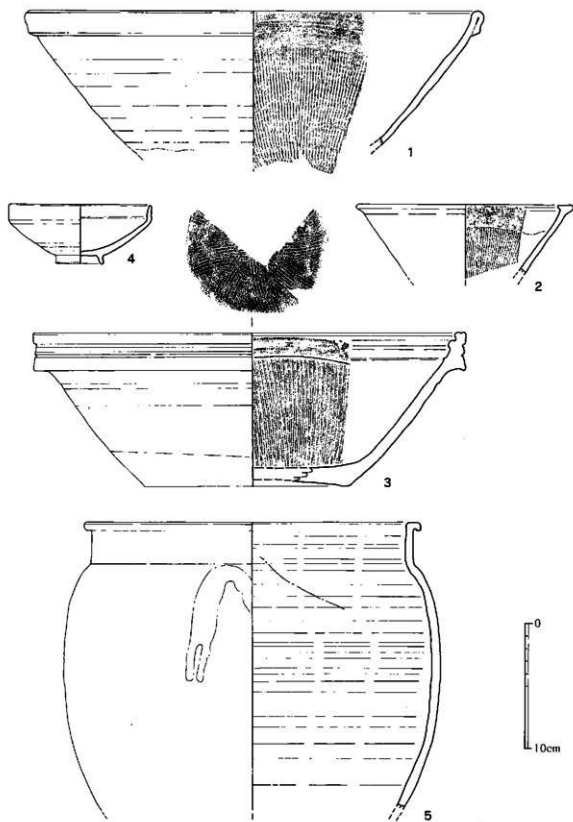
第17図 Ⅰ区1・2号溝状遺構実測図(1/60)

12は下層出土の蓮華で、丁寧にナデられており、橙色を呈する。胎土は精良。

瓦質土器 (第18図13~15) 13は火鉢の胴部で、型押しによる扇文の上に型打ち楸面文を貼付けている。いぶされて銀色を呈し、山口県奇兵隊陣屋跡に類例がある。19c代。14は型作りによる湯釜の蓋で、天井部には松林文が陽刻され、内外黒色でいぶされている。19c代。15は湯釜で14の蓋と口径がほぼ一致する。型作りで外面に波濤文が陽刻されている。内面はナデ。



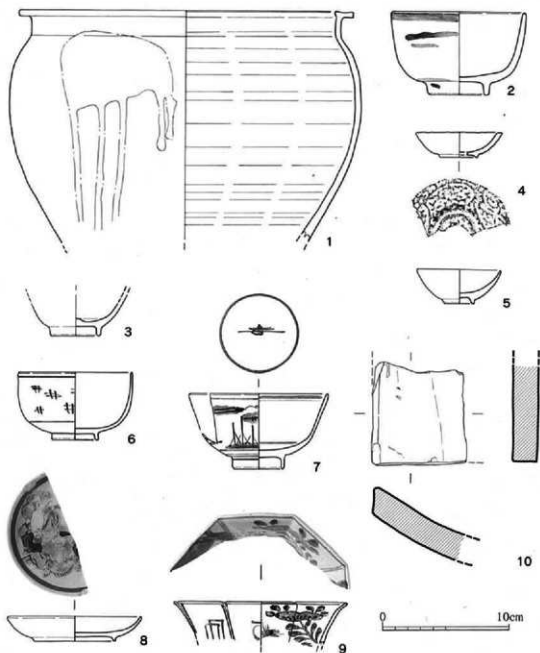
第18図 1区1号溝状遺構出土土器実測図(11は1/4、他は1/3)



第19图 I区1号清状遗址出土陶器尖刺网(1/3)

陶器措鉢（第19図1～3）1は口縁部を外に丸く折り返したものの。外面へう割りで、内面は15本単位の措目の上端は口縁下に施された横ナデにより消されている。内外薄鉄漿釉がかかっている。須佐唐津系だろう。2は小型品で、黒茶色の鉄漿釉が光沢を持つほど厚くかかっている。措目部分には薄い鉄漿釉がかかっていることから、厚くかかっている部分は二重にかけたのだろう。胎は暗灰色。小型品のため、口縁形態で産地を推定できないが、唐津系であろう。3は無釉で、色調は橙褐色を呈する。措目は9本単位で、底部には網代のような編物の痕跡があり、見込みや口縁部に重ね焼きの痕跡が無いことから数台の上に置いて焼いたと考えられる。上野・高取系Bタイプか備前焼で、17c初頭～17c後葉のもの。

陶器（第19図4・5、第20図1・2）第19図4は上野・高取系の小鉢で、乳灰白色に発色する薬灰釉が効かり、外面の胴下位から底部は露胎で、見込みに目跡が残る。胎は黄灰色で、堅緻。



第20図 I区1号溝状遺構出土陶磁器実測図(1/3)

5は暗茶褐色の胎釉をかけ、肩部に白色の藁灰釉を流し掛けしている。胎は黄灰色。

第20図1は陶器の小型甕で、茶褐色の藁灰釉に、肩部に胎釉と乳白色の藁灰釉を交互に流し掛けしている。胎は暗灰色。I区西端上層出土の破片と接合した。高取・小石原系の1750年～1860年代。2は陶胎染付で、I口縁部にややひずみがある。釉は発色悪く暗紫灰色の透明釉で、畳付は釉剥ぎで貫入あり。胎は暗灰色。呉須は青紫灰色で文様ははっきりしない。外底部に砂目らしいものがある。木原波佐見系V-3期（1780～1810年代）。

白磁（第20図3～5） 3は小碗で、やや青い透明釉で、胎は白。内面露胎で、畳付は釉剥ぎ。胎は白色。4は紅皿で、型打ちで成型されたもので、蛸唐草が入るもので、肥前V期1850年代のもの。5は口禿皿で、畳付は釉剥ぎ。透明釉がかかり胎は白い。

染付（第20図6・7・9） 6は腰の張った丸碗で、井字文は素描きであろう。黄緑色がかった透明釉で、胎は灰白色。肥前V期の1780～1810年代。7は口縁部が直線的な端反碗で呉須は濃紺色。透明釉がかかり、胎は灰白色。木原波佐見系V-4期（1820～1860年代）。9は染付の八角形皿で、呉須は緑色～青紺色のやや暗い発色。文様は型紙刷りによるものと思われる。外面は源氏青文、内面は花草文。透明釉がかかり、胎は白。

赤絵皿（第20図8） 見込みに七福神を描いたもので、赤濁の太い界線を施した上に緑色で銅版刷の輪郭線を描き、その中に黄・青・緑・赤・紫・黒・橙で色付けしている。透明釉で、胎は白。畳付は釉剥ぎ。大正期の肥前系。ビット100から同じ皿が2枚出土している。

平瓦（第20図10） 全体に摩滅が見られる。内外工具によるナデ。下端に砂目が付着する。黒灰色を呈する。

磁石（第80図7） 上面は擦痕があるが、使用痕ではないだろう。加工時のものではないだろうか。欠損面が多く、明らかな使用面は1面。頁岩製で、126.4gを測る。

2号溝状遺構（図版1-3、第17図）

1号溝状遺構の西側に重複して切られる溝で、概ね1号溝状遺構と平行するが、南側では近接し、北側で溝底は1.0m弱の距離を隔てている。素掘りの溝で、横石は全くみられないが、本来は1号溝状遺構と同じ機能を担った素掘りの溝であって、西側区画の僅かな拡張によって石積み1号溝状遺構が施設されたと考えられる。西側肩にテラス状の段があり、礎石根締め集石が約1.7m間隔に乗り、礎石根締めと、2号溝状遺構が近接していることから、2号溝状遺構が機能を終えて、1号溝状遺構に移動した頃に礎石建物が建てられたものと考えておきたい。

出土遺物（図版20～23・37、第21・22図、第81図1）

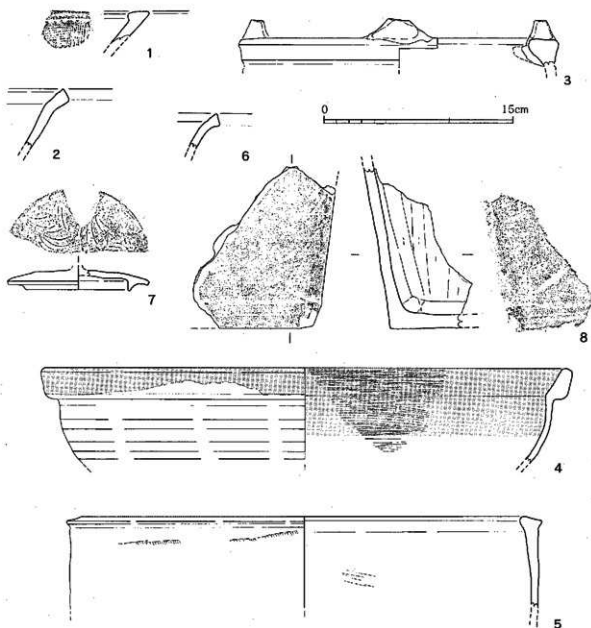
土師質土器（第21図1～5） 1は鉢で、内外黒色を呈し、外面はナデ、内面は横ハケの上に描目が入る。全体にやや摩滅がある。2は外面は削り、外面口縁部から内面はナデ。外面は煤付、内面は茶白色で、煮沸使用していると考えられる。3は焔炉で、上端に五徳が貼り付けられている。内外ナデで、外面は黄白色、五徳内面から体部内面は煤付着で、使用していることがわかる。4はこね鉢で、外面は横方向の削り。外面口縁部から内面は丁寧なミガキ。外面口縁部から内面の口縁下位は丹塗りが施される。高村焼系。5は鉢で、外面はハケをナデ消しており、内面はタ

タキをナデ消している。外面は黄橙色、内面は黄白色から黄橙色で、変色は見られない。

瓦質土器（第21図6～8） 6は外反する口縁の鉢と思われる。暗灰色を呈する。7は湯釜の蓋で、型作りだろう。上面は型押しした波濤文が入る。黒灰色を呈する。8は瓦質の方形鉢の底隔部で、外面に布目があることから型作りと思われる。体下端が横ナデされている。内外黒灰色を呈する。炬燵として使用した火鉢の可能性あり。築上郡大平村金屑塚遺跡3号墓に類例がある。

陶器（第22図1～5） 1は搦鉢で、外面から内面口縁部まで光沢を持つほど鉄釉を厚くかけ、搦目部分は薄くかける。胎は黄灰色。搦目は23本単位。上野・高取系Fタイプで19c代。

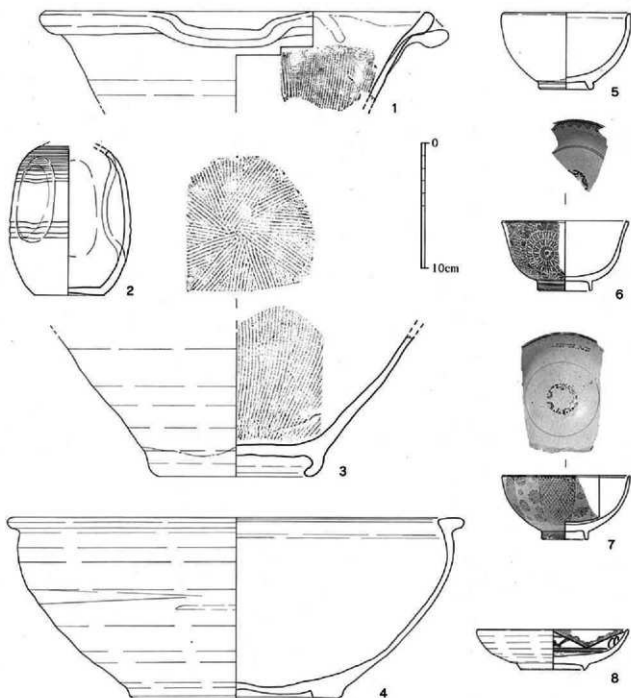
2は陶器の徳利で、内面は鉄漿、外面にはその上に鉄釉がかかる。底部は回転ヘラ切り。体部上半部はカキ目が入る。胎は灰色。3は陶器の搦鉢で、搦目は12本単位。内外赤茶褐色の鉄釉を厚くかけ、高台部は露胎。見込みの高台の位置に、砂目が蛇ノ目状にあり、同じ器種を重ね焼



第21図 1区2号溝状遺構出土土器実測図(1/3)

きしていたと分かる。上野・高取系Fタイプで、18c末～19c代。4は捏鉢で、黄灰色の灰釉を全面にかけ、口唇部は拭き取り、高台部は露胎。貫入が入る胎は黄白色。上野・高取系の19c代か。5は碗である。灰白色の霰灰釉を内外にかけ、高台部は露胎。胎はにぶい灰黄白色。

染付(6～8) 6は陶胎染付の端反碗で、濃紺色の呉須で、外面は型紙刷で菊花文の周りに微塵唐草文を充填し、内面は口縁部に瓔珞文、見込みに崩れた松竹梅円月文が入る。透明釉の発色が悪く薄くかかっている。胎は黄白で、畳付は軸剥ぎ。7は陶胎染付の丸形碗で、型紙刷で外面は区画文帯と花文帯が交互に入り、内面は見込みに崩れた松竹梅円月文が入る。透明釉は薄くかかり発色悪い。呉須は濃紺の部分もあるが、発色が悪いので淡紺になっている。胎は黄白で、畳



第22図 I区2号溝状遺構出土陶磁器実測図(1/3)

付は釉剥ぎ。6・7は明治の木原波佐見系か。8は皿で、乳白色の釉で、胎は白色。髹付は釉剥ぎ。見込みにアルミナを蛇ノ目に塗布する。呉須は淡青灰色で、体部に削れた草篆文と扇文を配する。木原波佐見系V-2・3期（1750～1810年代）。

石臼（第81図1） 擦面はよく使用されているが、風化のためそれ程平滑でない。擦目はよく残っているが単位はわからない。5分割であろうか。石材は多孔質の軟質凝灰岩で角閃石を多く含む。側面に大きく煤が付く。3.68kgを測る。

3号溝状遺構（図版6-3、第3図）

1は北端部で発見された溝状遺構で、長さ11.5m分を確認したものの、東西両端ともに攪乱に遮られ、更に中途の6.0m部分には1号集石が被るため、全体の形状は不明。おそらく西端は1号溝方向に続き、区画をなすと推定される。東半部は素掘り状態だが、1号集石下の西半部では横石列石が確認され、幅0.3m、深さ0.4mの空間を有していて1号溝の列石溝と形状が同じであり、溝底の標高も1号溝状遺構の北半部の標高に近い数値であることから、連続する溝である可能性が高い。出土遺物はわずかで、瓦質の鉢片などがある。

西端上層出土遺物（図版20・21・23、第23図1～17）

土師質土器（1～5） 1・2は焙烙で、外面は1唇部がナデ、口縁下は削り、内面は丁寧な磨き。1は口唇部から内面口縁部に磨きの上に丹塗りがあふ。高村焼系。2は、内側に玉緑をもつもので、内面は黄褐色で変色なし、外面は煤付。3は攪乱出土の磨台と類似するもので、内外ナデ。内外黄褐色で変色なし。4は鉢で、内外ハケの後ナデ。内外灰黄褐色で変色ない。5は焙烙で、内外ナデ。内面黄褐色、外面煤付で変色。

瓦質土器（6） 火鉢の口縁部で、外面は内外丁寧な磨き。口唇部から内面はナデ。内外黒色を呈する。

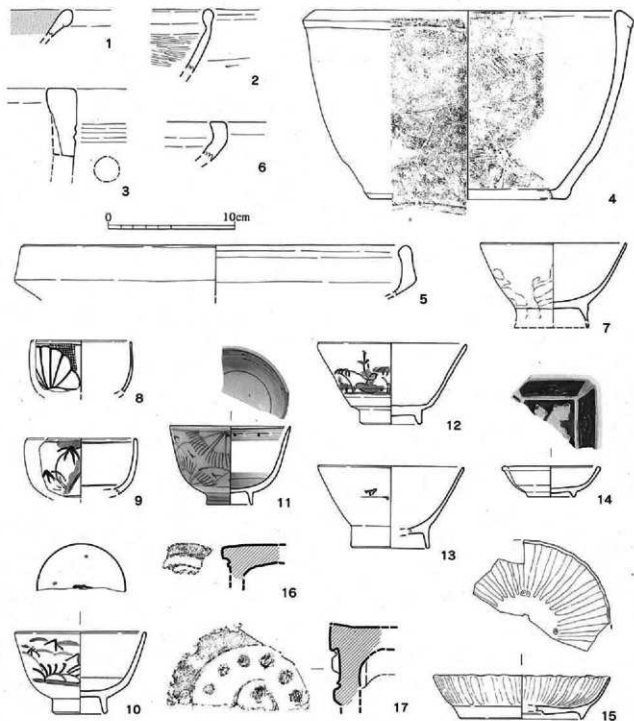
陶器（7） 外面は餡釉を流し掛け、内面は黒灰色を呈する。胎は灰色。萩焼のピラ掛碗。

染付（8～14） 8・9は腰の張った丸形碗で、8は青紺色の発色で菊花の間に袈裟襷を充填させる。呉須にはややにじみがあるが素描きであろう。やや暗い透明釉がかかり、胎は灰色。9は青みがかかった透明釉がかかり、胎は白。青紺色の発色の竹笹文が入る。肥前V期の1780～1810年代であろう。10は陶胎染付けの口縁が直線的に立ち上がる端反碗で、淡青灰色の薄い呉須で竹笹文が入り、見込みは欠損しているが梵字文の可能性がある。透明釉は発色が悪くまだらにかかると。胎は黄灰色。髹付は釉剥ぎ。見込みに4ヶ所のハマ目跡がつくと思われることから、肥前V期の1850～1860年代。11は端反碗である。淡青灰色の呉須で、幾何学的な文様が描かれる。透明釉がかかり、胎は白。髹付は釉剥ぎ。肥前V期の1850～1860年代。12は口縁が直線的に開く碗で、呉須は青灰色から青緑灰色に発色し、笹文が描かれる。やや暗い透明釉がかかり、胎は灰白色。髹付は釉剥ぎ。肥前V期の1780～1810年代であろう。13は広束碗で、暗青色の透明釉がかかり、胎は灰白色。髹付は釉剥ぎ。14は四方隅人形の正方形の角小皿で、内面の葉文などは型打ちによる陽刻である。青みがかかった透明釉がかかり、胎は白色。髹付は釉剥ぎ。肥前

V期の1780～1810年代。

白磁 (15) 15は型打ちの菊花形皿で、外底部は蛇ノ目凹形高台で蛇ノ目に釉剥ぎがある。見込みにはハマ目跡が4箇所つくものと思われる。胎は白色で、青みがかった白色釉がかかる。肥前V期1780～1860年代であろう。

軒丸瓦 (16・17) 両者とも外面は一部銀化している。16は径の小さいもので、巴文の一端が



第23図 I区西端上層出土遺物実測図(1/3)

見られる。17は内区に巴文、外区に珠文が径とスパンから12個入るものと思われる。

2) II区の遺構と遺物

II区からは、掘立柱建物跡1棟、土坑12基、桶埋設遺構1基、胎衣埋納遺構2基、石橋遺構1基、井戸2基、溝状遺構5条などが検出された。

1号掘立柱建物跡（図版8-2、第24図）

II区の南側に検出された建物跡で、南辺が調査区外に出るため、建物の梁・桁が明瞭でないが、柱間スパンから東辺は調査区外に延びないと考えた。西辺の張り出しも北辺しか確認できないので、確実とはいえないが10号土坑や5号溝状遺構の配置からみて、存在する可能性が高いことから、張り出し付き建物を復元した。

3×4間の主屋部は5.04m×7.35mを測り、桁行2間の張り出し部は2.05mを測る。主軸はN-45°-Eであり、2～5号溝状遺構と垂直方向にあたる。柱痕は検出されなかった。柱穴は平面円形で、径は大きいもので長軸が64cmあるが、30cm前後のものが多く、深さは30～60cmで、張り出し部の柱穴は浅いものが多い。柱痕は検出されなかった。

出土遺物に図化できるものがない。

1号土坑（図版8-3、第25図）

II区の中央北側に位置し、1号溝状遺構と切り合って検出されたが、切り合い関係は埋土の差からはわからなかった。1号溝状遺構が浅かったことから床面が残っており、径1.2m、床面径は0.97mを測る。床面はほぼ平坦だが周縁がやや下がっており、桶を埋設したものと思われる。壁はほぼ直に立ち上がり、深さは45cmである。

瓦片がわずかに出土しているが、部位が残っていないため図化できない。

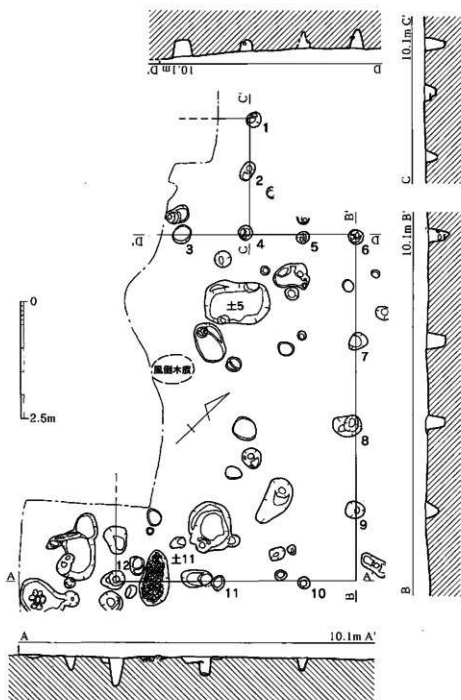
2号土坑（第25図）

II区の中央北側に位置し、1号溝状遺構の床面から検出されたが、埋土の差からはわからなかった。1号溝状遺構のプランが切り合う部分だけ膨らむことから、本来1号溝状遺構の幅より広かったと考えられる。径1.4mで、床面径は0.96mを測る。床面はほぼ平坦で、1号土坑と同規格であることから桶を埋設したものだろう。壁は急な傾斜になっているが本来ほぼ直に立ち上がっていたものと思われ、深さは65cmである。

出土遺物に図化できるものがない。

3号土坑（図版8-4、第25図）

II区の中央北側に位置し、北側落ち込みに切られて検出されている。プランの北側を切られているため不明確だが、径1.9m程に復元できる。底面の南東部に桶のタガが残っていたことから、



第24図 II区1号掘立柱建物跡実測図(1/80)

本土坑は桶埋設遺構とわかった。桶の底面は径1.08mであり、桶よりも大きい掘り方の南東部に寄せて桶を設置している。床面はほぼ平坦で、壁は桶部分については直に立ち上がっているが、掘り方部分は急な傾斜になっている。深さは65cmである。

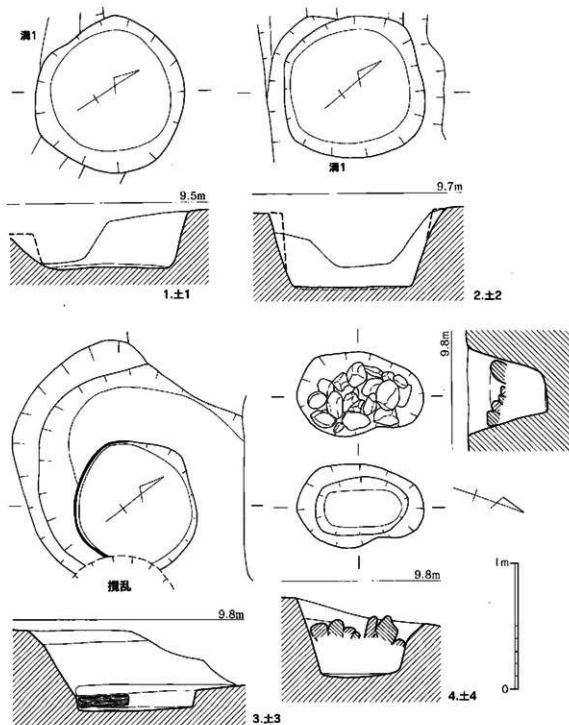
出土遺物 (図版24、第27図1)

1は平面方形の瓦質鉢の側面隅部で、傾きは不明瞭。内外灰黑色を呈する。外面はナデのみ、

内面はナデで一部に横ハケが見られる。型作りであろうが、外面には布目は残っていない。矩鍵として使用した火鉢の可能性あり。

4号土坑 (図版9-1、第25図)

Ⅱ区中央の10号土坑の北に検出されている。検出時は埋土のみであったが、中位から底面まで礫が充填されていた。礫は人頭大のものがほとんどで、小礫を含まない。長軸1.0m、短軸

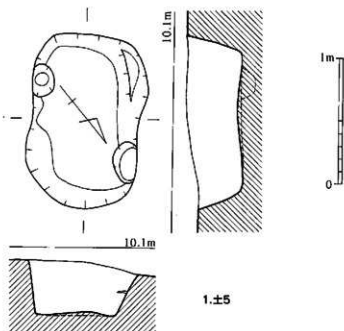


第25図 Ⅱ区1～4号土坑実測図(1/30)

0.51mの長楕円形で、壁は直に立ち上がり深さは65cmを測る。主軸はN-20°-Wであり、軸を同じくする遺構はない。吸水槽であろうか。

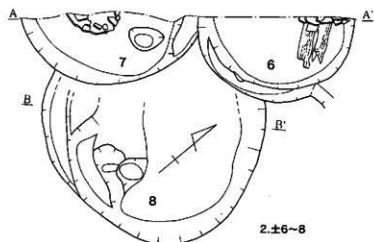
出土遺物 (第27図2)

2は土師質の鉢口縁部で、口縁が短く折れて外反する。調整は摩滅のため不明瞭で。色調は橙褐色を呈する。14c前半代。



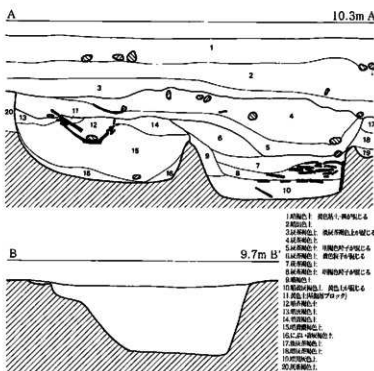
5号土坑 (図版9-2、第26図)

Ⅱ区南東部に検出されている。長軸1.37m、短軸0.94mの略方形で、壁は直に立ち上がり、深さは45cmを測る。床面はほぼ平坦だが周縁部はやや窪む。主軸はN-40°-Eであり、1号掘立柱建物跡と垂直方向にあたる。出土遺物に図化できるものがない。



6号土坑 (図版9-3・4、第26図)

Ⅱ区の北西隅に位置し、7・8号土坑を切って検出されている。西半分が調査区外に出るため不明瞭だが、径1.65m程に復元できる。桶の底板と側板が残っていたことから、本遺構が桶埋設遺構とわかる。底面径は1.35mで、土層から北側に寄せて設置していることがわかる。そのため、掘り方は北側がほぼ直に立ち上がり、南側は急

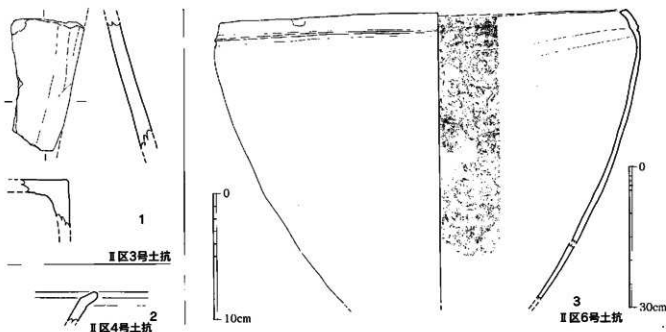


第26図 Ⅱ区5～8号土坑実測図(1/30)

な斜面になっている。床面はほぼ平州だが、土層から見ると桶そのものの底面はこれより高い位置にある。つまり、桶は上げ底状を呈しており、埋地の際に桶底部に裏込め土（10層）を充填している。北側の中位に人頭大の礫や土師質土器が集中するが、流入したものであろう。深さは66cmあった。

出土遺物（図版24、第27図3）

3は土師質大甕で、外面はタタキが見られないほど丁寧にナデており、内面は同心円文のタタキ当て具痕の上にハケ目が入り、部分的にナデている。外面は暗黄褐色で、内面は褐色が口縁部まで吸着している。一部にカルキ状の白色成分が含まれるので便槽と考えられる。胎土は精良。



第27図 II区3・4・6号土坑出土遺物実測図(3は1/8、他は1/3)

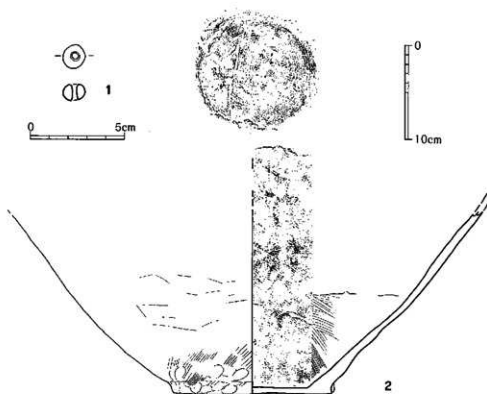
7号土坑（図版9-3、10-1、第26図）

II区の北西隅に位置し、西半分が6号土坑に切られ、7号土坑を切っている。西半分が調査区外に出るため不明確だが、径2.0m程に復元できる。掘り方は、南北両壁ともほぼ直に立ち上がっており、底面はほぼ平坦である。他の桶埋設遺構のような特徴はないが、径の大きさからみて、桶埋設遺構ではないだろう。

埋上中位から土師質土器の甕底部が出土しているが、混入であろう。

出土遺物（図版24、第28図1・2）

1はガラス小玉であろう。緑色だが風化して白くなっている。0.1g。2は土師質甕の底部で、外面は板状工具によるナデ。下位はハケ目の後押さえ。内面は胴部が同心円状のタタキ当て具痕の上をナデており、下位はハケ目、底部は円状にハケを施している。内外とも変色や摩滅がないことから、地中に埋設したものでも、色のついた液体を入れたものでもない。固形物を入れたか地上で水甕として使用したものだろう。黄橙色～黄白色を呈する。



第28図 II区7号土坑出土遺物実測図(1は1/1, 2は1/4)

8号土坑 (図版9-3、第26図)

II区の北西隅に位置し、西半分が6・7号土坑に切られている。そのため不明確だが、径1.8m程に復元できる。掘り方は北側がほぼ直に立ち上がり、南側は斜面になっており、底面は北側に偏っている。こうした傾向から、桶埋設遺構と想定される。

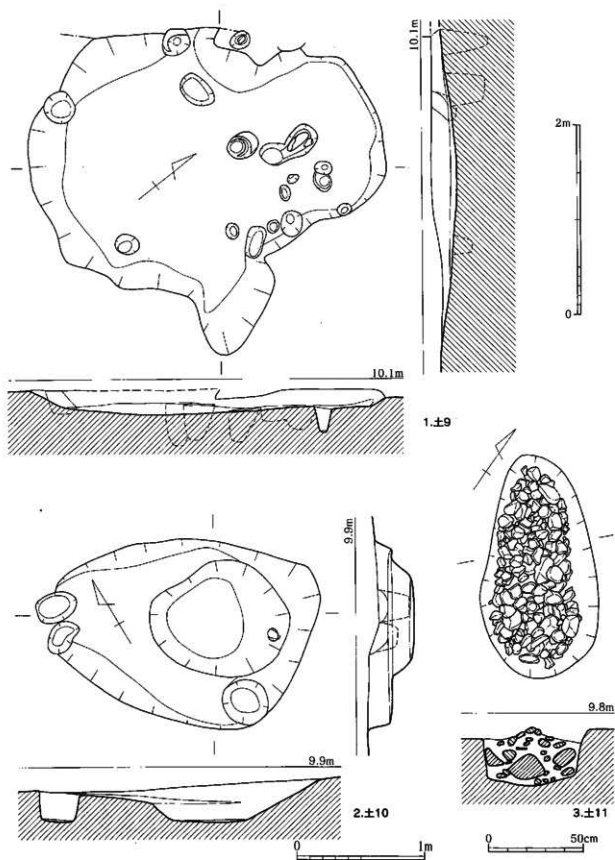
染付片などが出土しているが、小片なため図化できない。

9号土坑 (図版10-2、第29図)

II区の南西端に位置する不整形な平面プランの土坑である。一部が調査区外に出るため不明確だが、長軸3.74m、短軸3.5m以上を測る。立ち上がりは緩やかで浅く、深い所でも18cm程しかない。II区西壁土層から、整地層から掘り込んでいることがわかる。瓦かパンケース1箱分ほど出土しており、瓦の廃棄土坑であったと考えられる。主軸はN-39°-Wであり、軸を同じくする遺構はない。出土遺物は瓦のみで、現地で選別して持ち帰った。

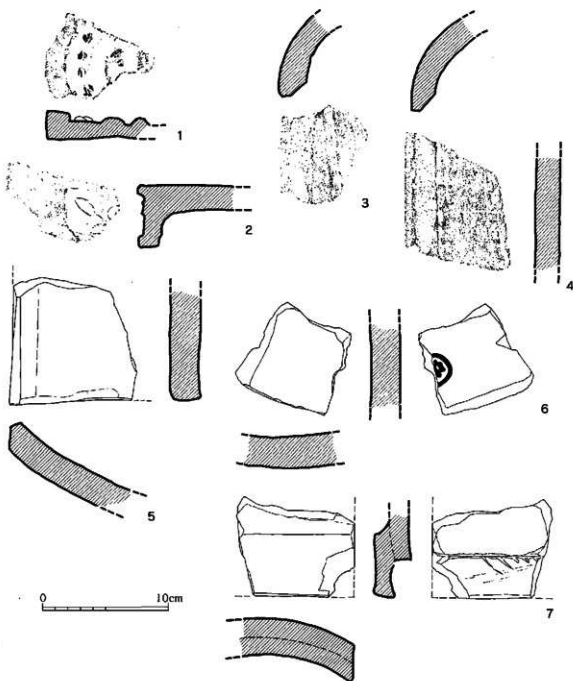
出土遺物 (図版24・25、第30図1～7)

1～7は瓦である。1は軒丸瓦で、裏面に瓦当部と丸瓦部の接合部がわずかに残っていることから中央部の破片とわかる。中央に巴文、その周りに珠文を配しているが、径と間隔から、珠文数は17個に復元される。灰色を呈するが一部銀化している。2は軒平瓦で、草葉文を配する。銀化している。3・4は丸瓦で、凸面に布目と模倣痕があり、模倣から外した後端部を削っている。凹面は板状のナア。3の色調は白灰色～黒灰色を呈する。4はコビキBと思われるものが見



第29図 II区9～11号土坑実測図(1は1/40、2は1/30、3は1/20)

られ、白灰～淡灰色を呈する。5・6は平瓦で、5は端部以外が風化しているので、丸瓦の被る部分のみが本来の器面を残していると思われる。黒灰色を呈する。6は墨書が残る部分で、墨書のある面に削りが見られることから、この面が凸面と思われる。文字は丸に「辛」であろうか。生産者名は刻印するところが多いことから、生産者名なのかはわからない。凹面は白灰色、凸面は黒色を呈する。7は棧伏間瓦で、凹面の平瓦部との接合部に備書沈線が残る。内外黒灰色だが一部銀化している。



第30図 II区9号土坑出土瓦実測図(1/3)

10号土坑 (図版10-3、第29図)

II区の中央に位置する平面プラン楕円形の土坑で、長軸2.00m、短軸1.48mを測る。壁は緩やかに立ち上がっており、底面は中央部が段を持って深くなる。中央部の深さは、深いところで35cm程である。主軸はN-60°-Eであり、1号掘立柱建物跡とほぼ平行である。

本土坑を掘削して検出されたビット18から銅銭が1枚出土している。出土遺物には図化できるものがない。

11号土坑 (図版10-4、第29図)

II区の南東部に位置する平面プラン楕円形の土坑で、長軸1.19m、短軸0.63mを測る。上面に小礫、下位に人頭大の礫が充填されており、集石土坑とした方が適切であろう。壁は直に立ち上がっており、床面はほぼ平坦である。主軸はN-37°-Eであり、1号掘立柱建物跡にほぼ直交する。吸水拵であろうか。

出土遺物はわずかで、小片が多い。上質土器片のほか、陶胎染付碗や発色の悪い呉須の雪輪草花文が入る染付があることから、17c後半から18c前半の遺構だろう。

12号土坑 (図版11-1、第31図)

II区の中央西側に位置し、4号溝状遺構を切って検出された。径95cmの円形プランで、壁は直に立ち上がり、深さは24cmを測る。底面はほぼ平坦であり、1号桶埋設遺構とほぼ同規格であることから桶埋設遺構と想定される。出土遺物に図化できるものがない。

1号桶埋設遺構 (図版11-5・6、第31図)

II区の中央西側に位置し、4号溝状遺構を切って検出された。埋土は攪乱のものに等しく本来ならば調査対象にならないものだが、桶側板が残っていたので掘り下げてみたところ、底板まで残っており、状態のよい一括廃棄の遺物が出土したため報告することにした。

径1.24mの円形プランの掘り方の中に、口径0.97cm桶が設置されている。側板は厚さ1.5～1.8cmで、下位には竹のタガが4条残っていた。底板は厚さ3.0cmの5枚の板材を木釘で組合せており、中央に木栓穴が穿たれ、栓も残っていた。裏込土は暗黒褐色で、礫を多く混じる。桶材は墨書のないことを確認したのみで、持ち帰らなかった。

出土遺物は礫と共に埋土中位に集中しており、竹やゴム草履の裏ゴムやセルロイド状のものなどあったが、すべてを回収せず、主だったものだけ持ち帰った。また、陶器の兵隊人形があったが、整理中に紛失した。

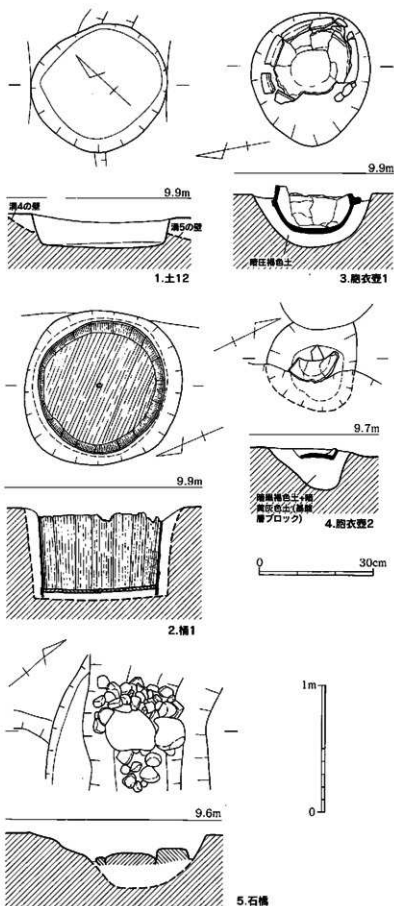
出土遺物 (図版25・29・36・2・38・39、第32図1～18・第78図13・第79図1～3)

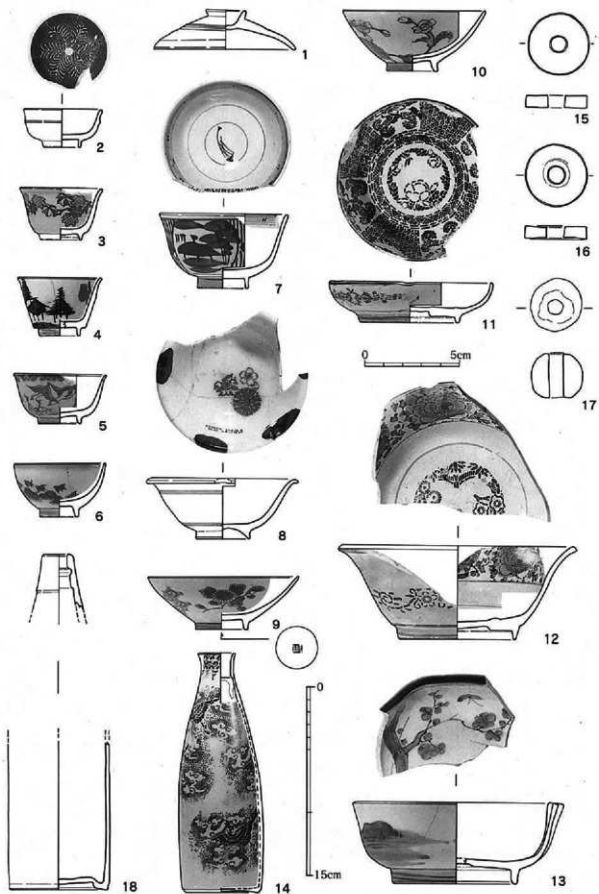
陶器 (第32図1) 陶器の京焼き風の行平鍋の蓋で、黄灰色の灰釉を全面にかけ、つまみの上端は釉剥ぎ、内面の天井部分は露胎。胎は黄灰色。

染付 (第32図2～14) 2～6は小杯である。2は型打ちで、内面は青紺色の釉の上に葉文を型押ししている。やや暗い透明釉で、胎は白色。皿付は釉剥ぎ。3は銅版刷りによる葉文で、版

の重なる部分がある。薄い青灰色の呉須。透明釉で、胎は灰白色。畳付は釉剥ぎ。明治の肥前系。4は外面体部に面取りがある。濃紺色の呉須で風水文が描かれている。透明釉で、胎は白色。畳付は釉剥ぎ。5は銅版刷りにより青紺色の呉須で水鳥と水辺が描かれており、やや暗い透明釉で、胎は灰白色。畳付は釉剥ぎ。6は銅版刷りにより淡緑色で鳥文が描かれている。口縁部にも淡緑色がかかる。透明釉で、完形のため胎は不明。4～6は明治の肥前系。

7～10は碗である。7は端反碗で、呉須は濃紺色で、外面には型紙刷りで樹林が描かれている。内面口縁部には重圈文、見込みには崩れた格子文が入る。透明釉で、胎は灰白色。畳付は釉剥ぎ。8は口縁が大きく外反し、口唇部に胎軸が5ヶ所にかけている。見込みには銅版刷りによる桜などの花文が入る。薄い青灰色の呉須。透明釉で、胎は白色。畳付は釉剥ぎ。9は銅版刷りによる向日葵と花をデザインしたモチーフが交互に入るので、やや濃紺色の呉須である。やや暗い透明釉で、胎





第32図 II区1号桶埋設遺構出土陶磁器・土製品実測図(15~17は1/2、他は1/3)

は白。畳付は釉剥ぎ。外底には方形枠内に「福」字が入る。10は外面に銅刷版りで描かれた花草文が入り、やや濃紺色の呉須。花の部分にのみ赤が色付けられている。やや暗い透明釉で、胎は白色。畳付は釉剥ぎ。9・10は明治の肥前系。

11~13は皿である。11の外底部は蛇ノ目凹形高台で、高台は蛇ノ目に釉剥ぎされている。見込みは型紙刷りにより、外面は崩れた唐草文、内面は中央に格文、内区に複合鋸歯文、外区に区画文帯と花文帯が交互に描かれている。濃紺色のいわゆるペロ藍。見込みにハマ目跡が5ヶ所つく。透明釉で、胎は白色。畳付は釉剥ぎ。12は外底部が蛇ノ目凹形高台で、外底の外周から畳付は蛇ノ目に釉剥ぎされている。見込みにハマ目跡が5ヶ所つく。透明釉で、胎は白色。型紙刷りにより外面は唐草文、見込みには花草文が入り、濃紺色の呉須。13は型打ちによる花形皿で、外面は風水文、内面は梅樹文が濃紺色の呉須で描かれている。外底部は蛇ノ目凹形高台で、外底の外周から畳付は蛇ノ目に釉剥ぎされている。黒色粒子混じりの透明釉で、胎は白色。

14は徳利である。銅版刷りで、口縁部に環珞文、体部に1つの鳥の版が幾度も使用されている。呉須は濃紺色。透明釉で、胎は白色。底部は釉剥ぎ。内面は口縁部のみ透明釉がかかる。

2~14は明治後半~大正期のものである。

白磁 (第32図15・16) 戸車で、側面のみ透明釉がかかる。肥前V期の1780~1860年代。

土玉 (第32図17) 土師質で、土鏝の可能性が高い。精良な胎土で黄橙色を呈し、14.0g。

ガラス瓶 (第32図18) 口縁部と底部片だが同一個体であろう。青緑色で、気泡は少ない。口縁内面に溝があることから、ラムネ瓶であろう。

木製品 (第79図1~3) 1は草履下駄の踵部分で、上面には赤漆、側面と裏面には黒漆がわずかに残っている。現存で横幅7.1cmあることから大人用であろう。樹種は鑑定していないので不明。2は曲物の銅板で、1/4程度残っており、径は19.0cmに復元できる。ともに出土した下記の底板とは径が若干異なるが、側板が底板から外れて径が縮んだ可能性が高い。下部が丸くなっていることから底部付近であろう。3は曲物の底板で、径は19.8cmあり2枚の板材を木釘で組み合わせている。表裏面ともに残りが悪いが、墨書等は見られない。樹種は鑑定していないので不明。

甕 (第78図13) 銅製で、基部の表面に唐草文が毛彫りされている。

1号胎衣埋納遺構 (図版11-3、第31図)

Ⅱ区の中央西側に位置し、3・4号溝状遺構の間に検出された。長軸36cm、短軸32cmの略円形の掘り方に、瓦器の湯釜を埋めたもので、上面を削平されており、蓋は残っていないかった。裏込土は暗灰褐色土である。

出土遺物 (図版24、第34図1)

1は瓦質の土瓶で、注口に4ヶ所の穿孔がある。外面下半はカキ目、上半は型押しで松葉文が陽刻されている。鉄瓶を模したものだだろう。内外灰黒色で、部分的に銀化しているところがある。全体に煤付きが著しく、直接火に掛けられている。19c代か。

2号胎衣埋納遺構 (図版11-4、第31図)

Ⅱ区の中央西側に位置し、5号溝状遺構に切られて検出された。不明確だが、径24cm程の略円形の掘り方に復元でき、陶器の土瓶の底部のみが検出された。裏込土は暗黄灰色土である。

出土遺物 (図版27、第34図2)

2は関西系上瓶の底部で、Ⅱ区1号桶出土の破片と接合した。外面は乳白色、内面は黄灰色に黄灰釉を掛け分けている。外面に黒色の界線が見られる。体部下位から外底部は露胎で、煤が付着していることから直接火にかけたとわかる。内面に砂目跡が4ヶ所あり、小型器種と一緒に焼いた可能性がある。19c代か。

石橋遺構 (図版11-2、第31図)

Ⅱ区の中央東側に位置し、1号溝状遺構内から検出された。人頭大の扁平な面を持つ川原石を2枚敷いて、その周囲を小礫で固めている。橋の設置されている溝状遺構の幅は1.23mで、歩幅よりやや広いことから設置されたものだろう。主軸はN-38°-Eであり、2～5号溝状遺構には平行で、1号堀立柱建物跡の主軸とは垂直である。伴う出土遺物はない。

1号井戸 (図版11-7、第33図)

Ⅱ区の北東隅に位置し、掘乱穴の下から検出された。南東部が擾乱を受け、かつ調査区外に出るため不明確だが、径1.95mの略円形の掘り方の中に、人頭大の川原石で径0.95mの井戸を組んでおり、深さは1.25mほどであった。扁平な長方形の面を持つ礫の端部や、安山岩質礫の割れ面を内側に向けて面を揃えている部分が多い。1号溝状遺構との切り合い関係は検出段階ではわからなかったが、井戸枠の礫の残り方からみて、1号溝状遺構に切られていると考えられる。井戸内からは、落ち込んだ井戸枠の礫とともに皮付きの木材が入っていた。

出土遺物 (図版25・27・36-3、第34図3～9・第80図4)

土師質土器 (第34図3) 鉢の底部で、見込みは丁寧なミガキ。外面はナデ。内外暗灰色から黒色で、外面は焼成時に変色している。

瓦質土器 (第34図4～7) 4～7は鉢である。4は外面削り、外面口縁部から内面はナデ。外面は黄灰色、内面は黄灰白色を呈する。5は火鉢で、内外ナデ。外面は灰黒色。内面は黄褐色を呈する。6は鉢で、外面は暗灰色。内面は器面が剥落しており、灰色を呈する。16c前半代。7は身の深い鉢で、内外灰色で変色は見られない。口縁下の突帯との間に4本単位の横溝沈線が入る。

染付 (第34図8) 8は陶胎染付の筒形碗で、小片のため文様不明。淡暗青灰色と暗茶灰色の呉須で、透明釉は発色悪く薄い。胎は白色。木原波佐見系V-2期 (1750～1770年代)。

白磁 (第34図9) 碗であろう。青みがかった透明釉が白色の胎にかかる。内面に貫入が見られ、皿付から高台内部は崩胎。

砥石 (第80図4) 板状で、上面は使用されているが顕著でない。上・下端面は成形時に整えられた面で使用されていない。頁岩で、22.9gを測る。

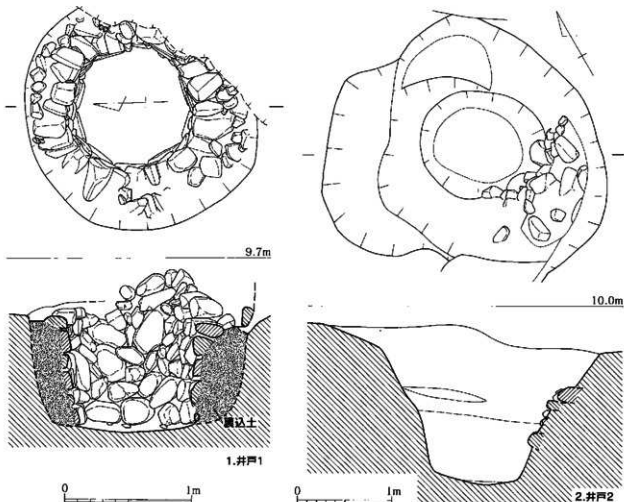
2号井戸 (図版11-8、第33図)

Ⅱ区の北西に位置し、2号溝状遺構の西から検出された。当初土坑かと思われたが、深さや径の大きさ、掘り方の形状からみて井戸と判断した。平面プランは長軸2.92m、短軸2.60mの楕円形だが、中位で狭まり、立ち上がりも急になって底面は長軸96cm、短軸75cmになる。北壁に見える礫は基盤層中の礫であり、石組でも裏込め内のもでもない。素掘りの井戸かあるいは、井戸枠を抜き取ったのであろう。湧水があったが底まで掘り下げ、深さは1.7mに達する。

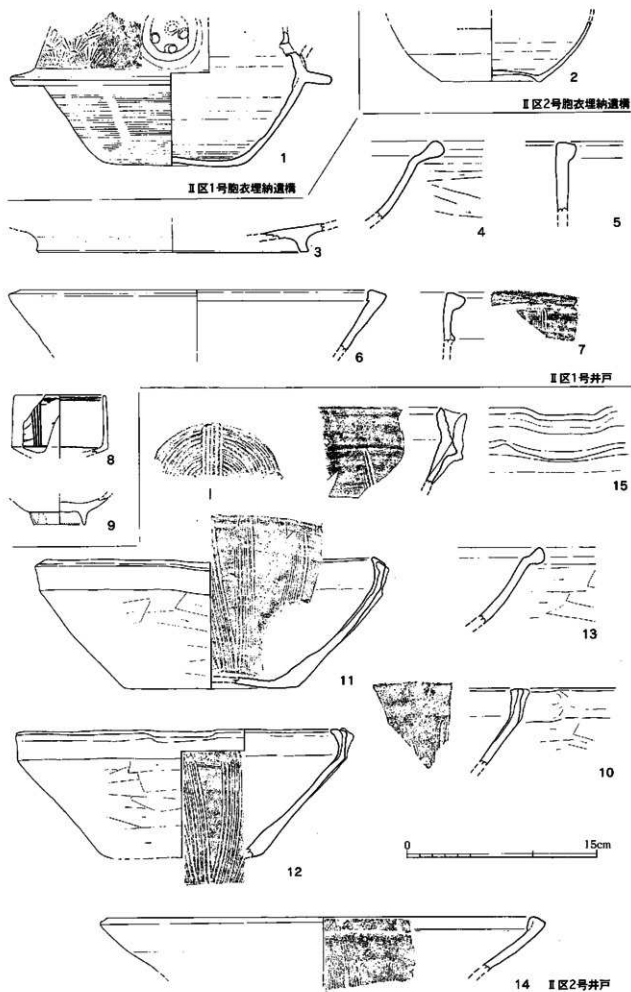
出土遺物 (図版25・27・39、第34図10～15・第79図4)

土師質土器 (第34図10) 片口鉢で、口縁部には片口部の端部がある。外面体部は削りで、口縁部から面はナデ。内面には横目が見られる単位は不明。外面はくすんでいるが焼成時のものであろう。内面は灰黄褐色を呈する。16c代。

瓦質土器 (第34図11～14) 11～14は鉢である。11・12は身の深い細鉢で、横目は5本単位。外面体部は削りで、口縁部から内面はナデ。16c代。11は外面煤付で、外底部は斑状剥離が見られ、煮沸使用されている。12は外面煤付で、内面灰色。13は外面体部が削りで、口縁部から内面はナデ。外面煤付で、内面は淡黄灰色を呈する。14は外面ナデ。内面斜め方向のハケで、その上に9本単位の横目が入る。器面内面には斑状剥離が見られ、使用のためと思われるが、色調は内外黒灰色を呈し、変色は見られない。16c前半代。



第33図 Ⅱ区1・2号井戸実測図(1は1/30、2は1/40)



第34图 II区胎衣埋納遺構・井戸出土遺物実測図(1/3)

陶器（第34図15） 備前焼の擂鉢で、内面に擂目が入るが、小片のため単位は不明。片口が大きく歪む。無釉で内外面に灰被りが見られ、暗茶褐色を呈し、胎は暗茶褐色。備前焼V期で16c代のもの。

木製品（第79図4） 建築材であろう。円形の穿孔のある板材で、一端は面が残っており、材の端部に穿孔されていたことがわかる。厚さ2.7cm、幅5.5cmで樹種は鑑定していないので不明。

1号溝状遺構（図版8-1、第2図）

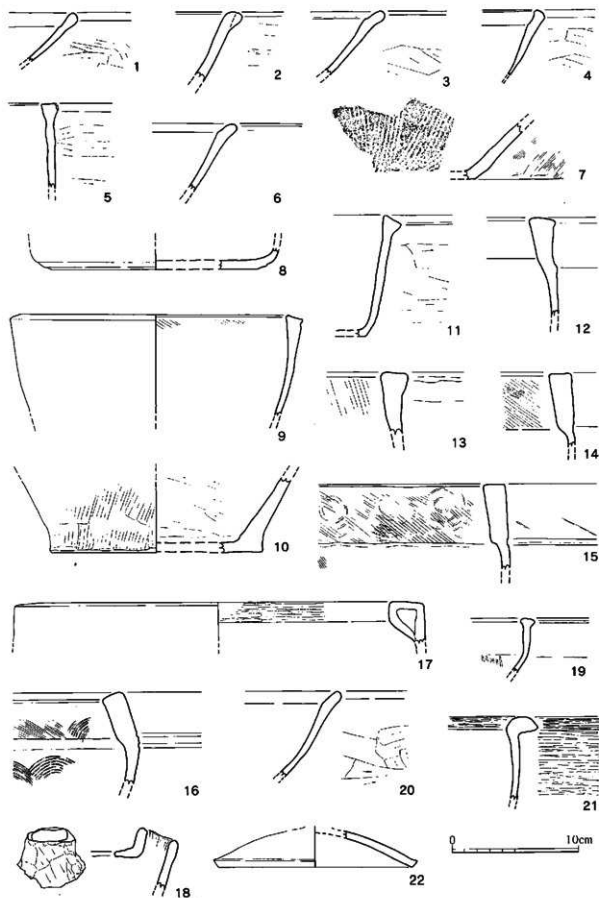
Ⅱ区の北側を東西に走る溝で、北東端は北に折れるものとそのまま西走し、調査区外に達するものに分れる。1・2号土坑、2・5・6号溝状遺構とは切り合い関係がはっきりしないが、1号井戸と4号溝状遺構は切っているようだ。北東や南西部は深さ20cm、幅55～60cmである。中央部が幅1.4mと広いのは、6号溝状遺構が合流するためであろう。深さは40cm程を測る。Ⅰ区の1号溝状遺構、Ⅲ区の2号溝状遺構と一連の遺構であろう。なお、中央部には石橋が設置されている。出土遺物（図版24・25・27・28・36-3、第35～37図、第80図12）

土師質土器（第35図1～18） 1～6は鉢の口縁部で、外面は削り、外面口縁部から内面はナデ。1は外面は炭化物付着。内面灰褐色を呈する。2は内外煤付だが、使用のためか。3は外面から内面口縁部の段まで煤付、内面は黄灰白色なので、段で蓋を受けたものと思われる。4は外面灰褐色、内面暗灰白色で、3同様に内面口縁下の段で蓋を受けたと思われるが、体部の器壁が薄くなっているのは使用による摩滅のためであろう。5は身の深い鉢で、内外暗橙灰色。6は外面煤付。内面黄白色。

7・8は鉢の底部である。7は外面ハケ目、内面はナデの上に7本単位の擂目が入る。色調は内外にぶい灰黄褐色で、変色していることから煮沸使用とわかる。8は身の深い鉢だろう。内外摩滅しており、調整は不明瞭。外面淡黒色、内面にぶい暗灰色。9は口縁内面にハケが残るが体部は内外ナデ。本来は黄灰白色で、内外に煤が付着している。18c後半。10は9の口縁部のタイプに対応すると思われる底部で、外面はハケ目、内面は削り。底部はナデ。黄白色を呈する。11は器高の低い鉢で、外面は削り、外面口縁部から内面はハケ状のナデ。5と同一個体の可能性が高い。12～16は大甕で、外面は摩滅しており、埋設していた可能性がある。内面は器面を残し、変色は見られず黄白色を呈する。13は12の口縁下の段から上までの破片であろう。外面から口唇部まではナデ。内面はハケ目。内外黄褐色を呈する。14は口縁下に沈線が入り、外面から口唇部まではナデ。内面ハケ目。内外黄褐色を呈する。15・16はタタキ成形で、内面に同心円文のタタキ当て具痕が残る。外面口縁下に沈線が入り、口縁部には板状工具痕が残るが、それ以外はナデ消されている。口縁部内面はその上にハケ目が入り、口縁下はナデ消されている。15は淡橙褐色、16は明黄褐色を呈する。

17は口縁内面を方形に折り曲げた甕で、口縁部は中空になっている。外面はナデ。口唇部から内面口縁部までは光沢のあるほど丁寧なミガキ。内面口縁下はハケ状工具によるナデ。外面黄褐色、内面黄白色を呈する。

18は注口付の甕種で、下部は削り、上部はナデ。外面は煤付なので煮沸している。内面は茶



第35图 II区1号溝状遍柄出土器実測図(1/3)

色を呈する。

瓦質土器 (第35図19~22) 19は口唇部に丸みがある鉢で、内外灰黒色を呈する。外面の体部は削り、口縁部から内面はナデで、その上に襷目がある。20は外面は削り、外面口縁部から内面はハケ状のナデ。内外灰黒色を呈する。21は火鉢で、外面から内面口縁部は光沢のあるミガキ。これ以下に型押しした格子文帯が入るものであろう。内外いぶしてあり、黒灰色を呈する。19c代。22は蓋で、外面はナデ。内面は摩滅しているが、使用のためであらう。内外にぶい灰褐色を呈する。

陶器 (第36図1~9) 1は捕鉢で、内外鉄釉がかかり、外面口縁下に重ね焼きしたと思われる融着が見られるので、同じ器種の口縁部上端が接していたものと思われる。丹波焼系か。2は甕で、鉄漿をかけたのち鉄釉をかけているが、釉切れが目立つ。唐津系17c後半~18c前半。3は碗で、灰白色の薬灰釉を見込みにかけ、外面は露胎。高台内は回転ヘラ削りで、皿付は刻み目状に面取されている。4は碗で、高台内回転ヘラ削り。内外灰白色の薬灰釉がかかり、高台部分は露胎。外面には器面の水分の蒸発と共に釉が失われている部分がある。胎は灰色。5は筒形碗で、灰白色の釉が外面下位から内面体部にかかり、外面高台部と見込みは露胎。胎は赤褐色を呈する。上野・高取系。6は筒形碗で、オリーブ色の灰釉を外面体部と内面にかけ、高台部は露胎。見込みに貫入がある。小石原系の1682~1722年か。7は鉢で、灰白色の薬灰釉が外面体部と内面見込みにかかり、外面高台部は露胎。上野・高取系。8は鉢で、鉄分の多い胎土で、外面に白化粧土で波状の刷毛目、内面に渦刷毛目を施す刷毛目鉢。胎は暗褐色。高台から、唐津Ⅳ期(1690~1750年代)の後半代と考えられる。9は土瓶で鉄釉をかけた上上半部に灰白色の薬灰釉をかける。下半部にはカキ目。外底部は回転ヘラ削り。上野・高取系18c後半~19c。

染付 (第37図1~11・13~17) 1はくらわんか手の碗で、青灰緑色の呉須のコンニャク印判丸文が入る。見込みにコンニャク印判の五弁花文が入ると思われる。木原波佐見系V-3期(1780~1810年代)。2は陶胎染付で、暗青色の呉須で文様が描かれているが、モチーフは不明。やや暗い透明釉で貫入が見られる。胎は釉剥ぎ。胎は暗灰色。3は陶胎染付で、暗青色の呉須で文様が素描きされている。やや暗い透明釉で貫入が見られる。皿付は釉剥ぎ。木原波佐見系V-3期(1780~1810年代)。4~6は丸型碗で、透明釉がかかり、胎は灰白色。4・6は暗青灰色、5は青灰緑色に発色した呉須の雪輪草花文が入る。木原波佐見系V-1期(1680~1740年代)。7~9は青磁染付碗である。7は半球形碗で、見込みにコンニャク印判の簡略化されていない五弁花文が入る。このことと高台の形態から、木原波佐見系V-2期(1750~1770年代)。8は筒形碗で、呉須は暗青灰緑色で、内面口縁部に四方罽文帯を入れたもので、型紙刷りによるものだろうか。見込みの文様は不明。外面は淡緑色。内面にはやや暗い透明釉がかかり、胎は灰白色。肥前Ⅳ期の1750~1780年代だろう。9は呉須は淡暗青色の発色。外面は淡緑色。内面には薬灰が混じる透明釉がかかり、胎は灰白色。10は腰の張る丸碗である。文様が見られないが、染付であらう。透明釉の発色が悪く、ほとんどが灰白色で、口縁部のみ透明に発色する。胎は灰白色。11は染付碗で、外面体部下位にはカキ目が見られる。呉須は青緑灰色に発色。やや青みがかった透明釉がかかり、胎は灰白色。皿付は釉剥ぎ。外底は大の字の略字か。

13～16は皿である。13の呉須は濃紺から濃青灰色で、内面に崩れた唐草文と扇紋が入る。縁がかかった透明釉がかかり、内外貫入が目立つ。胎は白色。畳付は軸剥ぎ。木原波佐見系V-2・3期（1750～1810年代）。

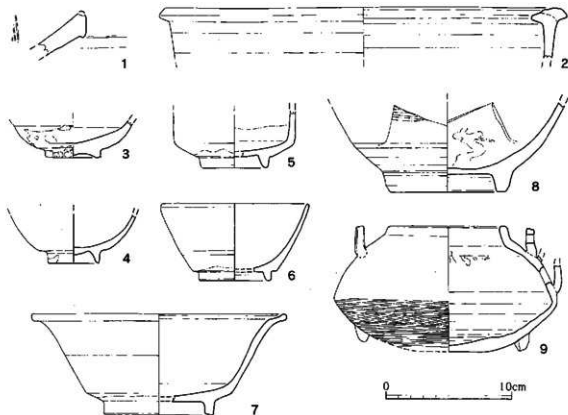
14は陶胎染付で、呉須は淡青灰色～濃紺色で、型紙刷であろう。外面にモミジ、内面に花草文を配する。青みがかかった透明釉で、貫入が目立つ。胎は灰白色。器形から、木原波佐見系Ⅳ期（1650～1680年代）の可能性が高い。

15は内面に菊唐草文が描かれており、呉須は濃青灰から濃紺で発色はよい。乳白色の釉で、胎は灰白色。畳付は軸剥ぎしているが、あらかじめ露胎にしている。見込みは蛇ノ目軸剥ぎ。木原波佐見系V-2・3期（1750～1810年代）。16は濃紺色の呉須で型紙刷により、見込みに獸文、その周りに雲文を描いている。外面は細描きの唐草文、外底部にも界線が入る。青みがかかった透明釉で、畳付は軸剥ぎ、高台内面は砂目が付き、口禿。肥前Ⅲ・Ⅳ期の1680～1710年代。17は瓶で、青灰緑色の呉須の界線が入る。やや暗い乳白色の釉に胎は灰色。肥前Ⅲ期（1650～1690年代）。

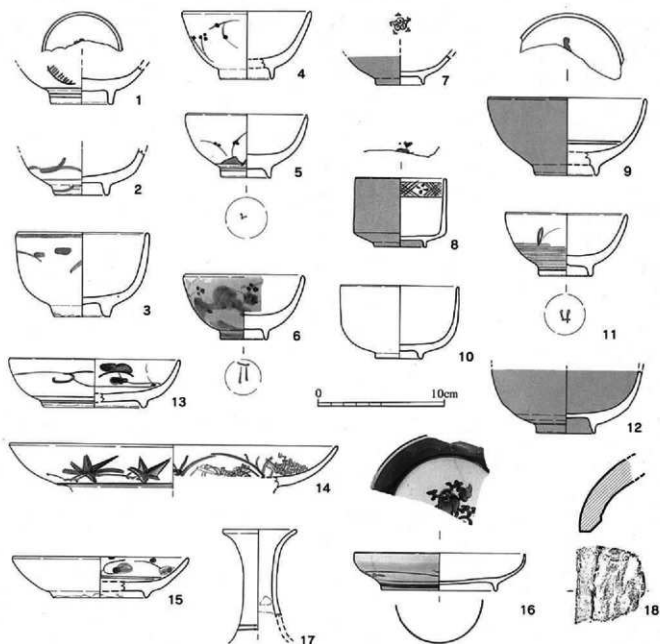
青磁（第37図12） 無文の碗で、外面は淡緑色、胎はにぶい灰色。肥前Ⅳ期の1650～1680年代。

丸瓦（第37図18） 凸面に布目と換骨痕が残る。黒灰色を呈する。

砥石（第80図12） 粗割り段階の石座」の未製品であろうか。淡黄緑色の結晶片岩で、風化している。175.4gを測る。



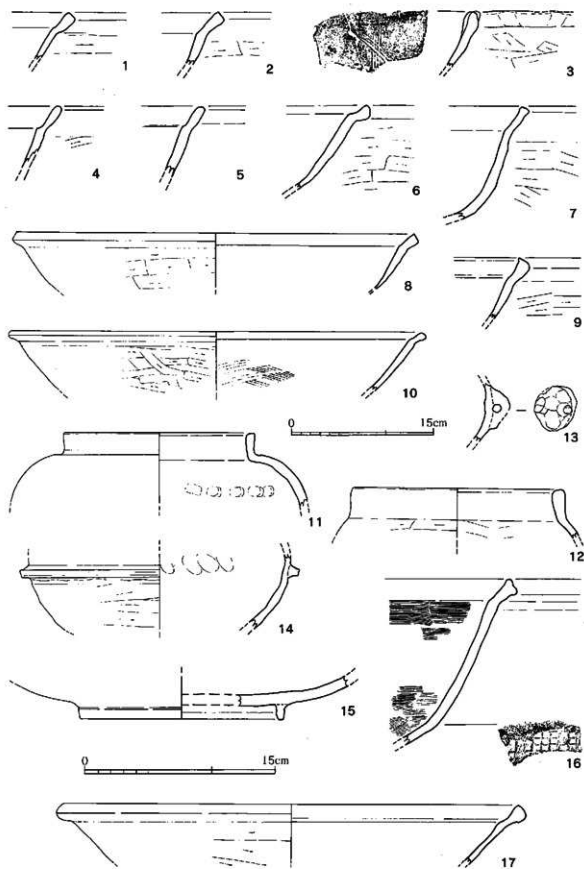
第36図 Ⅱ区1号溝状遺構出土陶器実測図(1/3)



第37図 II区1号溝状遺構出土磁器・瓦実測図(1/3)

2号溝状遺構 (図版12-1、第42図)

II区の西側を南北に走る溝状遺構で、中央で西に折れる幅広の溝状遺構とは切り合い関係がわからず、深さにも差がないことから、同一遺構と判断した。1号溝状遺構との切り合い関係は不明で、2号井戸は切っている。溝幅は南端が最も広く2.04mを測るが、北に向かって次第に狭くなり1.35m程になる。西方向に折れる部分から北は、急に狭くかつ浅くなっており、西方向の部分も浅く15cm程度しかない。埋土には小礫が多く混入しており、調査区南壁の溝状遺構の土層から他の溝状遺構との前後関係はわからない。



第38図 II区2号溝状遺構出土:土師質土器実測図(8は1/4、他は1/3)

出土遺物（図版26・27・37、第38・39図、第82図1、第78図9）

土師質土器（第38図1～17） 1～10は鉢の口縁部で、1～9までは調整は体部外面が削り、口縁部から内面はナデ。1は黄橙白色。2は外面煤付で、黒茶色を呈し、内面はにぶい暗灰黄褐色。3は片口をもち、内面に3本単位の摺目が入る。色調は内外灰黄色を呈する。4・5は同一個体の可能性のあるもので、外面は煤付、内面は灰黒色を呈す。6は外面に煤が付き、内面には炭化物が付着する。7は内外黄白色で、変色なし。8は外面体部に煤が付着し、内面は灰黒色。9は内外やや摩滅しており、内外黄白褐色を呈する。10は内面にハケ目が見られる。暗黄褐色から淡橙褐色を呈する。11～14は土師質の湯釜である。11・12は口縁部で、11は外面から内面頸部までナデ。肩部は押さえ。内外やや摩滅しており、灰褐色を呈するが、煤の付着は見られない。12は肩部は内外削り、口縁部はナデ。黒灰色を呈する。13は半球形の耳部で、押さえで成形され、円形の穿孔がある。外面暗橙褐色から黒色で、煮沸使用されている。内面は暗橙褐色。14は胴部で、貼付突帯以下は削り。内面は突帯部分に押さえが見られ、それ以外はナデ。外面は黒色、内面は暗橙褐色であることから、煮沸使用されている。

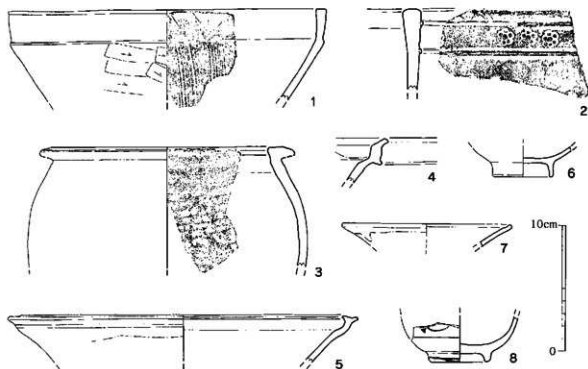
15～17は土師質鉢である。15は内外摩滅しており、調整不明だが高台部分はナデ。内外黄褐色を呈する。16は外面から内面口縁部はナデ、体部は目の細かいハケ。底部に格子目叩きをもつもので、内外黒灰色を呈し、煮沸使用している。17は、体部外面が削り、口縁部から内面はナデ。外面は煤付で、口唇部から内面は暗灰色であることから、外蓋で煮沸使用している。

瓦質土器（第39図1・2） 1は体部外面は削り、口縁部から内面はナデ。摺目は6本単位。色調は外面灰黒色、内面黄灰色を呈する。2は火鉢で、口縁下に2条の突帯が貼付られ、その間に菊文のスタンプが入る。内外灰黒色を呈する。

陶器（第39図3～7） 3は陶器の小壺で、内面に格子目のタタキ当て具痕があるので、タタキ成形と分かる。外面のタタキ痕跡はナデ消されている。内外鉄釉を薄くかけ、口唇部は拭き取っている。胎は黄灰色。上野・高取系17c前半。4・5は陶器摺鉢である。4は全面に鉄漿をかけたのち、内外の口縁部にのみ茶褐色の鉄釉を厚くかける。胎は暗灰色で、小片のため摺目は見られない。口縁部には重ね焼きの痕跡はない。生産地は不明。5は全面に鉄漿をかけたのち、内外の口縁部にのみ茶褐色の鉄釉を厚くかける。胎はにぶい暗灰色で、小片のため摺目は見られない。口縁部には重ね焼きの痕跡はない。唐津系bタイプで17c前半代。6は陶器碗で、内外暗灰緑色の黄灰釉をかけ、畳付は釉剥ぎ。胎はにぶい暗灰白色。唐津系か。7は緑青皿で、半磁器ともいふべき堅緻な陶器。外面の口縁部と内面に灰緑色の灰釉がかかり、体部は露胎。胎は灰色。染付（第39図8） 碗で、青みがかった透明釉がかかり、胎は灰白色。畳付は釉剥ぎで、高台内面に砂目が付く。呉須は淡紺色で、にじみがある。

石臼（第82図1） 挽手穴の残るもので、擦面はよく使用されており、擦り目が潰れている部分もある。6分割ですり臼は6本である。石材は角閃石を多く含む多孔質の軟質凝灰岩で、灰白色であるが内面のみ変色しており使用のためかもしれない。側面に大きく煤が付着している。2.59kgを測る。

鉄刀子（第97図9） 刀子の関部と思われる。刃部は刃が欠損し、基部は木質が残る。



第39図 II区2号溝状遺構出土遺物実測図(1/3)

3号溝状遺構 (図版12-2、第42図)

II区の西側を南北に走る溝状遺構で、1号桶埋設遺構付近で途切れて北に短く続いている。1号溝状遺構との切り合い関係は不明で、4号溝状遺構の南端が検出されなかったが、土層から3号溝状遺構が切っていることは明らかである。幅は南部の最も広い所で1.2m、深さ40cmを測るが、北に向かって次第に狭く浅くなり、幅1.35m、深さ12cm程になる。

出土遺物 (図版26、第40図1)

1は土師質の小型の鉢で、体部外面は削り、口縁部から内面はナデ。外面黒褐色、内面暗灰褐色を呈するので、変色している。

4号溝状遺構 (図版12-2、第42図)

II区の西側を南北に走る溝状遺構で、中央で途切れて北に短く続いている。南端は5号溝状遺構が両壁を切っているため検出されなかったが、土層から3号溝状遺構を切ることは明らかである。残りの良いところで幅は0.65m、深さ0.1～0.2mを測る。

出土遺物 (図版26・28、第40図2・3)

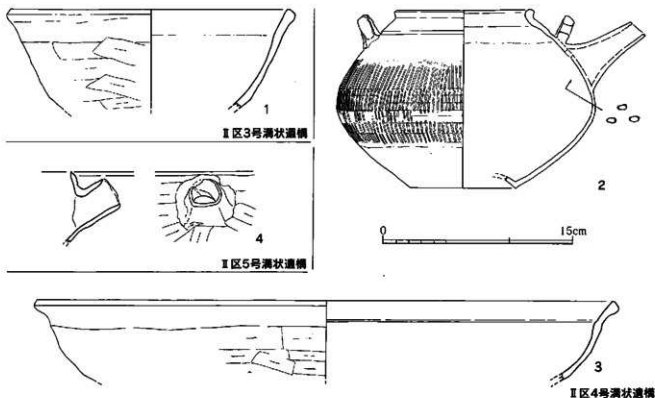
2は関西系の陶器土瓶で、黄灰色の灰釉が体部外面と内面口縁部にかかり、底部は無釉。部分的に貫入が見られる。外底部には煤が付着しており、直接火にかけたとわかる、内面は変色なし。18c後半～19c代。3は土師質の鉢で、体部外面は削り、口縁部から内面はナデ。外面は黒茶色、内面は灰黄褐色。

5号溝状遺構 (図版12-3、第42図)

Ⅱ区の中央を南北に走る溝で、中央部で西に広がっている。この西への広がりとは整地部分と考えられるが、埋土の判別ができなかったため、同一遺構として掘り下げた。深さもほぼ等しいため、本来の溝の部分は推定線で表現した。幅は土層で確認できる幅で2.5mあり、中央に幅1.05mの掘り直しが行われている。初期の段階は、整地層上から掘り込まれており、4号溝状遺構を切っているが、掘り直し溝はさらに上の整地層から掘り込まれている。深さは初期段階で65cm、掘り直し段階で47cmを測る。

出土遺物 (図版26、第40図4)

4は土師質の注口のある器種で、注口外面はナデ。その周囲は削り。内面はナデ。外面は煤附着。内面は灰黄褐色を呈する。



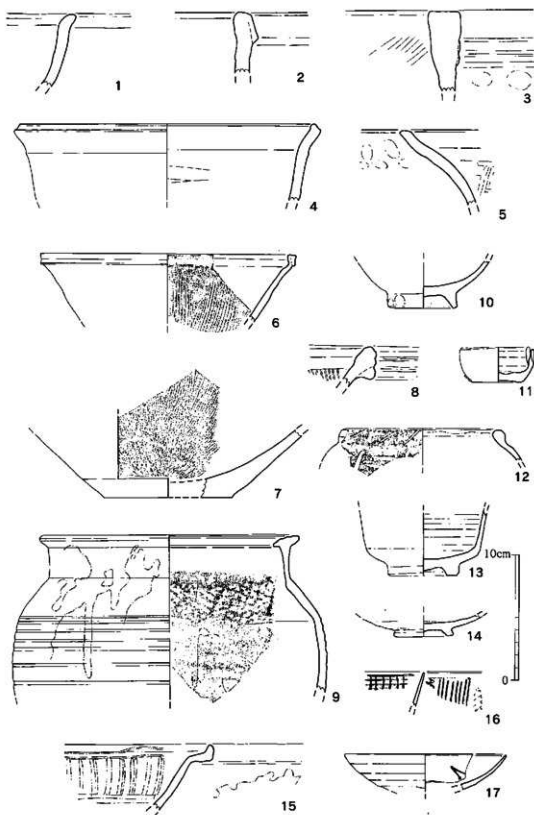
第40図 Ⅱ区3～5号溝状遺構出土遺物実測図(1/3)

北側落ち込み遺構 (図版13-1、第3図)

Ⅱ区の中央北側で、調査区壁にほとんどかかっている。埋土が異なるので、別遺構として掘り下げたが、深さがほぼ一致することから、基本的には一連の落ち込みと考えた。北側からは土師質土器が集中して出土した。

出土遺物 (図版26・28・36-3、第41図1～17・第80図8)

土師質土器 (第41図1～3) 1は内面に班状剥離が見られ、外面には煤が附着することから、煮沸使用されたとわかる。内外橙褐色を呈する。2は内外部分的に器壁が剥落しており、色調は



第41图 II区北侧落达出土遗物实测图(1/3)

内外灰黄褐色を呈する。3は大型で、口縁下に沈線が2条入り、口縁下には押さえが入る。内面はハケ目が入るが、その上下端はナデ消されている。

瓦質土器 (第41図4・5) 4は小型の鉢で、外面から内面口縁部はナデ。内面は体部板状工具でナデられている。外面は黒灰色が風化して変色し、内面は黒灰色を呈する。5は土瓶であろう。外面は削り、口縁部はナデ。内面の口縁部は押さえ。体部はナデ。

陶器撥鉢 (第41図6～8) 6は小型品で、内外暗茶褐色の鉄釉がかかり、胎は灰色。播目は15本単位。唐津系eタイプで須佐唐津窯の製品だろう。7は無釉で、胎は茶褐色。底部は糸切りで、播目は1本が細く、15本単位。8は無釉で、胎は橙褐色。播目は単位不明で、口唇部に重ね焼きの痕跡はない。備前焼Ⅳ期の17c前半か。

陶器 (第41図9～15) 9は小型甕で、内外に厚く暗茶褐色の鉄釉をかけ、口唇部は拭き取り。内面肩部に格子タタキが残る。肩部より下は釉が厚くかかっているため残っていない。外面のタタキ痕はナデ消されている。Ⅱ区北側落ち込みから出土した破片と接合した。10は碗で、胎は灰白色で、黄灰色の灰釉が全面かかり、畳付は釉剥ぎ。内外貫入が見られる。畳付に砂目がつく。上野・高取系か。11は小杯で、口縁部がやや歪んでいるが意図的なものかもしれない。底部は糸切り。内外に黄灰釉がかかり、外底に2ヶ所砂目跡の残る。12は外面にのみ鉄釉をかける水甕で、口縁部には沈線、肩部には凹線で彫文を施している。胎は暗橙灰色。高取系。13は陶器の火入れか香炉で、外面体部に濃緑灰色の銅緑釉がかかり、胎は灰色。畳付に砂目跡が3ヶ所見られる。見込みに変色のある範囲があり、小さな砂目が4ヶ所残っていることから、小器種を重ね焼きした可能性がある。14は半磁器ともいえる堅緻な陶器皿で、内外銅緑釉がかかっており、外面は薄くオリブ色に、内面はスカイブルーに発色する。見込みは蛇ノ目に釉剥ぎし、畳付は釉剥ぎで、高台内面は露胎。胎は灰白色。唐津Ⅳ期 (1690～1780年代)。15は陶器皿で、内外鉄漿をかけ、灰白色の黄灰釉の上に緑色の黄灰釉で縞文を描いている。胎はにぶい茶灰褐色。唐津ⅢⅣ期 (1690～1750年代)。

染付 (第41図16・17) 16は丸碗の口縁部。発色悪く青灰緑色の呉須で素描きされている。外面はよろけ縞文と縦縞の区画文が交互に充填されており、内面口縁部に格子目文が入る。やや暗い透明釉がかかり、胎は灰白。木原波佐見系Ⅴ-4期 (1820～1860年代)。17は皿で、乳白色の透明釉がかかり、胎は白。見込みは蛇ノ目釉剥ぎで、高台部分は露胎であろう。呉須は青緑灰色で、折松葉文と思われる。木原波佐見系Ⅳ期 (1650～1680年代) のⅤ-1期 (1680～1740年代)。

石板 (第80図8) 先端が薄く尖るので木製の枠をもつ石板であろう。頁岩製。14.3gを測る。

Ⅱ区西壁 (図版13-2、第42図)

西側の調査区壁の土層を観察すると、14a～c層は整地層と考えられ、最下層の14c層から備前焼播鉢片が出土していることから、17c後半～18c代の整地と考えられる。次に6・7号土坑が埋まった後に11層の整地層があることから、7層は19c前半代の整地の可能性がある。その上に6層の整地層があり、これは19c後半の整地であろう。現整地面は20c前半のものか。

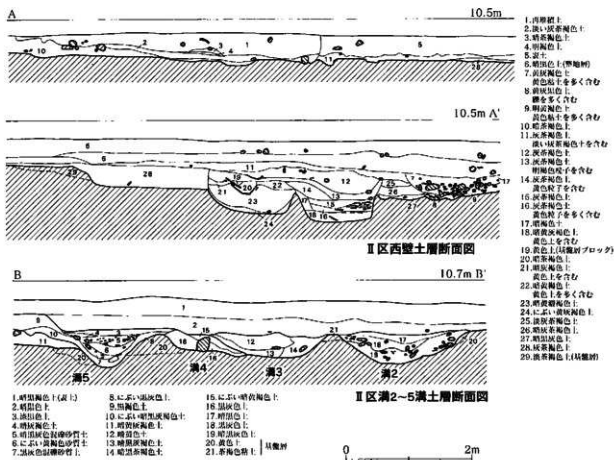
出土遺物 (図版26・28、第43図1～3)

1は14層出土の陶器播鉢で、暗赤灰褐色の鉄軸を内外に厚くかけ、胎は暗灰色。播目は12本単位で、上端はきれいにナデ消されている。唐津系eタイプで、須佐唐津窯の製品。2は18層出土の土師質の鉢で、体部外面は削り、口縁部から内面はナデ。3は15層出土の土師質大甕で、外面は摩滅。口唇部から内面は器面剥落のため調整不明。内外暗黄白色。

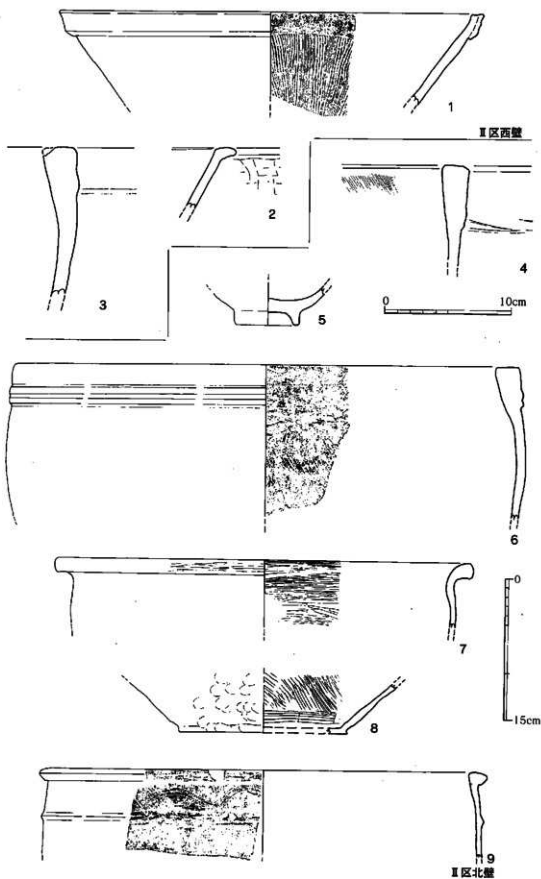
II区北壁土層出土遺物 (図版26・28、第43図4～9、第80図11)

4は中層出土の土師質大甕で、外面は口縁部に板状のナデ工具の痕跡があり。口唇部はナデ。内面口縁部はハケで、その下はナデで、同心円文の当て具痕は見られない。本来は黄白色だが、淡灰白色に変色している。5は中層出土の陶器碗で、灰白色の葉灰軸が内外にかかっており、髹付は軸剥ぎ。胎はぶい白灰色。

6は下層出土の瓦質の大鉢で、外面から内面口縁部までナデ。内面口縁下は同心円文の叩き当て具痕が見られる。内外いぶされて淡黒灰色を呈する。7は上層出土の鉢で、外面の口縁下は削り。口縁から内面にかけて丁寧な磨きが入る。内外橙褐色を呈する。高村焼系。8は上層出土の土師質甕の底部で、外面は押さえ。内面は体部が斜め方向のハケ。体部下端から見込みはハケ。外面は橙白色、内面は黄白色を呈する。9は下層出土の土師質鉢で、外面口縁下に突帯を貼付、その間に波状文を施す。色調は黄灰白色を呈する。第80図11は7層出土の滑石製石臼の胴部片。端部に切断した際の擦り切り痕がある。底部付近は粗割されたようだ。内面は炭化物が付着したために灰黒色を呈する。308.2g。



第42図 II区西壁土層断面図・2～5号溝状遺構土層断面図(1/60)



第43図 II区西壁・北壁出土遺物実測図(1・6~9は1/2、他は1/3)

3) Ⅲ区の遺構と遺物

Ⅲ区からは、土坑5基、井戸3基、溝状遺構3条が検出された。本区の1号溝状遺構と2号溝状遺構の間から南端までは削平のため礫層の基盤層が露出しており、遺構が失われているようだ。しかしながら、その地質からみて、本来遺構数が少ない地区であった可能性もある。

1号土坑（図版14-2、第44図）

Ⅲ区の南東隅に位置し、調査区壁に半分かかって検出された。径0.85mの平面円形プランで、壁の立ち上がりは緩やかで、深さも0.4m程しかない。床面の平坦な円形プランだが、径がやや小さく、埋土下位に小礫が充填されていたことから、桶埋設遺構ではないだろう。埋土は漆黒色土であった。出土遺物に図化できるものはない。

3号井戸は当初4号井戸としていたが、コンクリート井戸については番号をつけないことにしたため、番号を繰り上げた。

2号土坑（図版14-1、第44図）

Ⅲ区の中央南側に位置する長軸2.94m、短軸0.98mの平面長方形の土坑で、深さは17～22cmを測り、主軸はN-32°-Eである。出土遺物に図化できるものはない。

3号土坑（図版14-1、第44図）

Ⅲ区の中央南側に位置する長軸3.25m、短軸1.03mの平面不整形の土坑で、深い所でも15cm程しかなく、主軸はN-56°-Eである。出土遺物に図化できるものはない。

4号土坑（図版14-1、第44図）

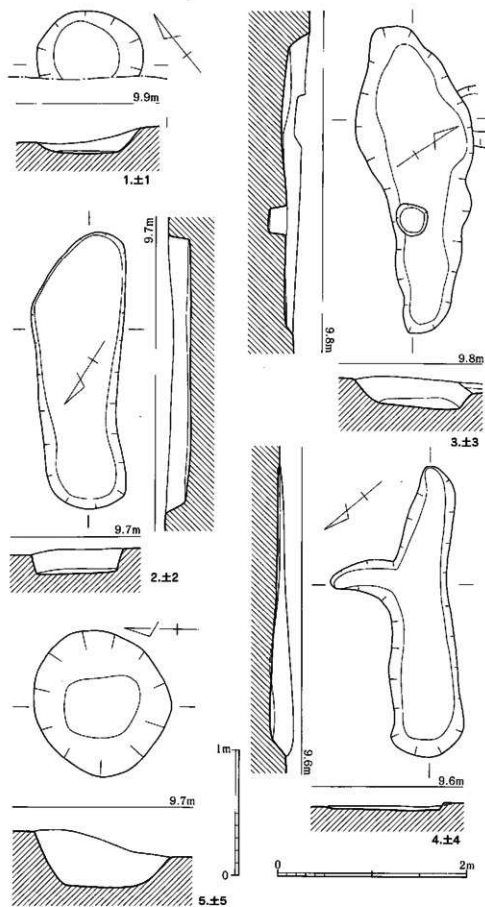
Ⅲ区の中央南側に位置する長軸3.08m、短軸0.78mの平面長方形の土坑に一部張り出しがつくもので、北側の深い所でも25cm程しかなく、主軸はN-50°-Eである。出土遺物に図化できるものはない。

5号土坑（図版14-1、第44図）

Ⅲ区の北西に位置し、1・2号溝状遺構の間に検出された。径1.15mの平面円形プランで、壁の立ち上がりは緩やかで、深さは0.45mを測る。床面は平坦で、径が0.8m程なので桶埋設遺構の可能性はある。出土遺物に図化できるものはない。

1号井戸（図版14-3、第45図）

Ⅲ区の南西隅に位置し、一部調査区外にかかって検出された。径2.5mの略円形の掘り方の北



第44図 Ⅲ区1～5号上坑実測図(1・5は1/30、他は1/40)

隅に、北側は素掘りの壁のままで、それ以外の壁には人頭大かそれ以上の川原石を略円形に積み上げ、径1.3mの井戸を組んでいる。北側壁に見える礫は基盤層内のもので、北側に偏っていることから、意図的に作られた構造といえる。また、石積のあった部分も中位以下は石がないが、一部に残っていたことから崩落したものと思われる。湧水がひどいために掘り下げることができず、礫が崩落しているか確認できなかった。掘削でできたところまでで深さは1.5m程。

出土遺物（図版29・30、第46図1～4）

1は土師質土器の杯で、外面にぶい赤褐色、内面赤褐色を呈する。内外ナデのみで摩滅がないことから、近世のものと考えられる。2は土師質甕の口縁部で、口縁部内面に一部ハケ目が残るがほとんどナデ消されている。白黄褐色を呈する。3は瓦質の鉢で、内面から外面口縁部までナデ、口縁下は削り。暗灰色を呈し、外面に炭化物が付着しており、煮沸使用されたことが分かる。4は陶器の甕で、暗黒赤茶色の厚い鉄漿釉を全面にかけた後、口唇部はふき取っている。胎は赤褐色。唐津系の18c後半頃のもののだろう。北九州市埴町遺跡第1地点13号埋藏に類例がある。

2号井戸（図版14・4、第45図）

Ⅲ区の北東隅に位置し、1号溝状遺構を切って検出された。長軸2.14m、短軸1.85mの略円形の掘り方の北東隅に、北東側は素掘りの壁のままで、それ以外の壁には人頭大かそれ以上の川原石を積み上げ、径0.85mの井戸を組んでいる。1号井戸同様に意図的に作られた構造である。底まで掘り下げることができ、深さ1.35mを測る。

出土遺物（図版28・29・30・38、第46図5～9・第82図3）

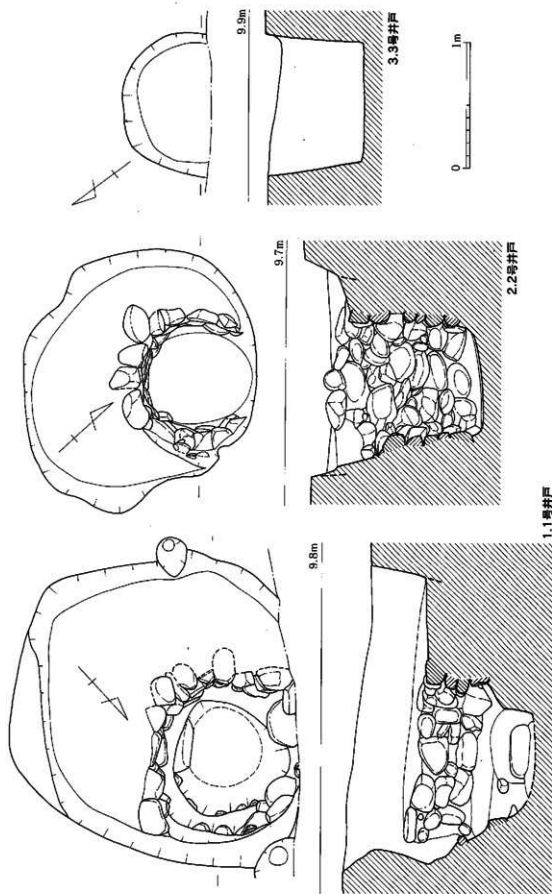
瓦質土器（第46図5） 大型の甕の頸部で、口縁部を外に折り返して肥厚させた物であろう。肩部には格子目のタタキ、内面はナデ。外面黄灰色、内面にぶい黄灰色を呈する。防長系の16c代か。全面摩滅しており混入品と考えられる。

陶器（第46図6・7） 6は陶器の香炉か火入で、鉄分の多い胎で表面は橙褐色、断面は灰色を呈する。外面体部に灰色の葉灰釉に暗緑灰色の呉須状の刷毛目が施され、一部に貫入がある。18c後半代。7は陶器の水滴で、回転ナデした上に陽刻の花文があることから、スタンプによる施文か。全面に黄灰色の灰釉がかかる。胎は黄白色。上野・高取系であろう。北九州市木屋瀬本陣跡Ⅱ区4トレンチに類例があり、これには「本山」の刻印が入る。

染付（第46図8） 8は端反碗で、外面に二重格子文がある。呉須は濃紺で、にじみがある暗灰白色の濁りのある透明釉がかかる。登付は釉剥ぎ。肥前V期の1820～1860年代であろう。

白磁（第46図9） 型打ちの菊花形皿で、外底部は蛇ノ目円形高台で蛇ノ目に釉剥ぎ。胎は白色で、青みがかった白色釉がかかる。肥前V期1780～1860年代であろう。

石臼（第82図3） 上臼で、上面には一部にノミ痕が残っているが、側面には見られない。供給口はわずかに残っている。擦目は細く、使用のため潰れている。擦目の単位はわからないが、8分割であろう。多孔質で軟質の凝灰岩で、角閃石を多く含む。欠損面に煤が付いており、表面は茶褐色に変色していることから、火を受けていることがわかるが、欠損面には見られないので、火を受けた後欠損したか割られたものと思われる。3.03kgを測る。



1.1号井戸

第45図 Ⅲ区1～3号井戸実測図(1/30)

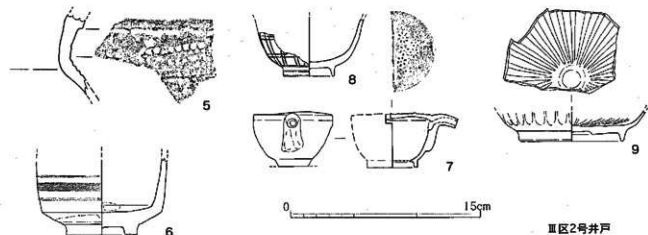
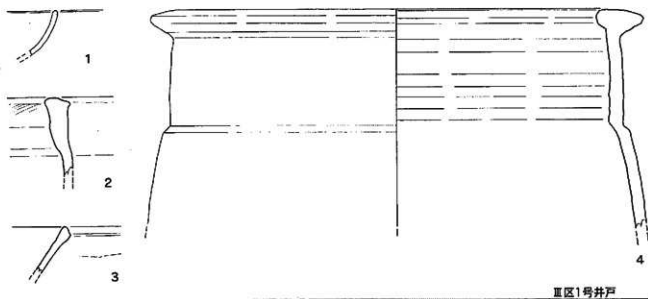
不明鉄製品 (第78図6) 断面方形の棒状鉄器で、屈曲部から細くなる。

3号井戸 (図版14-5、第45図)

Ⅲ区の南端に位置し、調査区壁に半分かかって検出された。当初土坑かと思われたが、深さや径の大きさ、掘り方の形状からみて井戸と判断した。平面プランは径1.5mで、底面まで掘りあがっており、深さ105mを測る。上層は、中位まで黒灰色土が埋め戻されたように厚く堆積しており、下位まで基盤層の黄色ブロックを多く含む灰褐色土が入るが、これも短期間に埋め戻したように見える。土層から索掘りの井戸と見られる。図化できる出土遺物はない。

1号溝状遺構 (図版14-1、第3図)

Ⅲ区の北側を東西に走る溝状遺構で、東端は2号井戸に切られている。幅は最も広いところで1.23m、深さは24cmを測り、東に行くほど狭く浅くなる。西はⅡ区の6号溝状遺構につながり、東はⅣ区の9あるいは11号溝状遺構につながるのだろう。



第46図 Ⅲ区1・2号井戸出土遺物実測図(1/3)

出土遺物（図版29・30・36-3、第47図1～5・第80図3）

瓦質土器（第47図1） 土瓶で、上半の文様は型打ちによるもので、内面の粘土帯の接合痕から、口縁部・上位・中位・下位の粘土帯を積み上げていることがわかるので、各部位を型打ちして、組み合わせて作ったことが分かる。文様は松林文の間に珠文を充填しており、鉄銹を模倣したもののだろう。外面には全体的に煤が付着しており、実際に使用されている。内外黒灰色。

陶器槽鉢（第47図2・3） 2は鉄葉を全面にかけており、胎は暗灰色。26本単位の目の細かい描目が入る。上野・高取系Fタイプで18c末～19c中頃のもの。3は無釉で、胎は暗赤茶褐色を呈する。上野・高取系Bタイプで17c初頭～17c後葉のもの。片口部の両端部に押さえの痕跡が残る。描目は9本単位。

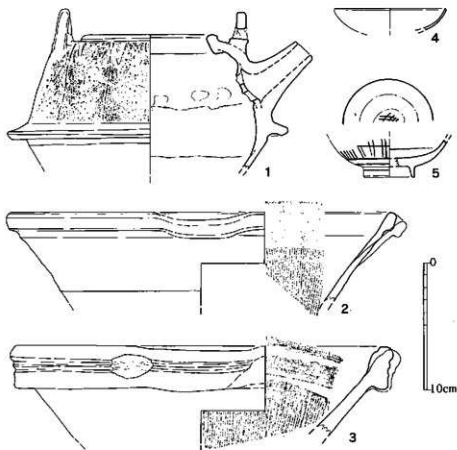
白磁（第47図4） 小皿で、釉は乳白色、胎は灰白色。

染付（第47図5） 端反碗の底部片であろう。外面に二重格子文、見込みに格子文が青灰色の

呉須で描かれ、やや暗い透明釉がかかる。胎は灰白色。見込みに白濁したアルミナが蛇ノ目状に厚くかかっており、木原波佐見系V-4期（1820～1860年代）のものであろう。

砥石（第80図3）

方形の板状のもので、側面・上下端面は成形時に整えられたもの。使用面は表裏2面で、よく使用されている。使用痕は頁岩製。59.6gを測る。



第47図 III区1号溝状遺構出土遺物実測図(1/3)

2号溝状遺構（図版14-1、第3図）

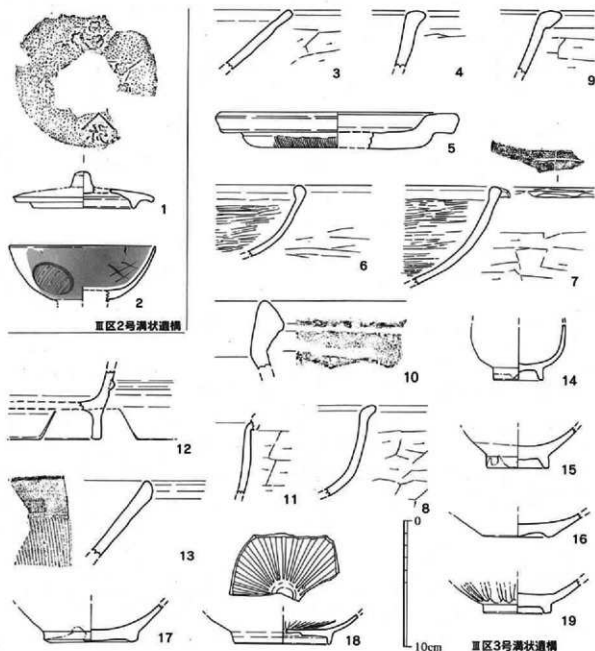
Ⅲ区の北側を東西に走る溝状遺構で、東端で3号溝状遺構に接しているが、切り合い関係は不明確だった。西はⅡ区の6号溝状遺構につながり、東はⅣ区の9あるいは11号溝状遺構につながるのだろう。幅は広いところで62cm、深さは15cm程である。

出土遺物 (図版29・31、第48図1・2)

1は瓦質の湯釜の蓋である。天井部の文様は型打ちによるもので陽刻である。梅樹文と屋号らしい「弥」の字の逆字がある。内面ナデで、内外黒色。19c代。2は染付の丸形碗で、外面にコンニャク印判で、丸文と格子文が入る。呉須は発色悪く暗灰緑色。暗い透明釉で、胎は灰白色。見込みに蛇ノ目軸刺ぎ。木原波佐見系V-3期(1780~1810年代)。

3号溝状遺構 (図版14-1、第3図)

Ⅲ区の西側を南北に走る溝状遺構で、北東隅で2号溝状遺構に接しているが、切り合い関係は不明確だった。溝状遺構幅は南端が最も広く1.23mを測るが、北に向かって次第に狭くなる。深さも南端は30cm程あったが、北に向かって浅くなっている。溝状遺構の走る方向はⅣ区12号溝



第48図 Ⅲ区2・3号溝状遺構出土遺物実測図(1/3)

状遺構とほぼ一致しており、同時併存の可能性がある。

出土遺物（図版29・30・38、第48図3～19・第83図1）

土師質土器（第48図3～8） 3・4は鉢で、外面体部は削り、口縁部から内面はナデ。3は外面煤付、内面はにぶい灰色。4は外面暗灰褐色、内面黒褐色。5は土師質の火消し壺の蓋で天井部はナデ。内面はハケ。天井部から内面の端部は黄褐色で、内面は漆黒色を呈する。6・7は内面口縁部に玉縁がつく焙烙で、外面体部は削り、口縁部は内外ナデ。内面体部は丁寧な磨き。外面はにぶい灰褐色で、部分的に煤付。内面はにぶい白褐色。7は口縁部外面に耳状把手が付き、耳状把手の上面に十字の沈線が入る。6・7は高村統系。8は鉢で、外面体部は削り、口縁部から内面はナデ。内面は斑状剥離があり、煮沸使用されたと思われるが、外面には煤があまりつかない。

瓦質土器（第48図9～12） 9は鉢で、外面体部は削り、口縁部から内面はナデ。器面の剥落があるが変色なし。10は瓦質の甕で、肩部に格子目のタタキが入る。内外風化が著しい。頸部から内面はナデ。黒灰色を呈する。11は瓦質の鉢で、口縁部が欠損している。外面は削り、内面は磨き。内外黒色を呈する。12は瓦質の火鉢の底部で、逆台形の脚がつく。外面は黒灰色を呈する。内面はにぶい淡灰黄色。

陶器指鉢（第48図13） 内外薄い暗茶褐色の鉄釉をかけ、胎は橙灰色。小片のため欄目は単位不明。上野・高取Eタイプで18c後半～19c代。

陶器（第48図14～16） 14は陶器の小竈で、内外に鉛釉をかけ、高台部は露胎。胎は暗灰色。上野・高取系。15は半磁器とよべる堅緻な陶器の碗で、外面に濃い青緑色の銅緑釉を、内面に灰緑色の灰釉をかけ分けている。唐津Ⅲ期（1650～1690年代）。16は陶器の皿で、灰白色の薬灰釉を内面に薄くかけている。外面は露胎で、見込みには大きな砂目跡が3ヶ所つく。高台にも同じ砂目跡が3ヶ所つくものと思われる、同じ器種の重ね焼きと分かる。胎は橙色。上野・高取系。

白磁（第48図17・18） 17は中国製で、乳白色の釉が盛付までかかる。胎は灰白色。横田・森田分類のⅣ-1aにあたり、11c代。混入と思われるが、割れ口の摩滅は見られない。18は皿で、型打ちによる菊花形。やや暗い透明釉で、胎は灰白色。蛇ノ目凹形高台で、高台内面から蛇ノ目に釉剥ぎ。ハマ目跡は4ヶ所つくものと思われる。肥前Ⅴ期1780～1860年代であろう。

青磁（第48図19） 見込みのスタンプによる文様が、釉が覆っている。外面は細い筋連弁で、高台の露胎部が淡橙色なのは、焼成不良のためと思われる、体部の胎は本来の灰色を呈する。龍泉窯。横田・森田分類のⅠ-5c類で13c代。

磁石（第80図9） 磁石で上面のみ使用、頁岩製で76.2g。

石臼（第83図1） 下臼で、軸受け穴が残っている。欄目が摩滅しており、側面の加工痕もわからないが、使用のためでなく石材が軟質なためであろう。多孔質な凝灰岩で、他の石臼石材の凝灰岩とは異なっている。2.76kgを測る。

北側落ち込み遺構（図版14-1）

Ⅲ区の北側で、調査区壁にほとんどかかっており、わずかしこ検出されなかった。Ⅱ区のそれと同じで整地層を埋土としている。出土遺物に図化できるものはない。

4) IV区の遺構と遺物

IV区からは、掘立柱建物跡2棟、欄状遺構1基、上坑18基、桶埋設遺構1基、井戸2基、埋設遺構2基、排水溝遺構1条、溝状遺構12条、暗渠遺構1条のほか多くのピットが検出された。

なお、7号溝状遺構と8号溝状遺構は当初性格の異なる遺構と考えていたが、同一遺構と思われるので、8号溝状遺構を欠番とし、7号溝状遺構と合わせて報告する。

1号掘立柱建物跡（図版15-2・3、第49図）

IV区の東側に検出された建物跡で、南辺が調査区外に出るため、建物の梁・桁が明瞭でないが、ここでは南北を長軸とする建物を想定した。3×2間以上で、5.92m×3.93m以上を測り、主軸はN-46°-Eであり、8号溝状遺構と平行、1号溝状遺構と垂直方向にあたる。柱穴は平面略円形で、径は40cm前後のものが多く、深さは深いものでは75cmに達する。柱痕は検出されなかったが、柱1から柱根が出土した。柱穴の中位の狭くなるところから下が残っており、他の柱穴も隣接して同規模の柱穴があることから、建替えの可能性がある。北に1号欄柵を復元したが、柱間が梁と一致していることから、軒の可能性もある。

出土遺物（図版39、第79図5）

柱根で、表面がかなり腐食しており、残りがわるい。下端には斜めからカットした面がある。側面は素面を残す部分が多いが、表表面には削った平坦面もあり、本来断面長方形だったようだ。樹種は鑑定していないので不明。他に出土遺物に図化できるものはない。

2号掘立柱建物跡（図版16-1、第49図）

IV区の中央に検出された建物跡で、ピットが集中する場所で柱間から2×3間の建物を復元した。軒や欄、張り出し部などが付随する可能性もあるが不確実なので、ここでは主屋部分の建物のみと考えた。規模は2.86×3.45mを測り、主軸はN-47°-Wであり、8号溝状遺構と平行である。柱穴は平面楕円形で、長軸47cm、短軸40cm前後のものが多く、深さは深いものでは30cmに達する。柱痕は検出されなかったが、柱穴の掘り方の上位が広がっているものが多いことから、建物廃絶後、柱が抜き取られた可能性がある。

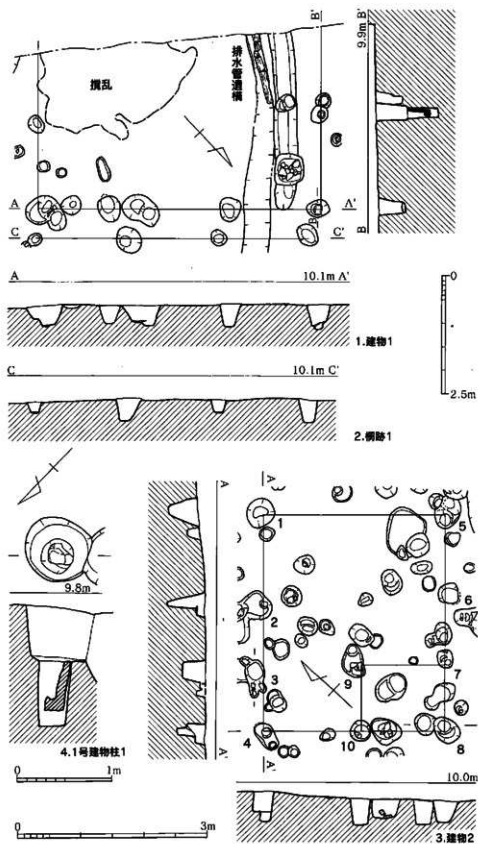
出土遺物に図化できるものはない。

1号欄状遺構（図版15-2、第49図）

IV区の東側に検出された1号掘立柱建物跡の北に復元したもので、柱の位置が建物の軸にのらないので、欄と考えたが、柱間が梁と一致していることから、軒の可能性もある。

1号土坑（図版16-2、第50図）

IV区の東端に位置し、2号土坑の東に検出された。長軸1.25m、短軸1.2mの平面楕円形ブラ



第49図 IV区1・2号掘立柱建物跡・1号橢円状遺構実測図(3は1/60、4は1/40、他は1/80)

ンである。壁の立ち上がりは緩やかで、深さも0.35m程しかない。小礫が充填されており、中央部は石がなく窪んでいるので、上に礎石があったのかもしれない。

出土遺物（図版32、第52図1）

1は内外に銅緑釉をかけ、外面は薄くかりオリブ色になる。胴下位から底部は露胎、見込みは蛇ノ目軸刺ぎ。胎は灰白色。肥前Ⅳ期の1690～1780年代。

2号土坑（図版16-3、第50図）

Ⅳ区の東端に位置し、1号土坑の西に検出された。長軸1.35m、短軸0.92mの平面楕円形プランである。壁の立ち上がりは緩やかで、深さも0.2m程しかない。小礫が充填されているが、上面が平坦にはならないし、1号土坑のように窪みもない。規模が1号土坑とはほぼ同じであることから、セツトになって存在した可能性があるもので、本来上に礎石を置けるように上面を平坦にしたか、あるいは側縁を高くしていたものが削平されたのではないだろうか。図化できるものは出土していない。

3号土坑（図版16-4、第50図）

Ⅳ区の東部に位置し、1号溝状遺構の裏込部に検出された。東側のプランが明瞭でないが長軸1.54m、短軸1.3mの平面楕円形プランである。北側に偏って平面略円形の深い部分があり、その底面径は0.98mである。壁の立ち上がりは深い部分は急だが、それ以外は緩やかで、深い所で0.52mを測る。掘り方の規模や形状から桶埋設遺構の可能性が高い。おそらく、1号溝状遺構に伴うものであろう。

出土遺物（図版30・32、第52図2～4）

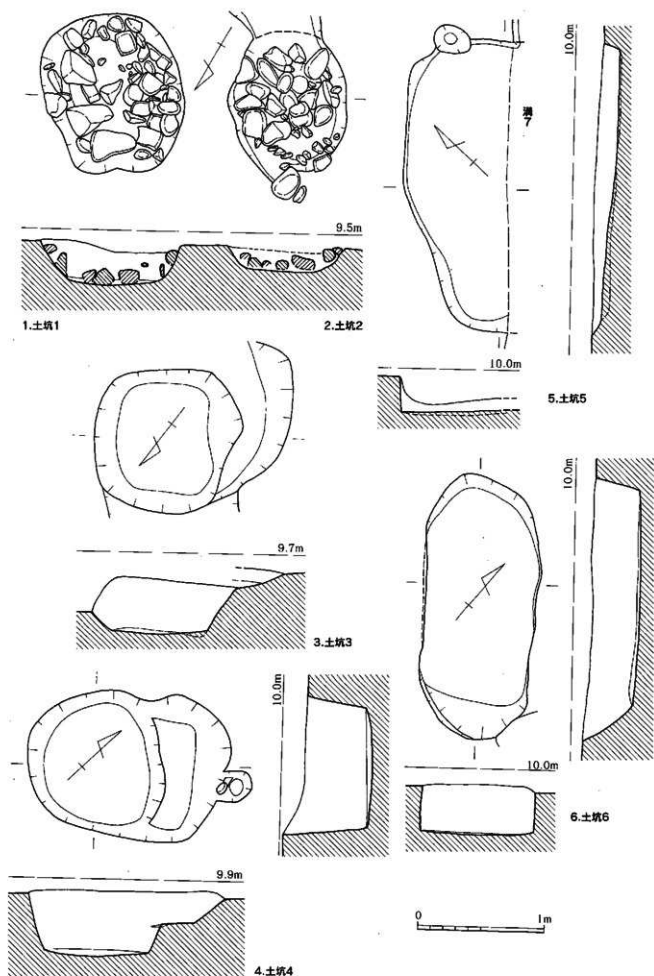
2・3は土師質土器で、2は、口縁下の削りで口縁部との間に段を有する。内面は丁寧な磨き。灰黄褐色を呈する。高村焼系。3はこね鉢の底部で外面削り、内面丁寧な磨きで、底部はやや摩滅している。白灰色～黒色を呈する。高村焼系に入るか。4は陶器の小型甕の底部で全面に淡灰褐色の薬灰釉をかけたのち、肩部に乳白色の薬灰釉を流し掛けしている。底部は釉剥ぎしており、糸切りが残る。見込みに小さい目跡が5ヶ所残っており、小型器種を入れて焼いたものであろう。上野・高取系であろう。17c代か。

4号土坑（図版16-5、第50図）

Ⅳ区の中央南側に位置する、長軸1.6m、短軸1.2mの平面楕円形プランの土坑である。南西部の深い部分は径1.14mの円形で、底面はほぼ平坦で径0.92mである。壁の立ち上がりは深い部分は急だが、それ以外は緩やかで、深い所で0.53mを測る。掘り方の規模や形状から桶埋設遺構の可能性が高い。埋土は黒色土。出土遺物は、土師質土器片2点と陶器片1点のみで、図化できる遺物はない。

5号土坑（図版15-1、第50図）

Ⅳ区の中央部南側に位置し、東半分が7号溝状遺構に切られて検出された。長軸2.3mで、短



第50图 IV区1~6号土坑夹喇网(1/30)

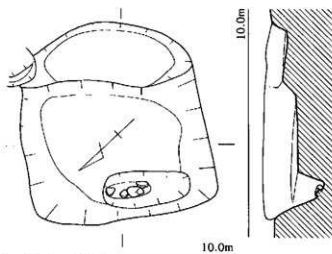
軸0.9m以上の平面長方形プランである。底面はほぼ平坦で、壁の立ち上がりは北側が急で南側は緩やかである。非常に浅く、深い所でも0.15m程しかない。主軸はN-47°-Wである。埴土は礫を多く含む暗灰褐色土。出土遺物に図化できるものはない。

6号土坑 (図版15-1、第50図)

Ⅳ区の中央部に位置し、17号土坑を切って検出された。長軸2.1mで、短軸0.95mの平面長方形プランである。底面はほぼ平坦で、壁の立ち上がりは北側が急で南側はやや緩やかである。深い所で0.45mを測る。主軸はN-40°-Eである。

出土遺物 (図版32、第52図5・6)

5は陶器の大皿で、内外青みがかかった灰色の薬灰釉が厚くかかっており、釉切れが目立つ。底部は露胎。胎はにぶい暗橙灰色。見込みに目跡が軸とともに外れた痕跡がある。上野・高取系か。6は陶器の緑溝皿で、緑灰色の灰釉が内外にかかり、体部下位は露胎。胎は暗橙灰色。肥前Ⅱ期の1610~1650年代。



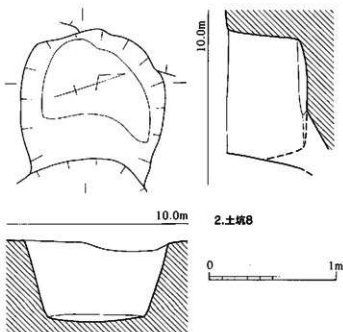
1.土坑7

7号土坑 (図版17-2、第51図)

Ⅳ区の中央南部に位置する長軸1.6m、短軸1.5mの平面略方形プランで、主軸はN-46°-Eである。2段階りになっており、底面はほぼ平坦である。床面や掘り方が略方形であることから、桶堀遺構ではないようだ。壁の立ち上がりはやや急で、深い所でも20cm程しかない。

出土遺物 (図版32、第52図7)

7は染付の碗であろう。小片のため文様は不明。料須は濃紺で、やや暗い透明釉がかかる。胎は白。木原波佐見系V-4期 (1820~1860年代) の可能性が高い。



2.土坑8

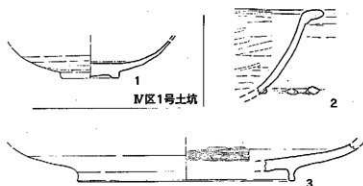
第51図 Ⅳ区7・8号土坑実測図(1/30)

8号土坑 (図版17-1、第51図)

Ⅳ区の中央南部に位置し、1号井戸に切られている。長軸1.2m以上、短軸1.16mの平面楕円形プランで、底面は中央部がやや深く、壁の立ち上がりは急で、深い所で65cmである。掘り方や規模から桶埋設遺構の可能性はある。出土遺物に図化できるものはない。

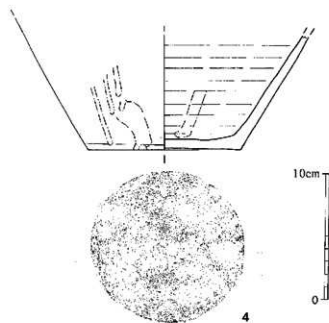
9号土坑 (図版17-1、第53図)

Ⅳ区の中央南部に位置する長軸4.2m、短軸3.0mの不整形プランの大型土坑で、主軸はN-32°-Wである。ある。南東部が2段掘りになっており、深い部分の床面は平面略長方形で、ほぼ平坦である。壁の立ち上がりはやや急で、深い所でも60cm程である。出土遺物に図化できるものはない。



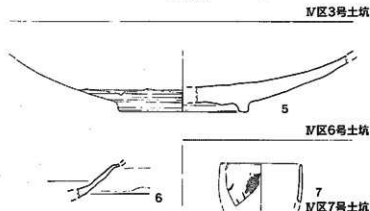
10号土坑 (図版17-3、第53図)

Ⅳ区の中央南端に位置する平面略円形プランの土坑で、径1.25mを測る。壁の立ち上がりはやや急で、深い所で50cm程である。床面はほぼ平坦で、掘り方や規模から、桶埋設遺構の可能性はある。出土遺物に図化できるものはない。



11号土坑 (図版17-4、第53図)

Ⅳ区の中央南端に位置する平面不整形プランの土坑で、暗渠に切られる。径1.2mを測り、底面は楕円形になる。壁の立ち上がりは緩やかで、深い所でも28cm程しかない。出土遺物に図化できるものはない。



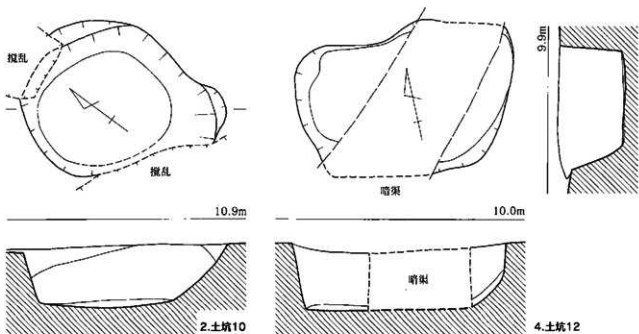
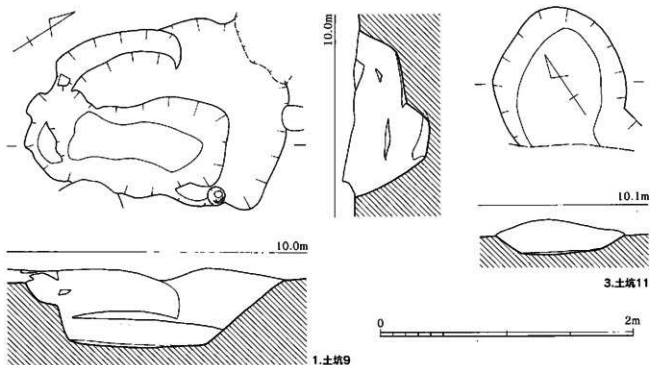
第52図 Ⅳ区1・3・6・7号土坑出土物実測図(1/3)

12号土坑 (図版15-1、第53図)

Ⅳ区の南西端に位置し、暗渠に切られる。長軸1.73m、短軸1.22mの略方形プランの土坑で、主軸はN-79°-Eである。壁の立ち上がりは急で、深い所で55cm程ある。

出土遺物 (図版30、第55図1~7)

土師質土器 (1~6) いずれも鉢で、1は外面削り、内面ナデ。本米黄橙色を呈するが、外面煤付き。2は内外ナデで、焼成不良のためか内外黒色を呈する。3は外面削り、内面はナデ。6



第53図 Ⅳ区9~12号土坑実測図(1/30)

に近いが、やや色調が異なる。内外暗黄褐色だが、外面は燻されたようで光沢がある。4は外面削り、内面丁寧な磨き。内外白黄色～黒灰色で、使用による変色が見られない。5は外面削り、内面丁寧な磨きで、内外灰白色。6は外面削り、内面丁寧な磨きで、外面下端は使用のため摩滅している。

陶器(7) 甕の口縁部。無釉で、肩部に自然釉がかかる。胎は灰色。備前焼Ⅳ期後半の16c後半代。

13号土坑(図版17-5、第54図)

Ⅳ区の南西端部に位置する、径82cmの円形プランで、底面は中央部がやや深く、壁はほぼ直に立ち上がり、床面はほぼ平坦で43cmを測る。北西側から礫や板材が出土しているが、板材は廃棄されたものと考えられる。桶埋設遺構にしては径が小さい。

出土遺物(図版32、第55図8・9)

8は瓦質鉢の口縁部で、外面は摩滅し、内面は剥離しており、混入品と思われる。内外暗灰色を呈する。9は関西系の白磁で、やや暗い透明釉で貫入を意匠している。胎は白。他に2重格子文の染付碗片やタイル、コンクリート瓦片などが出土している。

14号土坑(図版17-1、第54図)

Ⅳ区の中央に位置する、長軸1.5m、短軸1.4mの平面楕円形プランの土坑である。底面は径70cmの円形を呈し、壁はほぼ直に立ち上がり、床面はほぼ平坦で深さは78cmを測ることから、桶埋設遺構の可能性が高く、東壁のテラスは円形プランの掘り方を掘り下げるための足場であったのかもしれない。

出土遺物(図版38、第78図3・6)

3・6は断面方形の棒状鉄器で、同一個体の可能性あり。

15号土坑(図版18-1、第54図)

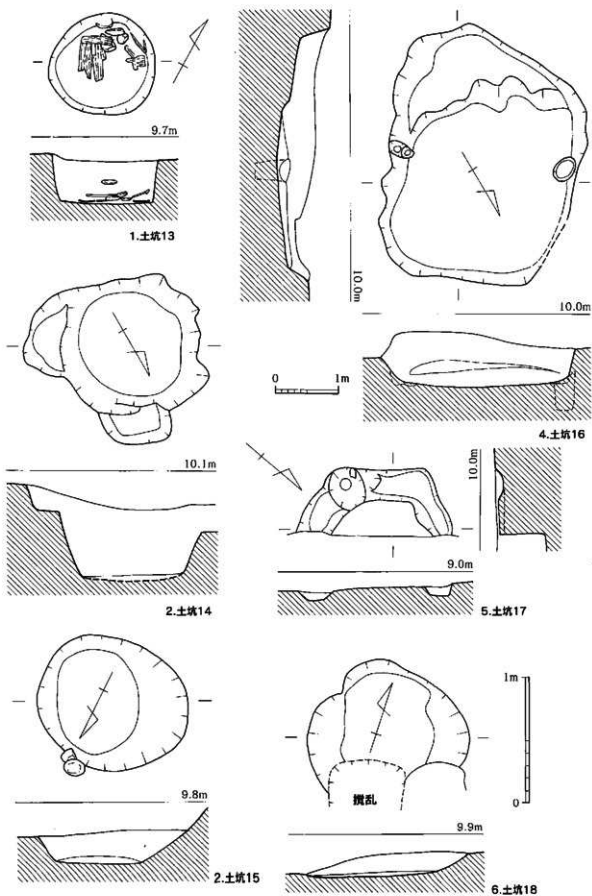
Ⅳ区の中央北側に位置し、9号溝状遺構の石組裏込めを切って検出された。長軸1.2m、短軸1.06mの平面楕円形プランで、底面は長軸85cm、短軸65cmの楕円形を呈す。床面はほぼ平坦で深さは50cmを測り、壁は北側がほぼ直に立ち上がり、南側は緩やかであることから、9号溝状遺構に伴う桶埋設遺構の可能性が高く、西北の礫群は本遺構の周囲にもあったのかもしれない。

出土遺物(図版30・32・36-3、第55図10～13・第80図2)

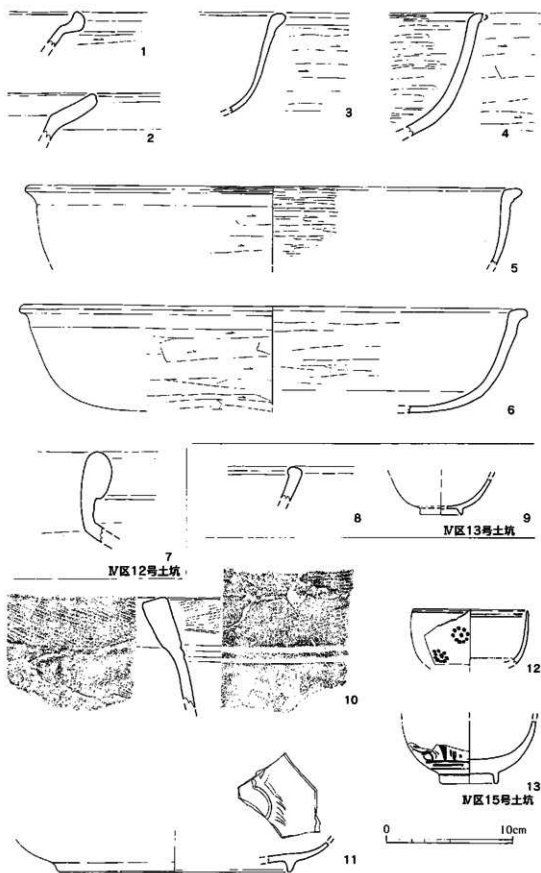
土師質土器(第55図10) 大甕で、口縁内外と口唇部にハケ目、内面口縁下には同心円文のタタキ当て具痕が残る。外面はナデでタタキ痕をナデ消している。胎は内外黄白色で変色はなかった。18c後半～19c前半代。

白磁(第55図11) 皿で、見込みの縁に片切り彫りによる文様を巡らすものだろう。登付は釉剥ぎ、青みがかかった透明釉で、胎は白。肥前白磁と思われるが時期は不明。

染付(第55図12・13) 12は半球形碗で、コンニャク印判による星梅鉢文が黒褐色の呉須で外



第54图 IV区13~18号土坑实测图(4是1/60, 他1/30)



第55图 N区12·13·15号土坑出土物实测图(1/3)

面に施される。青灰色の透明釉がかかる。13は陶胎染付である。小片のため文様は不明で、青灰色に発色している。胎は灰色。貫入が見られる。見込みに鉄分の吸着が見られる。透明釉は焼成不良のためか、まだらに発色している。12・13は木原波佐見系V-3期(1780~1810年代)か。磁石(第80図2) 薄く剥がれた残片で、本来方形の板状のもので、側面・上端面は成形時に整えられている。使用面は表面のみ。頁岩製で、24.1gを測る。

16号土坑(図版15-1、第54図)

N区の北西部に位置する長軸4.07mで、短軸3.2mの不整形プランの大型土坑で、主軸はN-31°-Eである。北部が2段掘りになっており、深い部分の床面は平面略方形で、ほぼ平坦である。壁の立ち上がりはやや急で、深い所でも45cm程である。テラスのプランが不整形であることから、本来方形プランであったものを南側から掘り込んだ可能性が高い。出土遺物に図化できるものはない。

17号土坑(図版15-1、第54図)

N区の中央部南に位置し、6号土坑に半分切られて検出された。径125cm程の円形プランと思われる。周縁部が深くなり弧状の溝状遺構のように見えるが、検出段階では中央部がやや下がっていたので土坑とした。周縁部は20cm程度の深さで、壁の立ち上がりはやや急である。植木の掘り込みと考えられる。出土遺物に図化できるものはない。

18号土坑(図版15-1、第54図)

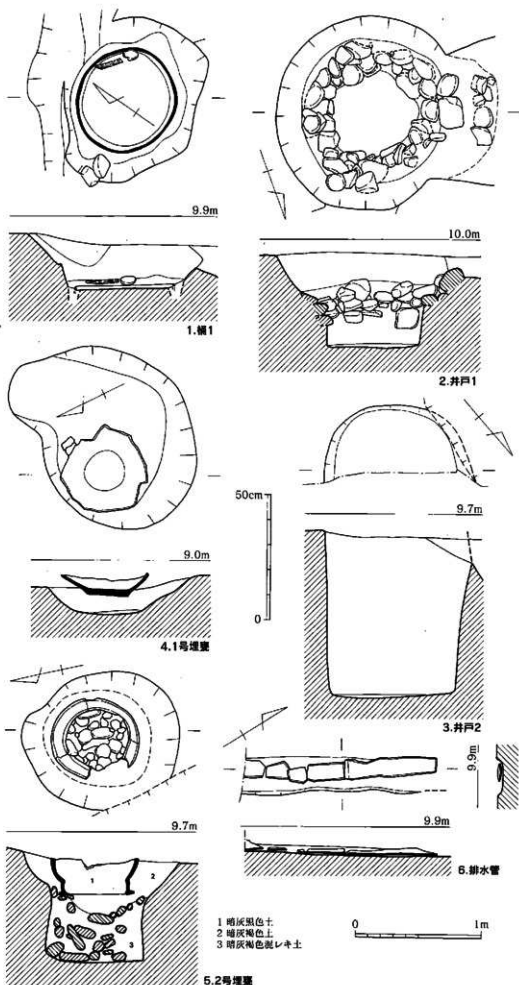
N区の中央南端部に位置し、攪乱と2号埋設遺構に切られて検出された。径128cmの円形プランで、底面はほぼ平坦で、壁の立ち上がりは緩やか。底面は長軸約80cm、短軸72cmの楕円形で、深さは18cmを測る。掘り方にやや相違があるが、桶埋設遺構の可能性はある。出土遺物に図化できるものはない。

1号桶埋設遺構(図版18-2、第56図)

N区の西部に位置し、12号溝状遺構を切って検出された。径136cmの円形プランで、側板の下部のみ残っていた。底板が残っていなかったことから上げ底状の桶であったと思われる。側板を抜き取って下場を確認していないが、床面は側板部分を下げていると思われる。桶の径は110cmで、壁の立ち上がりが床から20cm程度までほぼ直で、それより上は緩やかである。深さは40cmを測る。

出土遺物(図版31・38、第58図5、第78図1・2)

第58図5は瓦質の火鉢で、外面から内面口縁部は丁寧に磨かれ光沢がある。内面体部はナデ。内外黒色を呈する。18c後半~19c前半代か。第78図1・2は断面円形の棒状鉄製品。



第56図 N区1号桶型設置構、1・2号井戸、1・2号埋塞遺構、排水管道構実測図(4・5は1/15、他は1/30)

1号井戸 (図版15-1、第56図)

Ⅳ区の西部に位置し、8号土坑を切って検出された。径150cmの円形プランで、東壁がやや張り出している。これは8号土坑を埋めて裏込め土を入れたためであろう。人頭大の川原石を中位から積み、下位には見られない。積み方はやや粗雑で面が揃っていない。内部に礫の落ち込みはほとんどなかったため、上位も現状を留めているものと考えられる。井戸の内径は約60cmである。

出土遺物 (図版30・32、第58図1～3)

1・2は染付である。1は口縁がやや反る蕎麦猪口。発色がよく濃紺の呉須で、草花文を外面に描く。透明釉で胎は白色。髹付は釉剥ぎ。形態から肥前Ⅴ期の1780～1820年代であろう。2は端反碗で、透明釉がかかり、胎は白色。呉須は濃青灰色を呈する。髹付は釉剥ぎ。外面は格子龍文。面は口縁部に格子文帯、見込みに崩れた「寿」が入る。木原波佐見系Ⅴ-4期(1820～1860年代)。

3は瓦と思われる。断面L字形の内面2面に4本単位の櫛書沈線が2面に入ることから、これを拵り止めとして重ね合わせていたものと思われる。外面は灰白色だが銀色をなす部分がある。内面は黒灰色。北九州市大手町遺跡第2地点と堅町遺跡第1地点に類例がある。

2号井戸 (図版19-1、第56図3)

Ⅳ区の中央北端部に位置し、半分調査区壁にかかっている。径120cmの円形プランで、井桁らしいものは見られなかったため素掘りと思われる。深さ130cmで底に達し、下部にも構造物は見られなかった。埋土は暗黒褐色土。

出土遺物 (図版30、第58図4)

4は瓦質鉢で、外面体部から内面口縁部はナデ、内面体部は目の細かいハケ。外面底部に格子目タタキが入ることから防長産足鍋と思われる。内面は暗灰色。外面には炭化物が付着しており、煮沸使用している。14c代。

1号埋甕遺構 (図版18-3、第56図4)

Ⅳ区の東部に位置し、1号溝状遺構の裏込め土を切って検出された。現状では長軸83cm、短軸62cmの不整形プランだが、甕の底部しか残っていないことから、上面がかなり削平されていることがわかる。したがって、本来の掘り方は90～100cmの円形が楕円形であったと思われる。深さ15cm程しか残っておらず、甕の底部が基盤層よりやや上から検出されたことから、裏込めしてから据えたことがわかる。

出土遺物 (図版30、第57図1)

1は上師質大甕の底部で、外面は押さえが不規則に入る。内面はハケ。底部はナデ。底底部は板状瓦痕の上をナデ。また、使用のため摩滅している。外面は黄灰白色、内面は灰白色を呈し、変色がないことから、水甕として使用したものか。

2号埋甕遺構 (図版18-4、第56図5)

Ⅳ区の中央部南に位置し、18号土坑を切って検出された。径63cmの円形プランで中央に甕を倒立して据え、裏込め土を充填させて固定している。甕の下は径40cmのビットがありその中に小礫が充填されていたことから、水琴窟と考えられる。深さ45cmを測るが、甕の口縁部しか残っていないことから上面が大きく削平されていたことがわかる。

出土遺物 (図版33、第57図2)

2は陶器の甕で、最大径を測る部分に指頭圧痕が巡る。肩部に5弁花形貼付文がつく。暗黒赤褐色の鉄葉釉を全面に薄くかけ、口唇部は拭き取り。胎は赤褐色で、高取・小石原系であろう。18c前葉～中葉か。

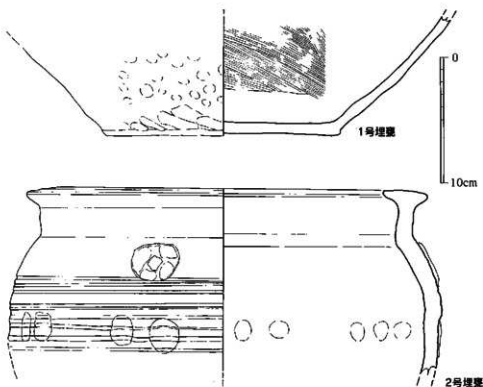
排水管遺構 (図版15-2、第56図6)

Ⅳ区の東部南端に位置し、調査区壁にかかって検出された。幅31cmの溝状掘り方の中に土師質の陶管が3個体、端部が掛るように連なって出土した。掘り方の深さは5cm程しかなく、陶管は基盤層に接していた。削平のために北に向かうほど浅く、残りが悪くなる。陶管自体も筒状のものが半截された状態であり、残りの良い1個体のみ取り上げた。陶管間は漆喰で固定しておらず、径の小さい方の端部を挿入しただけのようである。

出土遺物 (図版31、第58図6) 土師質の土管で、粘土帯積み上げ成形で、径が小さいため手が入らなかったのか内面は上端以外押さえのみ。上端は丁寧にナデられており、下端は接地した痕跡があるので、受け部を上にして焼成している。内面は排水の影響か煤がついたような変色が見られる。上端には漆喰が大きく付着しているが、下端にはついた痕跡がないので、つなぎ日に付着したものではないようだ。在地で焼いたものであろう。

1号溝状遺構 (図版15-1、第59図)

Ⅳ区の北東側を東西に走る溝状遺構で、西端で7・9号溝状遺構、北端で2・3号溝状遺構に接している。7・9号溝状遺構は1号溝状遺構と同様に石組を持ち、石組裏込めの幅が等しく、特に



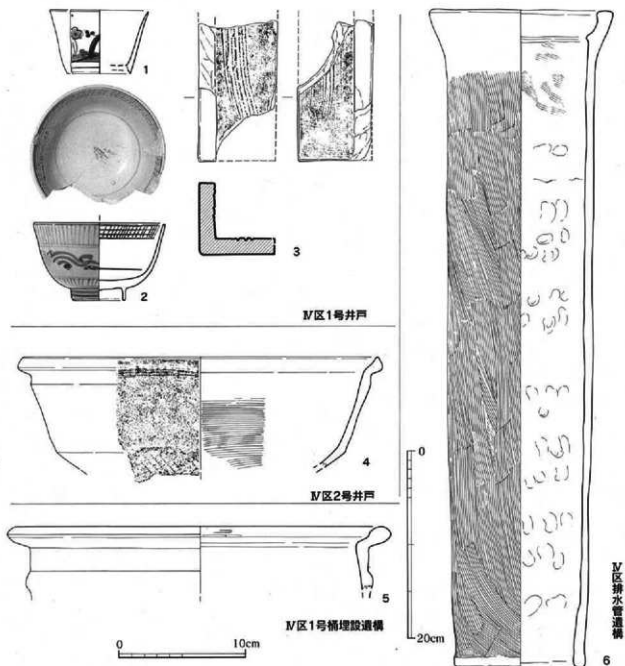
第57図 Ⅳ区1・2号埋甕遺構出土遺物実測図(1/3)

9号溝状遺構は裏込め部の掘り方が連続していることから、1号溝状遺構と一体となって機能していたものと考えられる。2・3号溝状遺構とは検出時の切り合いが不明瞭だが、土層から1号溝状遺構を切っているとわかる。

東にいくほど浅くなり途切れてしまうのは削平を受けたためだろう。石組裏込めは浅く、緩やかに傾斜しており、その中に3号土坑が掘り込まれている。石組部は人頭大の扁平な石を積んでいるが、大きさや面はあまり揃っていない。7号溝状遺構の裏込めに見られるような上面の礫敷きはなく、削平されている可能性が高い。残りのよい所で、幅2.6m、深さ50cmを測る。

出土遺物（図版31・32、第60図1～6）

土師質土器（1・2） 1は鉢で、内面は丁寧な磨き、外面は削り、口縁部はナデ。灰黄褐色か



第58図 IV区井戸・桶設置遺構・排水管遺構出土遺物実測図(6は1/4、他は1/3)

ら黒色を呈する。2は甕で、端部を外に折り返して肥厚させている。外面口縁部には板状の圧痕が残り、内面はナデ。内面から口唇部まで褐色に変色している。

瓦質土器(3) 3は火鉢の底部で、外面は削り、内面ナデ。暗黄茶褐色を呈し、全体に風化しており、混入品の可能性がある。

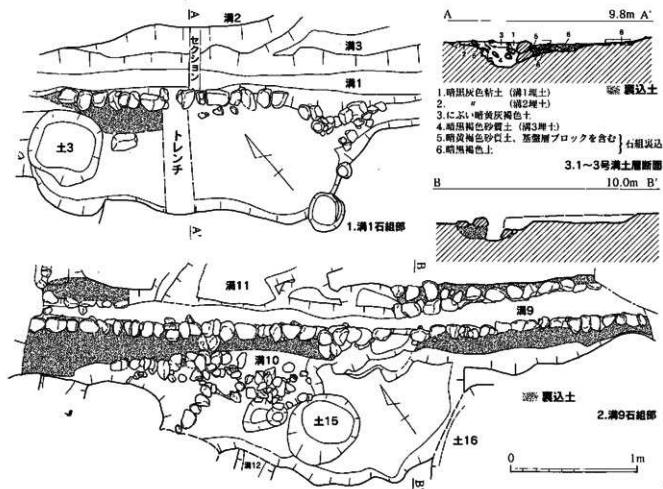
陶器(4) 小型甕で、胎軸が全面にかかるが、口唇部は拭き取り。外面肩部には乳白色の霰灰軸を流し掛け。胎は灰色で、上野・高取系。17c前半か。

染付(5) 碗で、薄い青灰色の呉須の草花文が入る。やや暗い透明軸がかかり、畳付は軸剥ぎ。胎は白灰色。

青磁(6) 中皿で、見込みは片切り彫り・線彫りによる葉文とその周囲に崩れた雷文帯を巡らせる。全面に鉄漿をかけた後、淡灰緑色の釉をかけ、外底部を蛇ノ目に釉剥ぎする。胎は白灰色。肥前青磁Ⅲ期(1630~1650年代)。

2号溝状遺構(図版15-1、第59図)

Ⅳ区の北東端を東西に走る溝状遺構で、西端で1号溝状遺構に、南端で3号溝状遺構に接している。1号溝状遺構との切り合いは土層から、切っていることがわかる。3号溝状遺構との切り合い関係は不明である。大きく削平されているようで残りが悪く、東側は痕跡しか残っていない。残りの良いところでも幅20cm、深さ10cm程しかない。

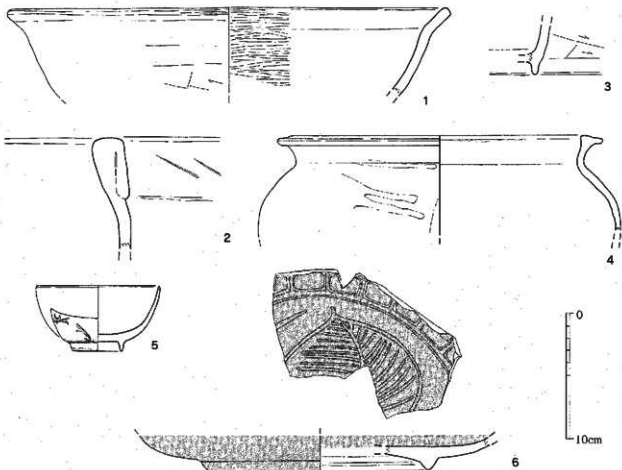


第59図 Ⅳ区1~3・9号溝状遺構石組部実測図・同土層断面図(1/30)

出土遺物（図版31～33、第61～63図・第64図1～8）

土師質土器（第61図1～7） 1・2はこね鉢で、1は外面ナデ、内面丁寧な磨き。外面は使用による変色のため灰褐色、内面は茶褐色を呈する。2は外面削り、内面光沢を持つ丁寧な磨きで、内外淡橙褐色を呈する。Ⅲ区2号溝状遺構出土片と接合した。1・2は高村焼系。3は壺で、内外丁寧なナデ。外面黄褐色、内面はややくすんだ黄褐色で、火入れとして使用された可能性がある。19c代。4は鉢で、口縁部に接合痕があり、口縁下はタタキの当て具痕がわずかに残るので、タタキ成形の後、口縁部を接合している。外面は器面が剥落しているため、調整不明。この剥落は口縁下から始まっており、土中に口縁のみ出して埋設したものであろう。内面も口縁下から剥落が見られるが、内外黄褐色で変色が認められないので、無色の液体を入れた可能性がある。5は焙烙で、内外ナデ、外面の口縁と体部の屈曲部の接合部は削って調整されているため、接合痕が残る。淡橙褐色だが、外面は所々煤が付着する。6はこね鉢の底部か。内面には丁寧な磨き、外面はナデ。外面は暗黒褐色、内面は橙色を呈する。高村焼系か。7は身の深い鉢の口縁部で、外面削り、口縁部はナデ、内面は器面が摩滅して調整不明。内面の摩滅は使用によるものであろう。内外くすんだ灰褐色を呈する。

瓦質土器（第61図8・9、第62図1・2） 第61図8は火鉢の口縁部で、スタンプでなく刺突による菊花文を施す。内外くすんだにぶい白灰色を呈する。第61図9は湯釜の肩部で、小片のため上下・傾きは不明瞭。文様は型押しで陽刻されており、内外黒色を呈する。第62図1・2は同一個体の方形の蓋で、双方とも天井部に縋り紐の圧痕が付くが、意図したものではない。内

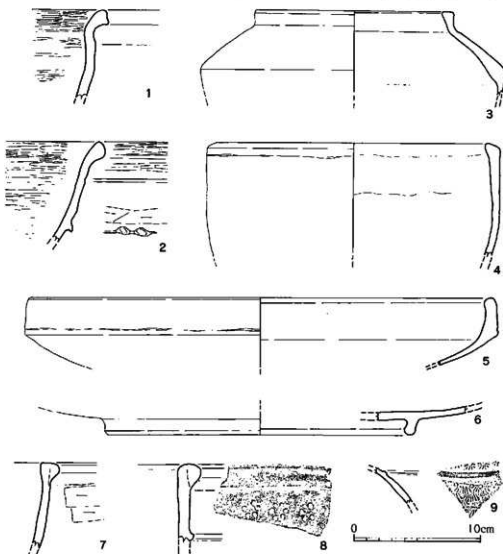


第60図 IV区1号溝状遺構出土遺物実測図(1/3)

外ナデで、口縁部とは櫛状掻き目を施した部分で接合している。内外灰黒色を呈する。

陶器 (第62図3～5) 3は小鉢で、内外面に緑灰色の灰釉をかけ、胎は黄灰色。底部は釉剥ぎで、回転ヘラ削り。上野・高取系。4は皿で、胎釉をかけ、見込みは蛇ノ目釉剥ぎ、高台部は霏胎で、胎は橙色。上野・高取系か。5は小型の甕で、Ⅳ区暗渠出上片と接合した。全体に鉄漿をかけた上に胎釉を外面と内面の上半にかけている。外面には焼成不良のため白化している部分がある。胎は黄白色。上野・高取系か。

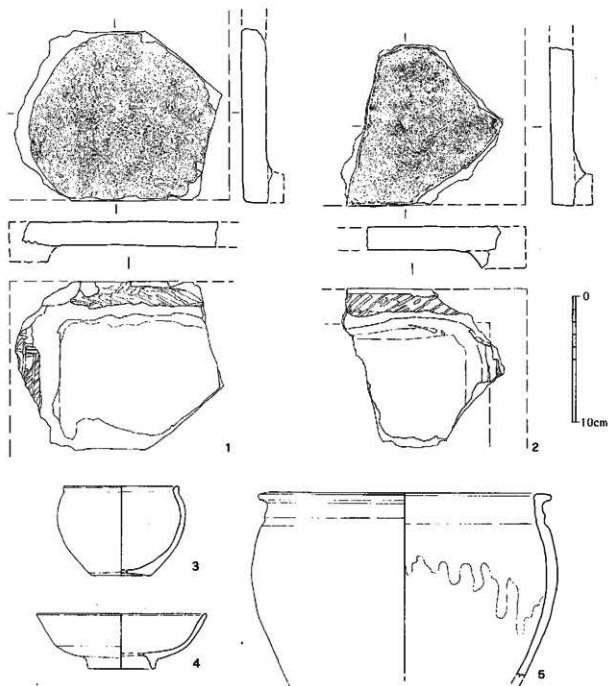
陶器槽鉢 (第63図1～5) 1は鉄漿釉を薄くかけ、胎は暗灰紫色。摺目は22本単位の細かい目のもので、端部はナデ消されている。上野・高取系Fタイプで19c代。2は鉄漿釉を薄くかけ、口縁部は薬灰釉がかかっているが自然釉の可能性もある。胎は赤褐色。摺目は11本単位で、外底部は板状正屈の一部と思われる段があり、砂目など重ね焼きの痕跡がないことから、敷き台で焼いたものだろう。唐津系dタイプで、17c後半～18c前半代。3は外面が削り、摺目は19本単位で、高台と底部の接合痕が明瞭に観察される。外面は高台まで鉄漿をかけ、外底部は釉剥ぎして、外面体部まで鉄漿釉を薄くかけている。胎は赤褐色。見込みには高台のつく位置に輪状の砂目が残っていることから、同一器種を重ね焼きしたことがわかる。4は胎・重ね焼き痕とも3と同様で、施釉方法も外底部まで鉄漿がかり、畳付だけが釉剥ぎである以外は同じである。摺



第61図 Ⅳ区2号溝状道構出土上器実測図(1/3)

目が19本単位で、ハマ底部と高台部の接合痕が明瞭。3・4は上野・高取系Fタイプで19c代。5は外面回転ヘラ削り、底部は釉剥ぎ後未調整。外面は鉄漿、内面は鉄釉がかかる。桴目は体部が10本単位で深い溝が入るが、見込みは8本単位で浅い。胎は茶褐色で、唐津系か。

染付(第64図1~5) 1は端反碗である。暗緑灰色の呉須で素描きされている。外面はよろけ縞文と縦縞の区画文が交互に充填されており、見込みに蛇ノ目釉剥ぎが入る。やや暗い透明釉がかかり、胎は白色。木原波佐見系V-4期(1820~1860年代)。2はくらわんか手の碗で、青灰緑色の呉須のコンニャク印判丸文が入る。透明釉がかかり胎は白。見込みは蛇ノ目釉剥ぎ。木原波佐見系V-4期(1820~1860年代)。3は広東碗で、外面に草葉文、見込みに素描きによる文様が入る。透明釉がかかり、全体に貫入あり。胎は白。畳付は釉剥ぎ。木原波佐見系



第62図 IV区2号溝状遺構出土瓦質土器・陶器実測図(1/3)

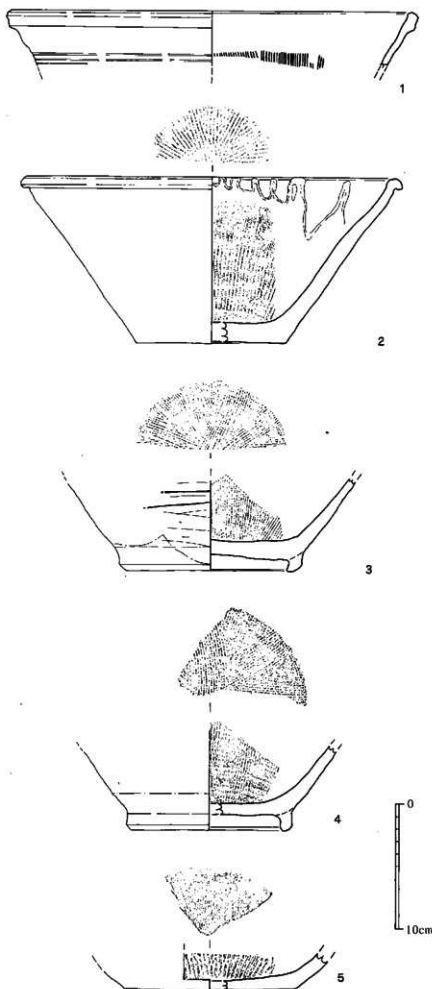
V-4期(1820~1860年代)。4は青紺の発色の呉須で、よろけ縞文と縦縞の区画文が交互に入る。見込みは削れた「寿」であろう。透明釉がかかり、胎は白。木原波佐見系V-4期(1820~1860年代)。5は青灰紺色の薄い呉須で素描による花草文瓦外面に入る。透明釉がかかり、胎は白。見込みにハマ目跡が見られることから、肥前系V期の1850~1860年代。白磁(第64図6~8)

6は紅皿で、高台部分は露胎。透明釉がかかり、胎は白色。7・8は白磁の型打ちの菊花形皿である。胎は白色で、青みがかかった白色釉がかかる。7は小型品で、登付は釉剥ぎ。8は外底部が蛇ノ目形高台で高台外周に蛇ノ目に釉剥ぎがある。見込みにハマ目跡があり、復元径と目跡の間隔から4箇所つくものと思われる。両者とも肥前V期の1780~1860年代のものであろう。

3号溝状遺構

(図版15-1、第59図)

Ⅳ区の北東端を東西に



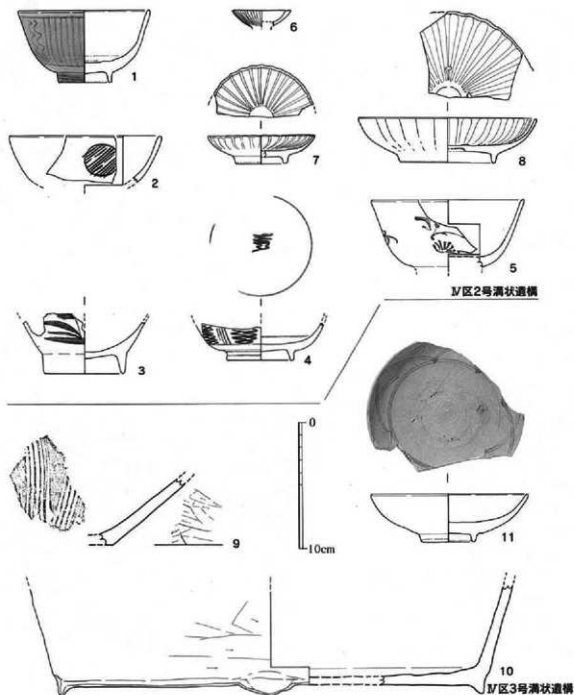
第63図 Ⅳ区2号溝状遺構出土陶器損鉢実測図(1/3)

走る溝状遺構で、西端で2号溝状遺構に接している。1号溝状遺構との切り合いは土層から、3号溝状遺構が切っていることがわかるが、2号溝状遺構との切り合い関係は不明瞭で、遺構からの判断は難しい。

大きく削平されているようで残りが悪いが、東側は調査区壁に達する。残りの良いところでも幅120cm、深さ30cm程しかない。

出土遺物（図版31・33、第64図9～11）

9は土師質の播鉢で、外面は削り、内面には5本単位の播目が入る。外面灰褐色でやや風化している。内面は灰黄色で変色がない。10は土師質の火鉢の底部で、小さな板状の脚外面削り、



第64図 IV区2・3号溝状遺構出土物実測図(1/3)

内面ナデ。11はくらわんか手の染付の皿で、二重斜格子文が淡灰青色の薄い呉須で描かれている。見込みは蛇ノ目釉割ぎ。透明釉がかり、胎は白。豊付は軸割ぎで、やや貫入あり。木原波佐見系V-2・3期（1750～1810年代）。

4号溝状遺構（図版15-1、第3図）

Ⅳ区の中央南端を南北に走る溝状遺構で、排水管遺構を切り、南端が調査区外にかかっている。北にいくほど削平のため浅くなり、北端はなくなっているだけで、本来はまだ北に伸びていた。幅は50cm、深さは10cm程度しかない。隣接する排水管遺構が大きく削平されていることを考えると、底部付近のみ検出された可能性が高い。出土遺物は少なく、土師質土器片のほか、銅緑釉の皿片などが出土している。

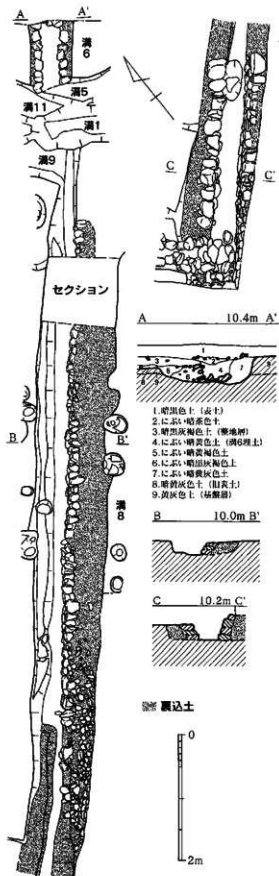
5号溝状遺構（図版15-1、第3図）

Ⅳ区の中央北端を東西に走る溝状遺構で、西端で6号溝状遺構を切り、11号溝状遺構に接し、南端で1号溝状遺構に接している。1・11号溝状遺構との切り合い関係は不明瞭であるが、切られている可能性が高い。幅は40cm、深さは10cm程度しかない。小片のため図化していないが染付片などが出土している。

6号溝状遺構（図版15-1、第65図）

Ⅳ区の中央北端を南北に走る石組溝状遺構で、南端で1・5・11号溝状遺構に接しており、石がなくなっていることから、切られているといえる。人頭大の石を1段ないし2段並べており、溝幅は30cmで、裏込めまで入れると65cmになる。

南側の7号溝状遺構の延長上に存在するがややずれており、積み石も6号溝状遺構のほうがやや大きめのものを使っていることから、同一遺構ではないと考えたい。



第65図 Ⅳ区6・7号溝状遺構石組部実測図(1/60)

出土遺物 (図版33、第66図1)

1は染付の方形小鉢で、文花が各面に入る。呉須は発色がよく濃紺色。青みがかつたやや暗い透明釉で、胎は白色。底部の高台と高台内外が釉刺ぎで、口縁部に釉刺ぎが見られることから、重ね焼きしたことがわかる。このほか、コバルトを使用したと思われる発色の染付片がある。

7号溝状遺構 (図版19-2・3、第65図)

Ⅳ区の中央を南北に走る溝状遺構で、北端で1・9号溝状遺構、南端で暗渠遺構に接している。7号溝状遺構との接点は溝状遺構の中に暗渠が入り込んで石垣に接しているので、これも共存していた可能性が高い。

南部ほど残りがよく、本来石組溝であったことがわかる。東側の石組は裏込土の上に小礫を敷き、その上に人頭大の扁平な石を積んでいる。西側は石敷きがなく、東壁のように高く石を積んでいなかったと考えられる。北に行くほど残りが悪いので、北側は裏込土が残るのみである。そのプランは北側で東に湾曲し、1号溝状遺構の裏込めとつながっている。また、6号溝状遺構は延長上に存在する石組溝だが軸がややずれており、石もやや大きめのものを使っていることから、同一遺構ではない。したがって、7号溝状遺構と1号溝状遺構は同時併存の遺構で、7号溝状遺構の東側と1号溝状遺構の南側に石垣を設けていたと考えられる。この石垣部分の調査区壁には礫を混じる裏込土が見られ、盛り土していたことが伺える。

土層から、溝状遺構は整地層から掘り込まれており、深いところで20cm程ある。

出土遺物 (図版33・38、第66図2～7・第83図3)

2～5は土師質土器である。2は焙烙で、調整は内外ナデ。外面は煤付で、内面は黄橙褐色を呈し、変色が見られる。3～5は鉢で、3は内外ナデ。内外淡茶褐色を呈する。4は外面ナデ、内面ハケ。内外灰黄色を呈する。18c後半。5は外面ナデ、内面に丁寧な磨きが入る。外面は摩滅しており、煤付で変色している。内面は黄橙褐色。

6は中国製白磁碗で、内面に乳白色の釉がかかり、胎は灰白。外面は露胎。横田・森田分類のⅧ-2分類で12c代。混入品であろう。7は染付の丸形碗で、小片のため文様は判然としなが、雪文の上に草花文がある。呉須は濃紺で発色がよい。透明釉がかかり、胎は白色。高台に削れた「大明年製」の裏銘が入る。

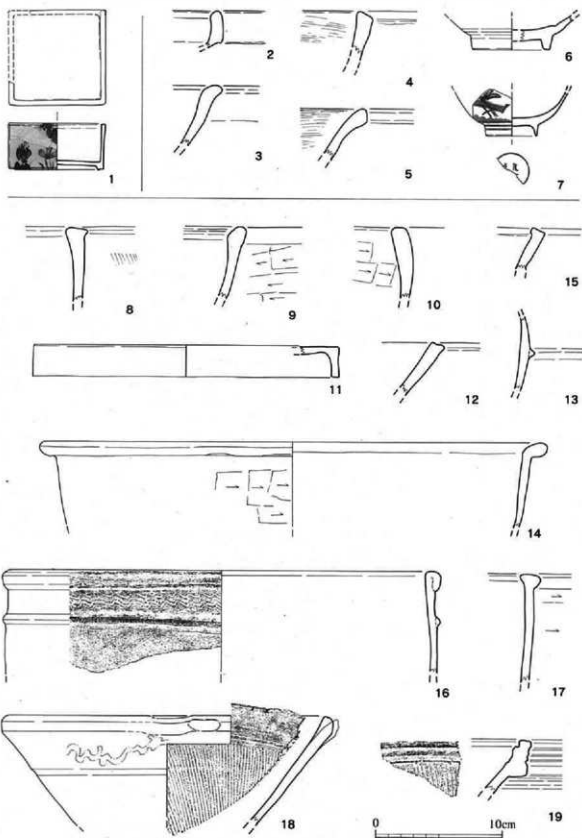
第83図3は石臼の下臼で、よく使い込まれており擦り面はやや窪む。擦り目も摩滅しているため分割単位もはっきりしないが、1区画は6本以上の溝があるようだ。上面はやや赤味を帯びているので、火を受けた可能性がある。石材は多孔質の軟質凝灰岩で、角閃石を多く含む。

9号溝状遺構 (図版15-1、第3図)

Ⅳ区の北側を東西に走る溝状遺構で、北端で11号溝状遺構、南端で12号溝状遺構に接している。11号溝状遺構との切り合いは不鮮明で、接点では双方とも石組が失われている。しかしながら9号溝状遺構の南側石組は残っているので、9号溝状遺構が新しいと考えたい。11号溝状遺構との接点では、9号溝状遺構の裏込め礫が残っているので、明らかである。この礫群は本来

15号土坑周辺に敷かれていたものであろう。

溝の掘り方は広いところで3.25mもあるが、南側の広い部分に碑を敷いたような広い裏込めを



第66図 IV区6・7・9号溝状遺構出土物実測図(1/3)

設け、そこに15号土坑を設置している。西側は裏込めの掘り方間にも石組があり、当初、2つの石組の間を溝状遺構と考えたが、掘り方側の石組が15号土坑付近でなくなることから、溝状遺構ではなく裏込めの一部と考えた。

したがって、石組によって形成される溝状遺構の幅は30~40cmで、深さは50cm程である。石組は人頭大の扁平な川原石を3~4段積み上げたもので、比較的整然と並んでいる。

出土遺物（図版31・33・37・38、第66図8~19、第67図1~10、第83図2、第84図1）

土師質土器（第66図8~14） 8は外面ハケをナデ消し。内面ナデ。9は外面体部削り、外面口縁部から内面はナデ。黒灰色で変色あり。内面の摩滅と剥離は使用のためか。10は内外器面が摩滅しており、調整不明瞭だが内面は削りか。内外暗黄茶褐色。11は蓋で、天井部未調整、それ以外はナデ。黄白色を呈し、変色なし。19c代だろう。12は内外ナデ。外面暗黒灰褐色、内面は灰黄色を呈する。外面は焼成時の変色か。13は湯釜の胴部片か。断面三角形の突帯が貼付付けられている。突帯以下は摩滅している。突帯以上と内面はナデ。外面は煤付のためか灰色、内面は灰黄褐色を呈する。14は外面体部削り、外面口縁部から内面はナデ。内外灰黄茶褐色。

瓦質土器（第66図15~17） 15は防長産足竈の口縁部と思われる。内外ナデで、色調は内外灰黒色。混入品であろう。16は火鉢で、口縁端部を外に折り曲げ肥厚させている。貼付突帯との間には櫛歯波状文が入る。内外暗黒灰色。17は軟質な瓦質土器で、外面削り、口縁部ナデ。内面体部は使用のためか摩滅している。外面口灰色、内面黄灰色を呈する。

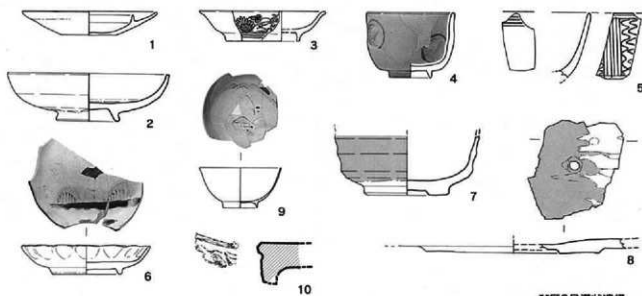
陶器指鉢（第66図18・19） 18は片口部の端に押えの痕跡がある。内外暗褐色の鉄釉を薄くかけており、外面口縁下はその上に黄灰色の藻灰釉を流しかけている。描目は13本単位で、Ⅲ区3号溝状遺構と同一個体の可能性あり。胎は淡黄灰色。上野・高取Eタイプで18c後半~19c代。19は備前焼の口縁部で、小片のため描目の単位は不明。無釉で、胎は茶褐色。

陶器（第67図1・2） 1は灯明受け皿で、暗灰白色の灰釉を内面と外面口縁部にかけて、貫入を意匠している。胎は灰白色。関西系か。2は陶器皿で、外面体部と内面に暗黒褐色の鉄釉をかけ、高台部は露胎。見込みは蛇ノ目釉刺ぎで、高台内は回転へう削り。

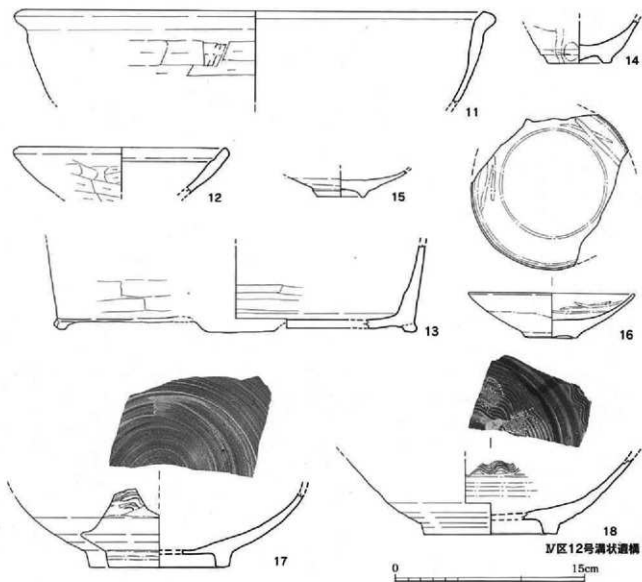
染付（第67図3~6） 3は透明釉がかかり、胎は白。畳付は釉刺ぎ。外面には青色紺の呉須で牡丹唐草文が描かれている。16c前半の中国明代のもの。4は染付の杯で、外面にコンニャク印判のススキ文を充填した丸文が入る。青みがかった透明釉に灰白色の胎。畳付は釉刺ぎ。木原波佐見系V-4期（1820~1860年代）。5は丸碗で、呉須は暗青灰色。外面に縦縞の区画文とよろけ縞文が素描きされる。暗い透明釉がかかり、胎は灰白色。肥前系V期の1810~1860年代。6は型打ちの輪花形皿である。口禿で、畳付は釉刺ぎ。見込みに濃緑灰紺色の呉須で山水文が描かれており、透明釉は発色が悪く、灰白色を呈する。胎は白。

青磁（第67図7・8） 7は香炉か火入れで、銅緑釉が外面体部にかかり、外面高台部は露胎。内面は淡白褐色の釉を薄くかけている。胎は白。底部は回転へう削り。焼野焼の17c末から18c前半のもの。8は皿で、濃緑色の釉が内外にかかり、畳付は釉刺ぎで、茶褐色を呈する。見込みに濃緑色の釉が重ねて流しかけられている。胎は暗黒灰色。

色絵（第67図9） 小杯で、透明釉の発色が悪く灰白色をなす。胎は白。畳付から高台内面は



N区9号满状遗物



N区12号满状遗物

第67图 N区9·12号满状遗物出土物实测图(1/3)

露胎。器壁が非常に薄い。日の出の風景が素描され、部分的に着色されている。

軒平瓦 (第67図10) 凹面灰色、凸面黒灰色を呈する。

石臼 (第83図2・第84図1) 第83図2は小型で、断面蒲鉾形の形状から茶臼の可能性がある上臼である。皿受の縁は明瞭ではないが、意識して段を作っている。擦り目の単位は不明だが、6分割と推定される。石材は多孔質の軟質凝灰岩で、角閃石が目立つ。また、煤が部分的に付くが赤変は見られない。1.25kgを測る。第84図1は面がよく使われているにもかかわらず、擦り目は太く、よく残っている。擦り目の単位はわからず、8分割であろう。石材は多孔質の軟質凝灰岩で、一部に煤が付着している。2.00kgを測る。

10号溝状遺構 (図版15-1、第3図)

9号溝状遺構の裏込め部分に石組列が残っており、埋土の差異は明確でなかったが、これを溝と判断した。9号溝状遺構の裏込めにしては、東側まで同じ幅で存在していないので、9号溝状遺構の石組みを作る際に埋め戻されたものと思われる。Ⅲ区の1号溝状遺構につながる可能性がある。出土遺物は9号溝状遺構の裏込めが充填されているため、厳密に本溝に伴うといえるものはない。

11号溝状遺構 (図版15-1、第3図)

Ⅳ区の北側を湾曲しながら東西に走る溝状遺構で、西端で9号溝状遺構に接し、東端で6号溝状遺構を切り、1・5号溝状遺構に接する。9号溝状遺構との切り合い関係は不明瞭だが、切られていると考えられる。1・5号溝状遺構との切り合い関係も不明瞭だが、5号溝状遺構を切り、1号溝状遺構に切られると思われる。溝中央がもっとも残りがよく、わずかながら石組が残っており、本来石組溝であったことをうかがうことができる。石組は北壁の礫は小さいが、南壁は人头大の川原石があり、いずれも1段分しか残っていない。裏込め部分の幅は狭く、掘り方幅は約120cm、石組の内法は約30cmである。深さは20cm程しかない。土師質土器片が3点のみ出土している。いずれも図化できない。

12号溝状遺構 (図版15-1、第3図)

Ⅳ区の西を南北に走る溝状遺構で、北端で9号溝状遺構に、南端で暗渠遺構に、中位で1号桶埋設遺構切られている。南ほど残りが良いが、底面は北に向かっている。北側が削平を受けているにもかかわらず、幅がほぼ65cm前後で一定している。深さは30cm程度である。埋土は暗黒色土で礫を多く含む。

出土遺物 (図版31・33、第67図11～18)

土師質土器 (11) 11は鉢である。外面体部が削り、口縁部から内面はナデ。内面は剥落が著しいが、使用のためか、内外灰白色。

瓦質土器 (12・13) 12は小型鉢で、外面体部が削り、口縁部から内面はナデ。外面灰黄褐色、内面は暗灰色。13は瓦質の火鉢の底部で、小さな方形の脚がつく。内外板状工具によるナデが



入る。底部は削り。暗灰色から黒灰色を呈する。

陶器 (14~18) 14は碗で、緑灰色の薬灰釉を内外にかけ、体部下半から露胎。髹付に砂目跡がわずかに残る。半磁器といえる堅緻な胎で暗黄灰色。15は小皿で、暗緑灰色の薬灰釉が内面にかかる。外面は露胎。髹付は砂目跡らしいものが附着し、見込みにも蛇ノ目釉剥ぎの中に、高台と同じ径の砂目跡が残るので、同一器種を重ね焼きしたとわかる。胎は灰色。上野・高取系か。

16は小皿で、緑灰色から灰白色の灰釉が内面と外面上半に薄くかかり、内面は乳白色で文様がイッチン掛けされている。胎は黄灰褐色。高台にわずかに砂目が見込みに高台と同じ径の蛇ノ目の砂目跡があることから、同一器種を重ね焼きしたとわかる。高取系。17・18は鉢である。17は鉄分の多い胎土の上に外面下位には鉄釉をかけ、中位には白化粧の波状刷毛目、内面には渦刷毛目を施す。外面高台部分は無釉。胎はにぶい暗橙灰色。18は内面に白化粧の波状刷毛目、その上に外面の中位と内面の体部には緑灰色の薬灰釉をかけている。胎はにぶい暗橙灰色。17・18とも高台の形態から唐津Ⅳ期 (1690~1750年代) の前半であろう。

13号溝状遺構 (図版15-1、第3図)

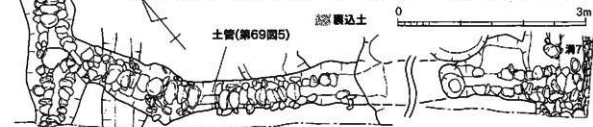
Ⅳ区の中央を南北に走る溝状遺構で、北端で1号溝状遺構に切られ、南端で調査区壁にかかっている。1号溝状遺構との切り合いは、1号溝状遺構の裏込め土を13号溝状遺構が切っていないから明らかである。

北側ほど幅が広く、深くなっており、他の遺構が北側ほど大きく削平されていることから考えて、北に深く掘られた溝状遺構であるといえる。残りの良いところで、幅1.25m、深さ30cm程である。出土遺物に図化できるものはない。

暗渠遺構 (図版15-1、第68図)

Ⅳ区の西側を南北に走るものと、南西隅で東西方向に走るものとに分かれる。12号土坑・12号溝状遺構を切って、9号溝状遺構に切られている。南西部が最も残りがよく、蓋石がのっている範囲が多い。北側ほど残りが悪く、東西方向は中央部で削平を受けており、南東隅で7号溝状遺構に接する。幅70cmほどの溝の掘り方の両端に人頭大の礫を1段あるいは2段重ねて高さを合わせながら並べ、幅10cmほどの溝状遺構をつくり、その両側石の中央にかかるように蓋石をのせている。2方向の暗渠は交差する場所がやや乱れているものの併存していたものと思われる。また、7号溝状遺構との接点は溝状遺構の中に暗渠が入り込んで石垣に接しているので、これも共存していた可能性が高い。

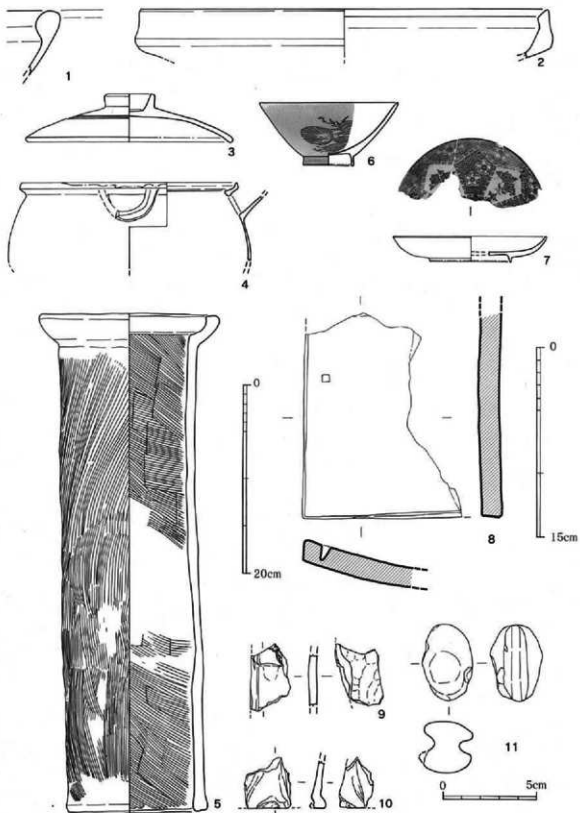
なお、東西方向の暗渠内に陶器の土管が埋設されていたが部分的なもので、かつは



かの部分には破片さえ見つからなかったで、なんらかの理由でここだけ土管を入れる必要があったのだろう。裏込土内からは瓦片が出土している。

出土遺物（図版31・33・36、第69図1～11）

土師質土器（1・2） 1は焙烙で、外面は摩滅しており調整不明。内面はナデ。外面の変色は



第69図 IV区暗渠遺構出土遺物実測図(5は1/4、11は1/2、他は1/3)

焼成時のものか。内面は灰黄橙色。高村焼系。2は土師質の焙烙で、内面と外面口縁部はナデ。外面口縁下は未調整。外面は煤付。内面は橙色。

陶器(3~5) 3は京焼き風の行平鍋の蓋で、黄灰色の灰釉を全面にかけ、つまみの上端は釉剥ぎ、内面の天井部分は露胎。胎は黄灰色。4は行平鍋で、黄灰色の灰釉を全面にかけ、内面受け部は釉剥ぎ。5は土管で、鉄槌を内外全面にかけたのち、外面に鉄釉を薄くかけている。胎は赤橙色で、受け部に自然釉、下端部に砂目が付く。接合する際の漆喰は付着しておらず、転用でなく1点のみの使用であったと考えられる。内面には排水の吸着が見られる。上野・高取系か。

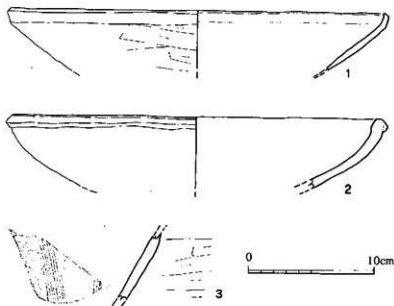
染付(6・7) 6は口縁が直線的に開く碗で、銅版転写による濃紺色の呉須で描かれた野菜や魚が外面に見られる。透明釉で胎は白。骨付は釉剥ぎ。明治の肥前系。7は染付小皿で、見込みに型紙刷の幾何学的な構成の中に花文が入る。呉須は見込みが濃青紺で、いわゆるペロ藍。口縁部は発色悪く暗紺色になっている。やや暗い透明釉で、胎は白。骨付は釉剥ぎ。明治の肥前系。平瓦(8) 凹面の一部に方形の穿孔があるが、貫通していない。灰黒色で銀化しておらず、凸面の風化も見られない。

土人形(9・10) 土師質で、同一個体と思われるが接合しない。型作りらしく、内面には押さえが見られる。外面灰白色、内面淡暗灰色を呈する。軟質で精良な胎土。

土罐(11) 滑車形で、橙褐色を呈する。24.6gを測る。

3号溝状遺構南側整地層出土遺物(第70図1~3)

1~3は土師質鉢である。1は外面削り、内面ナデ。外面暗黒茶色、内面黒色を呈する。2は全面器表が剥落したため、器壁が薄くなったもの。色調も本来のものでなく、胎の淡黄白色を呈する。3は外面削り、内面ナデ。7本単位の日割が入る。外面白黄褐色、内面暗黄褐色を呈する。

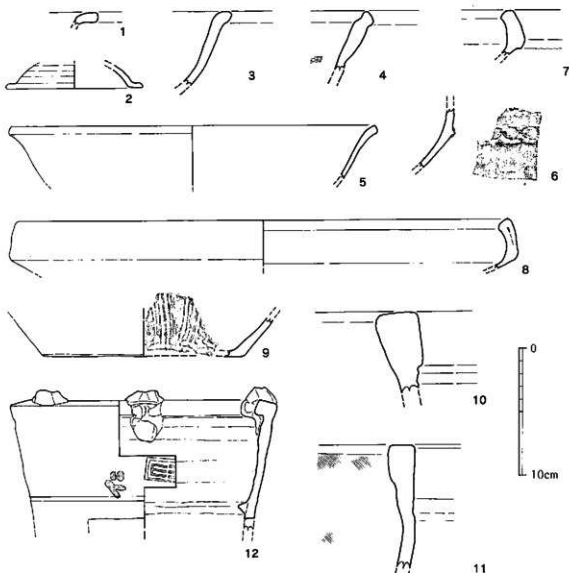


第70図 IV×3号溝状遺構南側整地層出土土器実測図(1/3)

5) その他の遺物

ピット出土の遺物(図版34・1・35・38、第71図~第74図、第78図10・第78図15、第84図2)

土師質土器 (第71図1~12) 1はビット49出土の外反する鉢の口縁部であろう。内外橙色を呈する。2はビット100出土の蓋で、白色の精良な胎土に天井部に橙色のスリップをかけている。3はビット42出土の鉢で、全面風化のため器面剥落。外面淡橙色、内面黄灰色を呈する。4はビット100出土の鉢で、全面風化している。内面の一部にハケが見られるが、それ以外はナデ。外面は黄灰色。内面は黄橙色を呈する。5は器壁の薄い鉢で、器面は摩滅している。外面は橙白色で、内面はぶく変色しており、使用のためと思われる。6はビット49出土のこね鉢の体部で、刻目突帯がつく。外面は黄橙色、内面にぶい灰褐色に変色しており、使用のためと思われる。高村焼系。7・8は焙烙で、ビット100出土。内外ナデ。体部は未調整。外面は煤付、内面は黄灰色から黄橙色。9はビット42出土の鉢の底部で、5本単位の挿目が入る。内外面やや摩滅している。内外暗黄褐色を呈する。10はビット6出土の大甕で、口唇部が摩滅していることから上面は風雨にさらされていたのではないだろうか。内面は淡黄白色を呈する。11は小型の甕で、外面ナデ、内面口縁端部は削り。それ以下はハケとナデ。内面は淡黄白色を呈する。12はビット100出土の焜炉で、口縁部上面に五徳が4箇所貼り付けられている。外面には方形の風口が開



第71図 ビット出土土師質土器実測図(1/3)

いており、その上に方形の中に「山」の字横にして向かい合わせてデザイン化したスタンプが入っている。北九州市京町遺跡では「山」の字のスタンプがある。その横には墨書の文字らしいものがある。内外黄灰白色。

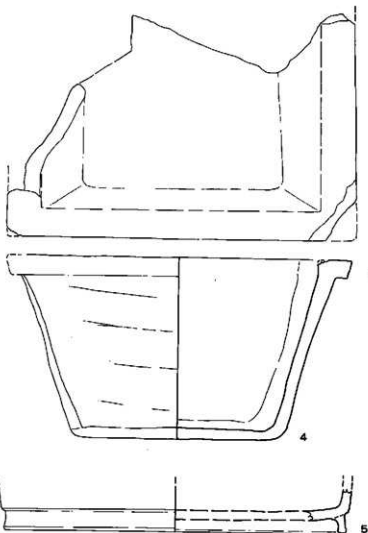
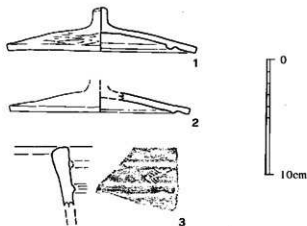
瓦質土器（第72図1～5）

土師質の湯釜の蓋で、1はビット29、2はビット14出土。

1は外面削り、内面はナデ。受け部は貼付け。2は内外ナデで、受け部は二本の指による凹線により中央部分を突出させている。1・2とも煤が付着する。17c前半代か。3

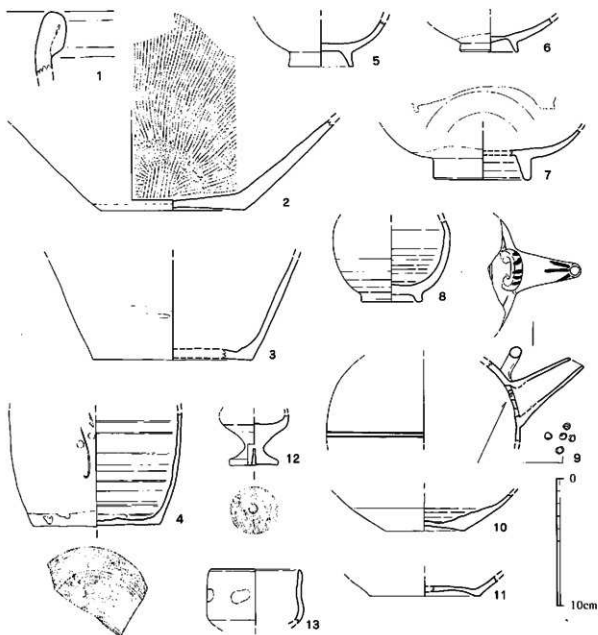
はビット7出土の火鉢で、1区円形土坑出土品と同一個体。外面摩滅、内面ナデ。4は方形鉢で、内外ナデで仕上げている。胎土に金雲母を多く含む。炬燵として使用した火鉢か。5は土師質の火鉢の底部で、内外にふい淡黄灰色で、火を受けた痕跡が無い。

陶器（第73図1～13） 1はビット1出土の備前焼の壺で、口縁下に自然釉がかかる。外面暗赤褐色、内面赤褐色を呈す。備前焼IV期で16c代。2はビット102出土の播鉢で、内外暗茶褐色の鉄釉をかけ、底部は釉剥ぎで、砂目がつく。見込みにも底部の位置に蛇ノ目に砂目が残る。胎は暗黄灰色。播日は6本単位。3はビット41出土の小甕か壺の底部で、外面に鉄釉が薄くかかり、内面は無釉で、にふい黄灰色を呈し、変色は認められない。



第72図 ビット出土瓦質土器実測図(1/3)

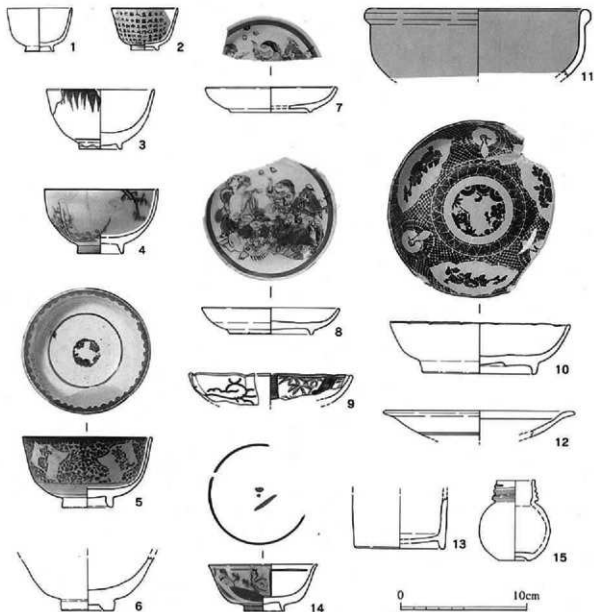
底部は未調整。胎にはぶい黄灰色で混人物多い。4はビット100出土の徳利で、外面体部下位まで茶褐色の胎釉をかけた後、外面にイチチン掛けで文様が描かれている。体部下端から底部は露胎で、底部は糸切り。胎は灰褐色。5はビット40出土の碗で、黄灰色の灰釉が全面にかかり貫入がわずかに見られる。髹付は軸刺ぎで、胎は灰白色。6はビット10出土の半磁器の皿で、灰白緑色の灰釉がかかり、高台部は無釉で、見込みに日跡が3ヶ所残る。胎は灰色。上野・高取系か。7はビット102出土の皿で、鉄分の多い胎土の上に内外鉄釉をかけ、外面高台部分は無釉。見込みは蛇ノ目に掻き取り、その周周に白化粧の刷毛目をかけている。唐津陶器Ⅴ期（1750～1800年代）。8はビット102出土の小壺で、内外暗茶褐色の胎釉で、髹付は軸刺ぎ。胎は黄灰色。9～11は上瓶である。外面に灰白色、内面に緑黄灰色の灰釉をかけ、外面には黒色で線描きし、緑色で色付けしている。関西系の19c代。9はビット19、10はビット101、11はビット103出土で、10・11は底部糸切り。12はビット11出土の灯明受皿で胎釉が内面と外面体部下位



第73図 ビット出土陶器実測図(1/3)

にかかり、体部下端は露胎。底部は糸切り。胎は灰白色。見込みにひょうそく立ての根元が残っており、外底部には穿孔がある。13はビット100出土の半磁器ともいえる陶器の小碗で、暗緑灰色の釉を全面にかけ、胎は暗灰色。19c代の萩焼か。

染付杯・碗（第74図2～6） 2は小杯で、濃青灰色の呉須で、透明釉がかかり、胎は白色。畳付は軸刺ぎ。赤壁賦の漢詩を意匠したもので、中国製品を模した肥前陶磁だろう。3・4はビット1出土の口縁が反り気味の丸形碗である。3は暗青灰色～紺色の雨降文を外門口縁部に描く。透明釉がかかり、胎は白色。畳付は軸刺ぎ。肥前V期の1780～1810年代。4は梅を描いたもので、枝部分は呉須。花部分は銀色のスタンプだろう。呉須は濃青色で型紙刷らしくにじみがある。透明釉がかかり、胎は白色。畳付は軸刺ぎ。5はビット101出土の端反碗で、ほぼ完形。呉須は濃紺色で、やや暗い透明釉をかけ、胎は灰白色。畳付は露胎。見込みにハマ目跡が5ヶ所残る。文様は型紙刷で、外面は「帝国」「萬歳」の旗の周りに花びらを充填させている。同じ型紙を3枚連続して続けているため、重なる部分がある。内面は口縁部に環珞文、見込み松竹梅文が入る。



第74図 ビット出土磁器・ガラス瓶実測図(1/3)

日清戦争か日露戦争の戦勝記念に製作されたもので、多色刷絵皿は大正期に多いことから1900～1910年代の肥前系だろう。6はビット102出土の陶胎染付だが、底部片のため文様が見られない。やや暗い暗灰色の透明釉にわずかに貫入が入り、畳付には砂目が付着する。胎は灰白色。

赤絵（第74図7・8） 7・8はビット100出土の皿で、量産された同じ皿である。見込みに七福神を描いたもので、赤濁の太い界線を施した上に緑色で銅版刷りの輪郭線を描き、その中に黄・青・緑・赤・紫・黒・橙色で色付けしている。透明釉で、胎は白。畳付は釉剥ぎ。大正の肥前系。

染付皿（第74図9・10） 9はビット100出土で、外面に唐草文、内面に笹文が濃紫の呉須で素描きされている。透明釉で胎は白。10はビット100出土で、高台は蛇ノ目門形高台。畳付から外底は蛇ノ目に釉剥ぎ。濃紺の呉須で、透明釉がかかり、胎は白色。見込みは全面に型紙刷の鶴・菊が入る。外面は唐草文。ハマ目跡が5ヶ所ある。肥前V期以降。

青磁鉢（第74図11） ビット8出土の片口鉢。灰緑色の灰釉が全面にかかる。胎は灰色。

白磁（第74図1・12・13） 1はビット100出土の小杯で、畳付は釉剥ぎ。12はビット39出土の皿で、暗乳白色の釉で、胎は灰白色。中国製白磁皿Ⅲ-2類。12c代。13はビット4出土の徳利底部で、外面は緑乳白色の釉、内面は無釉、畳付は釉剥ぎ。胎は白色。

赤絵鉢（第74図14） 14はビット100出土の小鉢で、素描きの赤濁の葉文の上に青・緑色釉を塗り、その上に黒褐色の花草文を書いて、赤濁の葉文の隙間部分だけ斑状に残して掻き取っている。見込みには赤濁で、「シ」の字を入れている。透明釉を掻け、畳付から高台内面まで釉剥ぎ。胎は白色。肥前色絵と思われるが、時期不明。

ガラス瓶（第74図15） ビット100出土の白ガラスで、気泡などは観察できない。化粧瓶か。

銅銭（第78図12） ビット18出土の北宋銭の熙寧元宝（1008年初鋳）で摩滅している。

石臼（第84図2） ビット21出土の下臼で、軸受け穴は面を持つことから、方形であったかもしれない。擦目はよく残っており、使用のため摩滅している部分がある。軟質の凝灰岩で多孔質だが、やや密度が高い。変色はあるがわずかで、本来の暗灰色を残す。1.67kgを測る。

不明鉄製品（第78図10） プリキ板を折り返して断面蒲鉾形の容器をなす。

遺構検出面の出土遺物（図版34・38、第75図1～7、第78図4）

土師質土器（第75図1～4） 鉢である。1はⅡ区5号溝状遺構西方出土で、外面体部は削り、口縁部から内面はナデ。内外やや摩滅しており、色調は黄橙色を呈する。2はⅠ区出土で口縁がく字を呈する鉢である。外面体部が削りで、口縁部から内面はナデ。内面は使用のためか摩滅しており、外面は煤が付着している。3・4はⅡ区5号溝状遺構西方出土の櫛壁の薄鉢で、外面体部が削り、口縁部から内面はナデ。外面は煤が付着し、内面にも変色が見られる。

瓦質土器（第75図5） 円形土坑東出土の鉢で、外面体部が削りで、口縁部から内面はナデ。外面は黒灰色、内面は青灰色で、色調が口唇部で明瞭に分かれるので外蓋であろう。

瓦器碗（第75図6） Ⅱ区5号溝状遺構西方出土で、内外器面が摩滅しており、調整不明。

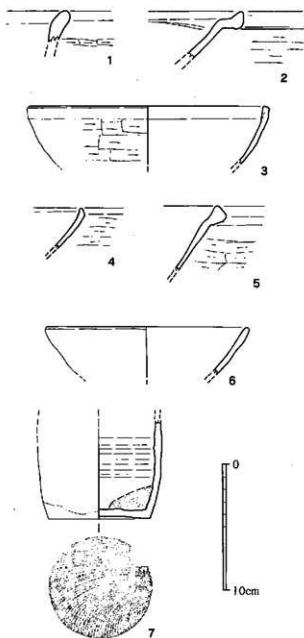
陶器（第75図7） 徳利。内外に鉄漿をかけた後、外面に鉄釉をかけ、外底部は釉剥ぎで糸切り。胎は灰褐色。内底には鉄塊が付着していたので、お歯黒壺とわかる。幕末から明治のもの。

不明鉄製品（第78図4） 断面長方形の棒状鉄製品。

出土地不明・攪乱出土遺物

（図版34、第76図1～6）

1は攪乱出土の土師質の型抜きで、小片のため何の型かはわからない。内面は外しやすいように何らかの成分を塗布しているらしく光沢をもつ。外面は橙色。2は出土地不明の土師質の火鉢で菊花文のスタンプが施される。器壁は薄いが大型品。内外黒灰色。15c代か。3は攪乱出土の陶器の小型播鉢で、全面に鉄釉を厚くかけ、底部は釉剥ぎで、糸切り。胎は赤橙色。播目は15本単位。小型のため不明瞭だが、上野・高取系Eタイプで19c代だろう。4は攪乱出土で、土師質の大型器台か。数個体分出土している。内外ナデで、接地部分は摩滅や剥落が見られる。内外橙色で変色が見られない直接火にかけるのではなく、燈炉などを中に置いて熱効率を高めるものか。5は出土地不明の集付碗で、濃青灰色の雪輪草花文を施す。やや暗い透明釉をかけ、畳付は釉剥ぎ。胎は白。木原波佐見系V-1期（1680～1740年代）。6は出土地不明のガラス瓶でほぼ完形。目薬の容器であろうか。気泡多い。底部の變形文は陽刻。



第75図 遺構検出面出土遺物実測図(1/3)

弥生時代から古代の出土遺物（図版36-1、第77図1～22）

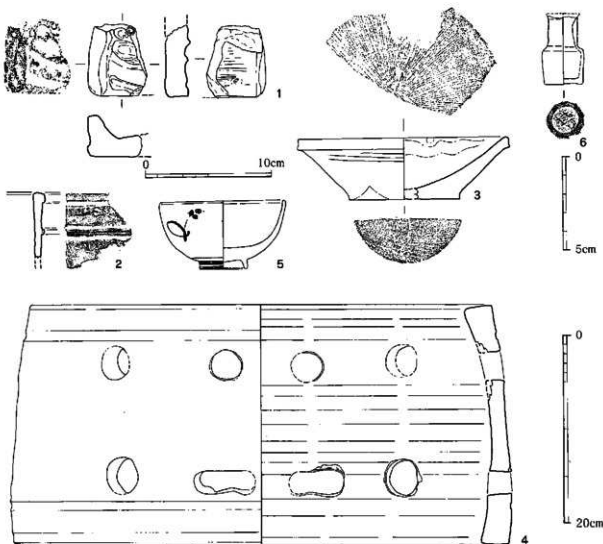
弥生土器（1～4） 1・2はⅣ区8号溝状遺構から出土した弥生時代後期の甕で、1は復元径と傾きから、口縁部に最大径をもつ小型品と考えられる。色調は内外黄橙色を呈する。2は目の細かいハケ調整で、内外黄橙色を呈する。3・4は高杯の脚部で、3はビット5、4はⅡ区2号溝状遺構から出土している。3は内外摩滅で調整が不明瞭だが、削り状の面がある。色調は淡橙色。4は摩滅しているが外面に磨きが見られ、色調は黄橙色を呈する。

手捏土器（5） Ⅳ区9号溝状遺構の石組裏込め内から出土。内外押さえで、黄橙色を呈する。

土師器 (6~11) 6はⅡ区の遺構検出面出土で、甔の底部であろう。全体に摩滅しており調整が不明瞭だが、外面はナデ、内面はケズリかナデであろう。色調は内外橙色で、変色や剥離は見られない。7はビット1出土の甔か甔の把手であろう。黄灰色を呈する。8は土師器の高台付皿の底部片で、黄白色を呈する。9~11は土師器碗の高台で、9はビット46、8・10・11はⅠ区大土坑出土である。8・9・11は黄白色を呈し、10は外面黄灰褐色で、いずれも胎土は精良である。

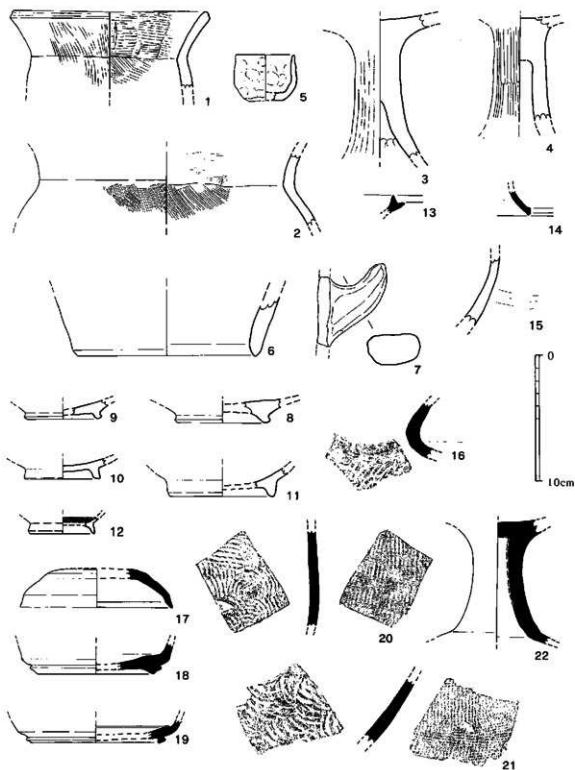
黒色土器 (12) Ⅰ区大土坑出土の黒色土器Bで、外面黄白色、内面黒色を呈する。9~12は9~11c代のものと推定できる。

須恵器 (13~22) 13はⅢ区遺構検出面出土の杯身の受部で、小片のため径を復元できないが、12~13cm程であろう。外面には灰被りがあるので、伏せて焼いている。暗青灰色を呈する。14はビット1出土の小型高杯の脚裾である。内外青灰色で、灰被りは見られない。15はビット6出土の甔の小片だろうか。外面は削り状のナデで、内外灰白色。16はⅣ区8号溝状遺構出土の甔の頸部で、外面肩部にタタキの一部、内面に同心円文の当て具痕が見られる。内外暗青灰色

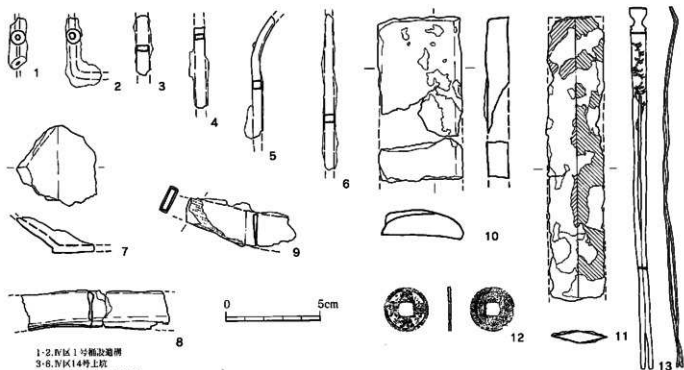


第76図 出土地不明・攪乱出土遺物実測図(6は1/2、4は1/4、他は1/3)

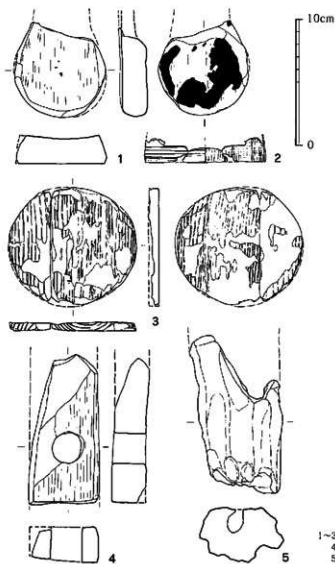
を呈する。17はⅠ区1号溝状遺構出土の杯蓋。天井部のみ回転ヘラ削りで、内外暗青灰色を呈する。口縁部がやや反ることから、身の可能性もあろう。18・19は高台付杯で、18はⅠ区大上



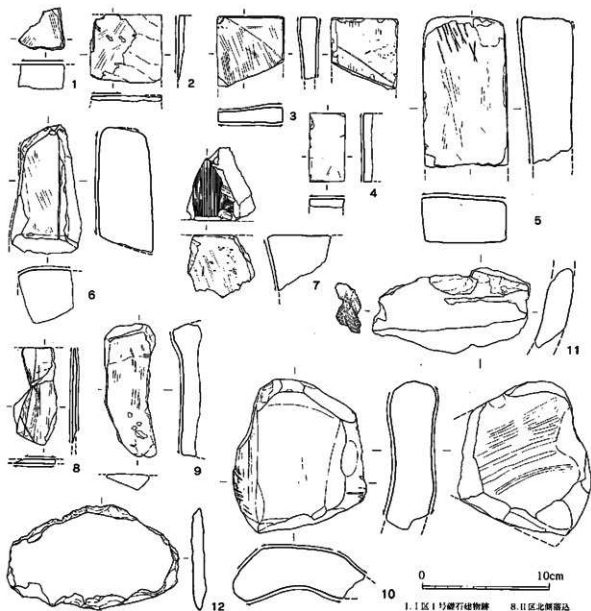
第77図 弥生～古代の山土土器実測図(1/3)



第78図 市丸城居屋敷遺跡出土金属製品実測図(1/3)



第79図 市丸城居屋敷遺跡出土木製品実測図(1/3)

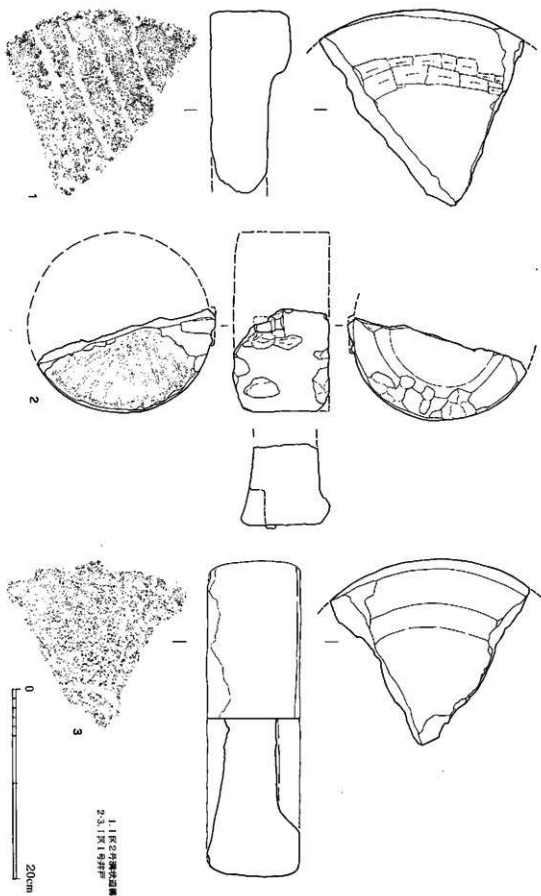


第80図 市丸城居屋敷遺跡出土土製品実測図1(1/3)

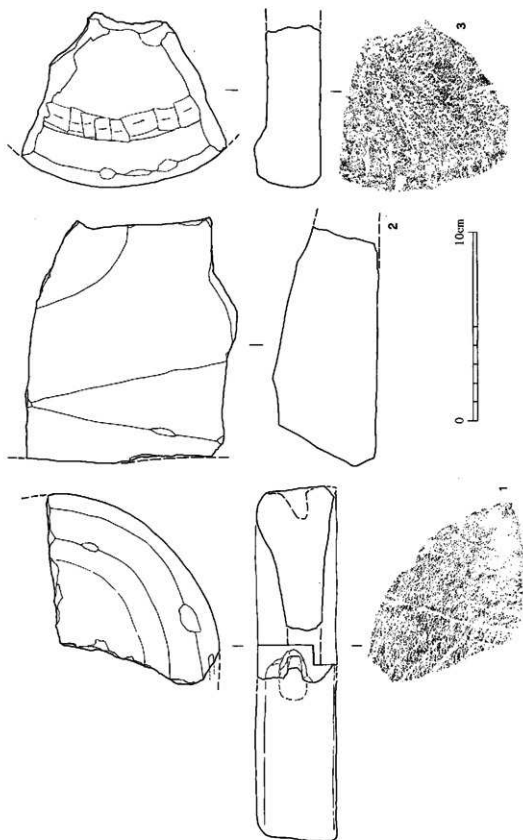
坑、19はII区遺構検出面出土で、双方とも内外ナデ。18は暗青灰色、19は灰色を呈する。20・21は甕の胴部片で、外面はタタキの後カキ日、内面は同心円文の当て具痕がある。内外青灰色を呈する。20はIV区1号溝状遺構出土で、小片のため傾きは不明瞭。21はI区大土坑出土で、傾きはやや不明瞭。22は高杯の脚部で、II区の遺構検出面出土。内外横ナデ、青灰色を呈する。6・7・13～22は7c後葉から8c前半のものと思われる。

註

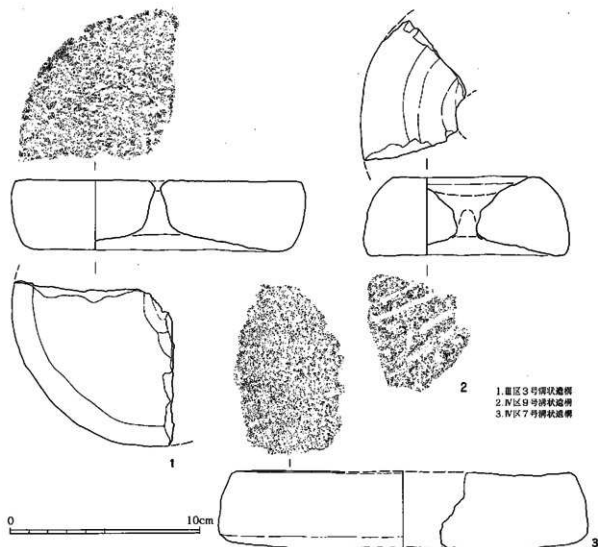
1. 横田賢次郎・森田勉1978「大宰府出土の輸入中国陶磁器について—型式分類と編年を中心として—」『九州歴史資料館研究論叢4』九州歴史資料館
2. 同堂忠彦1990『考古学ライブラリー—60 備前焼—』ニューサイエンス社
3. 佐藤幸司1993「近世備前焼—北部九州における備前の生産と流通（1）—」『法蘭西 第2号』博多研究会
4. 谷口俊治1989「豊前地域の中世雑器」『研究紀要—第3号—』財団法人北九州市教育事業団埋蔵文化財調査室



第81圖 市丸城居屋敷遺跡出土石製品実測図2(1/4)



第82図 市丸城居屋敷遺跡出土石製品実測図3(1/4)

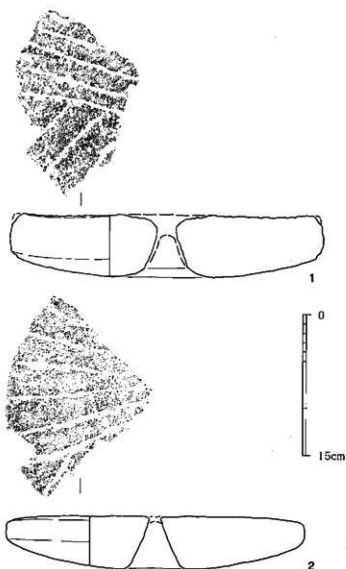


第83図 市丸城居屋敷遺跡出土土製品実測図4(1/4)

5. 大橋康二他2000『九州陶磁の百年』九州近世陶磁学会
6. 川上秀秋1999「第4章まとめ 3. 17世紀～18世紀の土師器皿について」『小倉城御蔵跡』北九州市埋蔵文化財調査報告書228集 財団法人北九州市教育事業団埋蔵文化財調査室
7. 石井龍彦編1996『柳瀬遺跡・奇兵隊陣屋跡』山口県埋蔵文化財調査報告書179集 日本道路公団広島建設局山口工事事務所・山口県教育委員会
8. 飛野博文編1997『金居塚遺跡II』一般国道10号堂前バイパス関係埋蔵文化財調査報告書第7集 福岡県教育委員会
9. 川上秀秋2000「壱町遺跡第1地点」北九州市埋蔵文化財調査報告書第244集 財団法人北九州市教育事業団埋蔵文化財調査室
10. 山口信義・川上秀秋2001「本原瀬本陣跡・脇本陣跡3」北九州市埋蔵文化財調査報告書第266集 財団法人北九州市教育事業団埋蔵文化財調査室
11. 栗山伸司・加藤裕一2001「大手町遺跡第2地点」北九州市埋蔵文化財調査報告書第91集 北九州市教育委員会
12. 南郷8
13. 上村佳典・高山京子1993『京町遺跡』北九州市埋蔵文化財調査報告書第59集 北九州市教育委員会

参考文献

- 江戸遺跡研究会編2001『図説 江戸考古学研究事典』柏書房
 大橋康二1989『考古学ライブラリー55 肥前陶磁』ニューサイエンス社
 上村佳典・高山京子1993『京町遺跡』北九州市埋蔵文化財調査報告書第59集 北九州市教育委員会
 川上秀秋1999『小倉城御蔵跡』北九州市埋蔵文化財調査報告書第228集 財団法人北九州市教育事業団埋蔵文化財調査室



第84図 市丸城居屋敷遺跡出土石製品実測図5(1/4)

査査

栗山伸司・加藤裕一2001『大手町遺跡第2地点』北九州市埋蔵文化財調査報告書第91集 北九州市教育委員会
 児玉真一『中野上の原古窯跡』小石原村文化財調査報告書第3集 小石原村教育委員会
 小池史哲1997『上唐原稲本屋敷遺跡』一般河川山国川築堤関係埋蔵文化財調査報告1 福岡県教育委員会
 佐藤孝司編1994『第4章まとめ 6. 竹器の種類と変遷』『京町遺跡3』北九州市埋蔵文化財調査報告書第147集 財団法人北九州市教育事業団埋蔵文化財調査室
 関川 栄2001『小倉城下大坂町遺跡』北九州市埋蔵文化財調査報告書第92集 北九州市教育委員会
 副島邦弘1992『金屋遺跡』一般国道10号線行橋バイパス関係埋蔵文化財調査報告書第2集
 谷口俊治1986『北方遺跡』北九州市埋蔵文化財調査報告書第48集 財団法人北九州市教育事業団埋蔵文化財調査室
 田村 悟1995『須崎町公園遺跡』直方市文化財調査報告書第18集 直方市教育委員会
 飛野博文編1997『金居塚遺跡Ⅱ』一般国道10号豊前バイパス関係埋蔵文化財調査報告書第7集 福岡県教育委員会
 中村利至久2001『小倉城跡普請所跡』北九州市埋蔵文化財調査報告書第258集 財団法人北九州市教育事業団埋蔵文化財調査室
 堀苑孝志1997『北部九州における周防平瓦質磁鉢の流通とその背景』『中近世土器の基礎研究Ⅶ』日本中世土器研究会
 山口信哉・川上秀秋2001『木原瀬本陣跡・熊本陣跡3』北九州市埋蔵文化財調査報告書第266集 財団法人北九州市教育事業団埋蔵文化財調査室
 吉田 寛編1993『所内城三ノ丸遺跡』大分県教育委員会

6) 小 結

本遺跡からは、礎石建物跡2棟、掘立柱建物跡4棟、上坑39基、大土坑2基、石組土坑1基、井戸8基、柵状遺構1基、便所遺構1基、集石遺構3基、埋甕遺構3基、桶埋設遺構2基、胎衣埋納遺構2基、溝状遺構25条、石橋遺構1基、排水管遺構1基、暗渠遺構1基など多様な遺構が検出され、時期的には16～20c初頭にわたっている。遺物も豊富で、各時期一定量が存在することから、継続的に集落が営まれたといえる。

以下、本遺跡から得た資料をまとめ、若干の考察を加えたい。

遺跡の変遷

遺物としては、弥生時代後期・古墳時代後期から奈良時代・平安時代にさかのぼるものが見られる。本遺跡の立地する市丸地区の周囲には岩岳川の流路があったようで、比較的広い微高地であったと考えられ、近接する豊前市小石原泉遺跡¹¹などの大規模集落からの分村が存在したのではないだろうか。鎌倉～室町時代になると遺物はほとんど見られないが、調査区東の資船神社は弘安三（1277）年に創建されていることから、集落自体は存続していたようだ。この時期の遺物はいずれも混入状態で出土しており、同時期の遺構は確認できない。後世に大きく削平されたために、残っていないのではないだろうか。市丸集落の東端の市丸二反田遺跡¹²ではこの時期の集落が確認されており、旧地形は南西に向かって高くなっていることが確認されており、このことを傍証している。

以下、これ以降の遺構が確認された時期について、5期に分けて説明する。

I期（16c代） 戦国時代になって、わずかながら遺構が見られるようになる。この時期に比定されるのはI区円形土坑、1・2号大土坑、3号溝状遺構、II区1・2号井戸・2号溝状遺構である。I区3号溝状遺構とII区2号溝状遺構を区画溝とする屋敷地が想定される。II区2号井戸は原敷内、1号井戸は屋敷外にあたる。これに伴う建物は確認できないが、調査区南側に存在するのだろう。IV区1号掘立柱建物跡はこの時期に伴う可能性があるが、根拠に欠ける。

II期（17c前半～18c前半） 江戸時代前期の遺構は、IV区6・12号土坑、1号集石遺構、11～13号溝状遺構である。2号掘立柱建物跡は積極的な根拠ではないが、主軸方向が12・13号溝状遺構と一致することから想定した。また、2号集石遺構は1号集石遺構と共存する可能性が高いことからこの時期に比定した。11～13号溝状遺構で区画された屋敷地であり、12号溝状遺構は間仕切りのなもので、全体の区画は半分以上調査区南に展開するものと思われる。

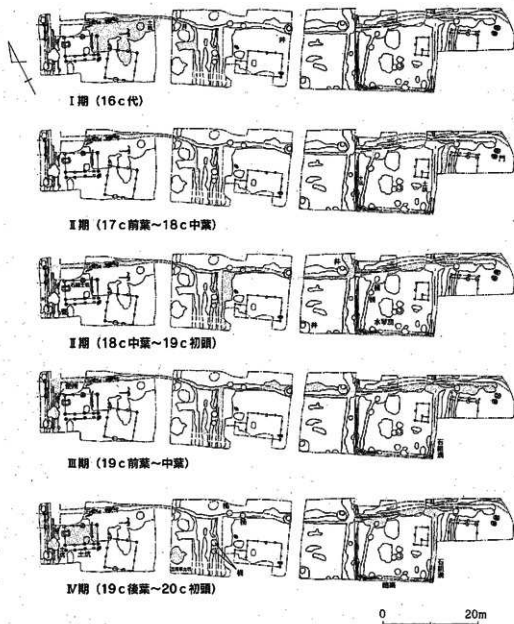
I区の大土坑とII区北側落ち込みはこの時期に埋没しており、整地されている。これは前代の市丸城の廃城に伴う区画整備に伴うものであろう。また、調査区南東の獅伏山（紫福山）明徳寺は元文5（1720）年開山であり、江戸幕府の定めた寺請制度に則ってこの時期の市丸集落の菩提寺となったと考えられる。

III期（18c中葉～19c初頭） 江戸中期の遺構は、I区2号掘立柱建物跡、1号石組土坑、

1号井戸、1号埋竈遺構、2・3号溝状遺構、Ⅱ区1号掘立柱建物跡、1・4・5号溝状遺構、Ⅲ区1・2号井戸、2・3号溝状遺構、Ⅳ区15号土坑、2号埋竈遺構、1号桶埋設遺構、3・9号溝状遺構である。Ⅰ区の大土坑上面はこの時期に整地されている。Ⅳ区2号埋竈遺構は水琴窟であり、こうした遺構は庭園や便所の傍に設置されていることから、Ⅳ区周辺は庭園であろう。遺物をほとんど含まない土坑は植木の掘削痕かもしれない。この庭園に伴う建物は調査区の南に展開するのだろう。庭園をもつことからⅣ区には富裕層の家屋があったことが想定される。

Ⅳ期 (19c前葉～中葉) 江戸後期から幕末明治初期の遺構は、Ⅰ区便所遺構、1号溝状遺構、Ⅱ区3・5号溝状遺構、Ⅲ区1号溝状遺構、Ⅳ区1・6・7・9号溝状遺構。Ⅳ区3号土坑は1号溝状遺構に伴うと考えられるのでこの時期に比定される。

慶応2 (1866) 年に小倉城自焼の混乱に乗じて藩内各地に百姓一揆が起こったが、築上郡内では八屋村の清兵衛が首魁となって一揆が起こり、郡内の富豪・庄屋宅を襲撃している。この時



第85図 市丸城居屋敷遺跡遺構変遷図(1/800)

の記録に市丸村は西家が襲われたとある。¹¹⁵ 西家は調査区の北側にあったらしく、調査区内にはその影響は見られない。

V期（19c後半～20c初頭） 明治中期から大正期の遺構は、I区1・2号礎石建物、3・4号土坑、1号溝状遺構、II区1・2・9・12号土坑、IV区7号溝状遺構、暗渠遺構で、6号溝状遺構や暗渠を切っていることから、1・5・9号溝状遺構はさらに掘り直されたと思われる。また、排水官道構は土管から、1号礎石建物は根締石にレンガを使用していることからこの時期に比定した。築上郡では大正7（1918）年にレンガ工場が作られており、このレンガもその製品と考えられるので大正7年以降の建物であろう。

昭和12（1937）年の『福岡県築上郡三毛門村土地宝典』によると、この時期にはすでに現在の水路によるI区、II区、Ⅲ・Ⅳ区の3区画が成立している。また、付近住民によると、調査区のI区に古松家、Ⅲ・Ⅳ区に庄屋を務めた庄司家があったらしい。このことから、この時期のI区、Ⅲ・Ⅳ区の遺構はそれぞれ吉松家、庄司家の敷地内のものといえよう。大正期の赤絵皿が出土したピット100や口露戦争戦勝記念の染付碗が出土したピット101もこの時期のもので、多量の遺物が入ることから住居に対応する廃棄土坑とも考えられる。

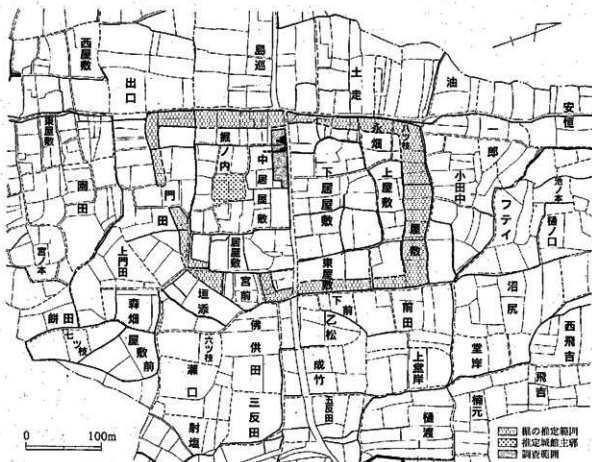
各時期を通じて、各区の北側には区画溝と見られる溝状遺構が存在している。それより北は現在と同じように道路として使用されていたことが予測される。明治45（1912）年に設立された宇島鉄道が昭和9（1934）年に廃線になると、これに変わって乗合自動車が営業され、前述の現県道はその路線（宇島・清水町・市丸・中村・垂水・下唐原・原井・有野）の一つとなっており、これに伴って道路整備がなされたと考えられる。

遺物が少なく時期のわからない遺構も多く存在するが、以上のように本調査区内の変遷を想定した。

市丸城の想定復元

上述の通り、本調査区からは市丸城の施設と断定できる遺構は確認できなかったが、同時期の屋敷地を検出できた。『築上郡誌』¹¹⁶によると、明徳寺の裏手に「上屋敷堀ノ内」、その東南に「門田」、「弓場ノ本」、「釣場」の小字があったとされ、そこを城跡に比定しているが、昭和12年の小字図にはこの小字が残っておらず、どこを指すのかは不明である。おそらく、「中居屋敷」と「堀内」の間にある30×35mの方形区画（231・2・232・226・1・2番地）を指しているのではないだろうか。しかし、この規模では居館としても小規模である。I区で検出された16c代の屋敷地が調査区の南に展開していることから、前述の区画を主郭として周囲まで含めた規模であったと考えられる。第86図は小字名と地形から想定した範囲であるが、「屋敷」という小字名のつく範囲は近世には集落地であったと考えられるので、この範囲と同規模が一回り小さい規模の区画であろう。

この想定範囲の周囲には、「堀内」・「垣添」・「門田」・「土走」という小字があり、外部には「沼尻」・「池元」・「樋渡」・「瀬口」といった水に関する地名が存在していることから、湿地に囲まれた低台地を堀で囲んだ集落の中に造られた平城館であったのだろう。



第86図 市丸城想定範囲(1/5,000)

市丸城と市丸氏について

市丸城と市丸氏についての史料は非常に少ない。最も古い文献は、『大内氏実録巻四』『野田隆徳子隆房伝』である。大永（1528）8年の大内義興知行状によると、守護代杉十郎左衛門尉知行の市丸42町5段5代を野田兵部少輔興方に宛がっている。また、同史料では、大内義長が天文22（1553）年野田興方の子、野田兵部少輔隆徳に市丸村120石を安堵している。野田氏についての出自は、この史料の中からはうかがえないが、市丸隆徳は他に石見国に120石、周防国に45石、長門国に45石、豊前国京師部に120石をもつことから、本地域の出身ではないだろう。

この史料から市丸地区は、16c 初頭以前は杉氏、前葉から中葉は野田氏の所領であったことがわかる。¹⁹⁾

鎌倉時代以来、本地域を支配した宇都宮氏は、南北朝時代に南朝方として挙兵し、応安七(1374)年城井高畑城の陥落によりその勢力を失った。これにかわって大内氏が豊前国に進出し、室町時代の大内氏国は大内氏の支配下になった。

大内氏は豊前国の実際の支配を、譜代の重臣である杉氏に任せ豊前国守護代としており、その知行地の1つとして市丸地区を安堵したのであろう。いつから所領になったのかはわからないが、以下のことから推察できる。杉氏は上毛郡内の土豪を被官とし、豊前国内の各部を治める郡代に

これらの土豪を起用している。応永27(1420)年・延徳4(1492)年・天文18(1549)年の史料によれば、郡代として、大平村土佐に勢力をもつ友枝氏や吉富町広津の広津氏、新吉富村吉岡の吉岡氏などの名が挙げられている。このことから、少なくとも15c前葉には、市丸地区周辺は杉氏の傘下に入っていたと推定される。

こうした郡代は、勢力としては決して大きいほうではない。豊前市における最大勢力は豊前市山田を本拠とする山田氏であり、山田氏は文明10(1478)年に大内政弘が九州に出兵し少武氏を破って以降、大内氏の傘下に加わったようだ。山田氏は延徳4(1492)年には段銭奉行となっているので、杉氏は15c末には完全に築上郡を傘下に治めていたと考えられる。

市丸地区は、この山田氏と広津氏の勢力圏の境界に位置しており、有力な土豪が成長していなかったことから大内氏の恩賞地になったのではないだろうか。

このことから、市丸城が造られたのは野田氏の知行地になってからと考えられる。出土遺物は16c代から増加しており、そのことを示している。

次に見られる史料は、『三毛門緒方家文書』である。これによると、天文18(1549)年に市丸□□丞道貞が、緒方右京進に古賀富吉の下作職を、天文22(1553)年には市丸主殿丞氏種が八取町の下作職を譲渡している。ここに見られる八取町は吉富町小犬丸清水町に小字があり、古賀富吉は三毛門地区と推定される。市丸氏は、字名を冠することから、市丸地区を拠点とする土豪と考えられるが、周辺地区の社寺領の下作職も持っていたようだ。

杉氏は京都郡松山城に人城しており、京都郡を豊前国における拠点としていたので、市丸地区は野田氏同様に、遠隔地の所領であった。したがって、在地の土豪である市丸氏を被官化して代官にしていた可能性が高い。天文20(1551)年、大内義隆が陶晴賢に攻められ自害したことで、大友氏が豊前国に進出を始める。『宇佐軍記』によると、弘治2(1556)年、大友氏が上毛郡内に侵入した際に服従した郡内の人士には、「日熊・鈴熊・有吉・緒方・黒土・本田・尻高・矢方・市丸・中鉢屋・安雲・吉岡等」とあり、ここに「市丸」の名がある。その後、弘治3(1557)年に仲八屋・山田氏ら築上郡の反大友勢力が城井氏宅所や広津氏宅所を攻めた際や、天正15(1587)年の豊前国一揆の中にも市丸氏の名は見えず、弘治2(1556)年を最後に文献上から姿を消している。近世になっても市丸を名乗る大庄屋格の家が存在しないことから、早々に侍身分を放棄したのではないだろうか。

このように、文献上の様相から見ても市丸城が広大な面積の城であったとは考えにくく、文献上に「市丸城」という名称さえ見られないことから、主郭部分に居館を構えて、防御的に区画整備した環濠集落を想定したい。

胎衣埋納について

本遺跡からは2基の胎衣壺が出土している。以下、胎衣埋納習俗に関することを述べたい。

胎衣とは、胎児を包んでいた膜である胎盤が、胎児とともに娩出されたもので、「後産」ともいわれる。この胎衣の処理の仕方は、地域や時代によってさまざまで、現在では産院で処理されているが、民俗例では屋内や、家のそばの木に吊るしたり、川に流す例もあるらしい。こうした

処理法の一つとして、壺や桶に入れて地中に埋める習俗を「胎衣納」という。中世には、「胎衣蔵」⁸¹³と表記されていたようだ。

室町幕府政所代であった蛭川親元の日記によると、胎衣納のため京から離れた吉方の山中に穴を掘り、壺を据えて、その中に胎衣を入れた桶を納め、その上に松を植えたところとある。また、室町時代の武家故実書である『御産所日記』の、足利義勝誕生の記録には、「太平」の文字のある銭を33枚と筆と墨を1セット副えて壺に入れ、吉方の山中に埋めたところとある。また、『産所之記』には、胎衣桶に白い粉を塗り、その上に松竹鶴亀を書き、足の付いた箱に入れ、「太平」の文字のある銭を13枚添えて吉方に向かい納めたところとある。⁸¹⁴

さらに遡る事例としては、京都郡豊津町徳永川ノ上遺跡で唐壺を納めた8c後半の胎衣壺が発見されている。

このような例は、上級階層の習俗であるので、当時一般民衆がどのように行っていたかは不明である。小型の曲げ物などの木製品で埋納すれば残らないことから未確認のものもあるが、調査事例としては江戸時代後期のものが多い。周辺地域では、行橋市金屋遺跡、北九州市木屋瀬本陣跡・脇本陣跡で本遺跡と同様に土瓶を使用した胎衣埋納が発見されている。⁸¹⁵

胎衣壺を埋納する場所については地域で異なっている。民俗例では、床下に埋める例は岐阜・奈良・岡山・徳島・福岡など西日本に多い。屋敷内に埋める例も多いが、煙や木の下、古井戸に納める地域もある。屋敷内でも、家の入口など人に踏まれるところに埋める所と、人の踏まないところに埋める所がある。⁸¹⁶豊前市では便所の横に埋める習慣であったらしい。⁸¹⁷

本遺跡で検出された2基は近接していることから、同期のものと考えられ、19c前半代のものであろう。位置的には、II区の2号溝以西の区画と4・5号溝以東の区画との境にあり、屋敷地内ではないといえよう。同じ併存する埋壺や桶埋設遺構がないことから、便所の横だったわけではないようだ。断定できないが、2号溝と4・5号溝の間は通路になっていたのではないだろうか。勝手口のような入口に埋められた可能性があらう。

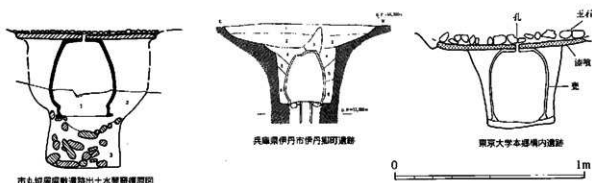
水琴窟について

IV区で2号埋壺として報告した遺構は、類例により水琴窟と推定される。水琴窟は、庭園施設の一つで、手水鉢や「つくばい」の水落の場所を掘り下げて、砂利や栗石を充填した排水施設に手を加えたもので、排水部分の地中に甕を埋め込んで、水の落ちる音を楽しもうとするものである。江戸中期から富裕層に普及したとされており、兵庫県伊丹郷町遺跡でも18c末～19c代に多く検出されている。

裏庭や便所裏の傍から検出されることが多く、便所に面する庭園に置かれた手洗い鉢の排水施設として使用されたものと想定されている。⁸¹⁸本遺跡では、確実な庭園遺構は確認できないが、IV区の遺物を含まない大型土坑が植木の抜き跡と考えることもできる。

お歯黒壺

本遺跡の遺構検出面から出土した陶器の徳利の内底に鉄の塊が付着しているものがあつた。こ



第87図 市丸城居屋敷遺跡出土水等磁器復元図と類例

れは、お歯黒水を作ったものと考えられる。

『和漢三才図会』によれば、お歯黒水は古釘などの鉄屑と米屑を少し入れ水に漬け、夏なら三日、冬なら七日暖かいところに置くと、錆びて黄赤色になると記されている。このお歯黒水に五倍子粉（うるし科の植物であるヌルデの枝にできた虫こぶを採取し、乾燥させて石臼でひき粉にしたもの）を混ぜて作ったとされる。お歯黒の艶を良くするために、鮎や飲み残した酒を入れたともいわれている。¹¹²¹

在地産陶磁器について

京築地域には管見する限り、数基の近世窯跡が存在している。京都部では原川町上高屋の乙子焼窯¹¹²²が存在しており、江戸時代に陶器・磁器を焼いている。また、豊津町豊津で石走南窯跡、節丸で釜ヶ辻窯跡が発見されている¹¹²³。築上部では大平村上唐原の唐原焼窯¹¹²⁴で、陶器が焼かれている。本遺跡の位置から考えて、これらの窯の製品も出土遺物に含まれている可能性もあるが、いずれも未調査の遺跡で採集品が紹介されるにとどまっているため、現段階ではこれらの製品との比較は行っていない。今後の研究に進展に期待したい。

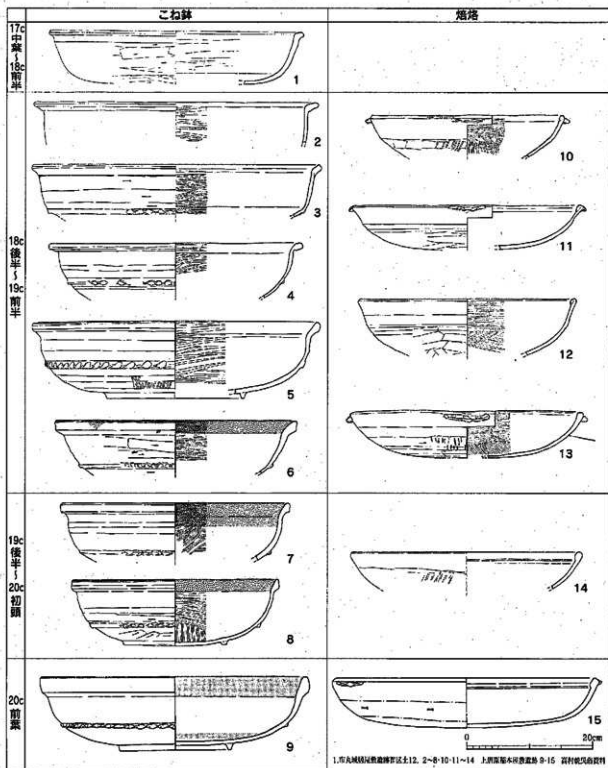
在地産土師質・瓦質土器について

本遺跡からは、多くの土師質土器・瓦質土器が出土しているが、大きく分類すると16～17c代の防長系の瓦質土器と、小倉城や同城下町などの北九州地域に多く見られるもの、宇佐・中津・築上部地域に見られる高村焼系とそれ以外のものとに分けられる。

このうち高村焼系土器が後に至る「高村焼」については、1991年に大分県宇佐風土記の丘歴史民俗資料館で開催された特別展『やきもの一豊のくらしと文化ー』で展示されて以来着目され、吉田寛（1993）¹¹²⁵が『府内城三ノ丸遺跡』の報告書中で紹介し、小池史哲（1997）¹¹²⁶が分類案と時期観を示している。

紹介された「高村焼」は焙烙・こね鉢・甗・甕（壺）であるが、昭和初期の記録では他にも器種があったらしい。現在のところ、紹介された民俗資料と文献をもとにしているのみで、「高村焼」の実態は明らかでない。したがって本書では、これらの「高村焼」に至ると思われる近世土師質土器群について、そのまま「高村焼」の名称を用いるのを差し控え、「高村焼系」とした。

第88図は小池の時期線に基づいて、資料の多い焙烙・こね鉢の形態変遷を示したものだが、市丸城居屋敷遺跡でこね鉢の祖形と見られる17c代の鉢が出土しており、17～18c前半代に丁寧な磨きを施す現在の「高村焼」の姿になり、それ以前は中世雑器として認識されているものと大きく変わらないようだ。したがって、高牟礼文書にあるように「高村焼」が12cから存在するならば、中世土師質土器に系譜を遡れる可能性があるだろう。



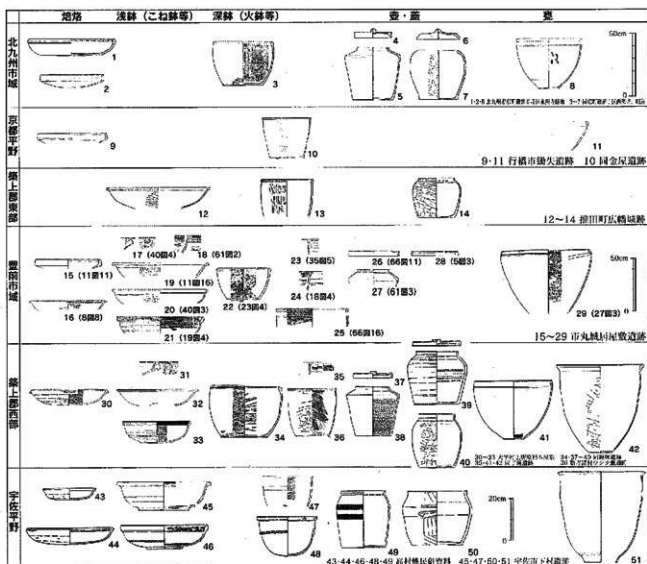
第88図 高村焼系こね鉢・焙烙の形態変化 (1/6)

次に空間的な広がりを見てみよう。第89図に示したように、「高村焼系」土器は小倉周辺はもとより京都府内でもほとんど見られない。小倉周辺では口縁が内湾する形態の焙烙が一般的で、豊後においてはこれに近い形態的には異なるものが見られる。したがって、豊前北部・豊前南部・豊後といった3ヶ所の生産拠点が存在しており、それぞれ流通圏を形成していたと考えられる。

本遺跡は豊前北部の小倉と豊前南部の宇佐の中間点に当たることから双方の土器が入っており、土師質土器の生産と流通を考える上で興味深い地域であるといえよう。

また、焙烙以外の鉢や火鉢、上唐原系遺跡など築上郡大平村東部で出土する口縁が断面三角形に肥厚する大甕など、「高村焼」に含まれない形態のものもあり、中津や築上郡など近在に生産地をもつ土器もあるようだ。今後の資料の増加に期待したい。

本遺跡は戦国時代の市丸城の調査を目的としていたため、近世・近代の遺構を掘り下げながら下位の遺構を確認していかなければならず、結果として近世中心の遺跡となった。しかしながら、豊築地域は近世文書が豊富に残されているものの、近世遺跡を調査した事例はほとんどなく、近



第89図 豊前各地の近世土師質・瓦質土器(29は1/36、8・10・11・36・41・42・49・51は1/30、他は1/18)

世の考古資料が極端に少ない地域である。したがって、今回の調査は、本地域における近世・近代のまとまった資料を得る良い機会になったと考えたい。また、16c代の遺構が確認されたことで、市丸城の範囲を推定する材料を得ることができた。築上部内に多く存在する平城跡は火患の解明されているものが少なく、今後の調査に期待したい。

注

1. 豊前市教育委員会が整理中
2. 渡辺信幸1991「第七編 神社・寺院・堂宇・その他の宗教 第1章 神社」『豊前市史 下巻』豊前市
3. 豊前市教育委員会が整理中
4. 渡辺信幸1991「第七編 神社・寺院・堂宇・その他の宗教 第2章 寺院・堂宇」『豊前市史 下巻』豊前市
5. 渡辺三司1991「第六編 近現代 第1章 明治の新政」『豊前市史 下巻』豊前市
6. 明治45年に設立された平島鉄道により、レンガの原料となる大平村有野村近の火山灰岩を輸送できるようになったことで、大正7年には豊前市に九州煉瓦株式会社と宇治窯業株式会社が創設されている。
7. 藤井幹一「第六編 近・現代 第3章 大正・昭和の郷土」『豊前市史 下巻』豊前市
8. 福岡県教育委員会 1911「築上部誌 福岡県教育委員会」
9. 前掲8
10. 則松弘明1996『鎮西宇都宮氏の歴史』翠峰堂
11. 緒方右京進とは、結方矩盛のことであり、三毛門地区に勢力を持つ土豪である。天文年間から頭角を抜き、弘治・永禄年間には、各方面から下作職の諷刺を受け、勢力を拡大している。
12. 前掲8
13. 前掲8
14. 横井 清1998『約と胎衣 中世人の生と死』平凡社ライブラリー233 平凡社
15. 柳田康夫編1997「徳永川ノ上遺跡Ⅲ」一般国道10号線江井バイパス関係埋蔵文化財調査報告書第9集 福岡県教育委員会
16. 岡島邦弘1992『金屋遺跡』一般国道10号線桂田道路関係埋蔵文化財調査報告書第2集 福岡県教育委員会
17. 山口信隆・川上秀秋2001『木屋原本陣跡・熊本本陣跡』3 北九州市埋蔵文化財調査報告書第266集 財団法人北九州市教育事業関係埋蔵文化財調査室
18. 佐藤千幸1997「お産の民俗一特にその俗信集」 株式会社日本国書刊行会
19. 亀岡光夫1991「第八編 第5章 民間信仰」『豊前市史 下巻』豊前市
20. 赤松和佳1996『庭の文化—植木と水琴窟』『城・町・くらし 有岡城跡・伊丹郷町調査10年の成果から』
21. 山村博美1992「江戸時代の化粧—考古資料との関連から—」『江戸遺跡研究会第5回大会 考古学と江戸文化（第2要旨）』江戸遺跡研究会
22. 伊崎俊秋編1992『城井遺跡Ⅲ』犀川町文化財調査報告書第3集 犀川町教育委員会
現在、犀川町中央公民館に窯道具が展示されている。
23. 豊津町町誌編纂委員会1985『豊津町誌』豊津町
豊津町教育委員会永永弥義氏指示による。
24. 吉田明夫1999「百富居屋敷遺跡」一般河川山国川築堤関係埋蔵文化財調査報告書3 福岡県教育委員会
現在、村指定文化財となっており、「百富居屋敷遺跡」において紹介されており、遺物は、大平村歴史民俗資料館に展示されている。
25. 吉田 寛編1993『府内城三ノ丸遺跡』大分県教育委員会
26. 小池史哲1997「上唐原本陣屋敷遺跡」一般河川山国川築堤関係埋蔵文化財調査報告書1 福岡県教育委員会
27. 森 幸二編1999「上唐原子清遺跡Ⅰ」一般河川山国川築堤関係埋蔵文化財調査報告書4 福岡県教育委員会

参考文献

- 江戸遺跡研究会編2001『河説 江戸考古学研究事典』柏書房
- 杉原敏之編1997『桑野遺跡・上の原遺跡・小松原遺跡』一般国道10号豊前バイパス関係埋蔵文化財調査報告書第6集 福岡県教育委員会
- 伊崎俊秋1992『広城城跡』『豊田バイパス関係埋蔵文化財調査報告書』第9集 福岡県教育委員会
- 城井 誠・江田 豊・友岡保彦1988「Ⅱ 第二章 各遺跡の調査 第5節 黒水遺跡」『一般国道10号線中津バイパス埋蔵文化財発掘調査報告書（Ⅰ） 掘削野地遺跡 六軒町遺跡 大池南遺跡 清水郎原西遺跡 黒水遺跡 大坪遺跡 権現島遺跡』大分県教育委員会
- 林 一也・川谷 浩・江藤和幸1994「第5章 下林遺跡Ⅰ区」『一般国道10号宇佐道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 正布ヶ平遺跡 柳沢遺跡 松ヶ平遺跡 下林遺跡Ⅰ区 下林遺跡Ⅱ区』大分県教育委員会
- 小倉正五・乙峰政弘・林 一也・江藤和幸・段上智代1995「一般国道10号宇佐道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 唐草殿寺遺跡 切寄遺跡 下林遺跡Ⅱ区」大分県教育委員会

2. 六郎堂ノ前遺跡

1) はじめに

調査区は農道や水路ならびに畦を保全して掘り下げたため、便宜上北西側をⅠ区として、Ⅲ区までに区別したが、Ⅰ区は農道にはば並行する散状の溝と小ピットのほかに顕著な遺構はない。Ⅱ区には1号住居跡、1号土坑のほかに緩やかに凹む溝状の落ち込みとそれに並行する3号溝と農道に沿った溝、柱穴状ピットがややまとまって発見された。Ⅲ区は調査区端の落ち込み状の土坑とこれに続く1号溝、Ⅱ区寄りを南北方向に流れる2号溝と柱穴状ピットが発見された。これらのうち、1号住居跡と1号土坑以外の土坑や柱穴状ピットおよび遺物包含層からは顕著な遺物出土が見られなかったため、代表的な遺構の報告に留めることにしたい。

2) 遺構と遺物

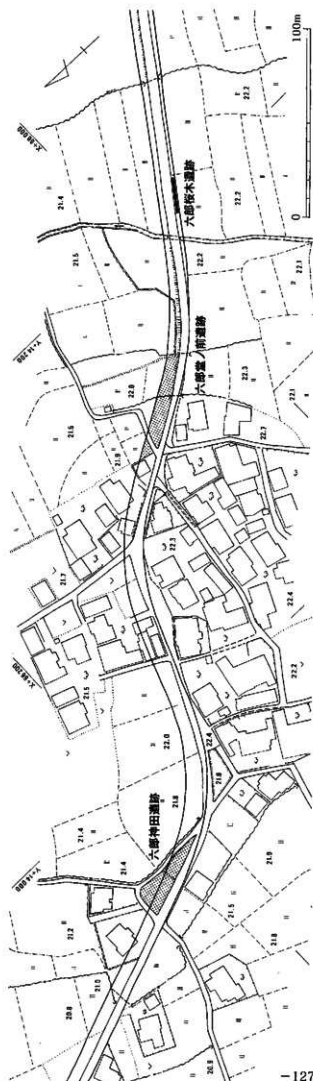
1号竪穴住居跡 (図版41、第92図)

東西5.2m、南北5.1m規模の、四隅に僅かな丸みがある方形プランの住居跡で、主軸はN64°W方向を向き、東北側の一部が調査区域外に滲る。上部を削平されていて、周壁は5cm前後と低いが、南北壁と西壁に沿って高さ5~10cm、幅100~120cm規模のベッド状の段があり、中央部の床より一段高い。全体的に砂礫層に掘り込まれているために床面には凹凸があるものの、中央部の床面には礫を漕うように堅く締まった貼床粘土が確認され、概ね平坦に整えられている状況が窺われた。ただ発掘時には礫に被る粘土が剥がれやすいため、貼床を残して掘り下げるのが困難であった。床面を掘り込む柱穴状ピットは15穴ほどあり、そのうち主柱穴はベッド状遺構と中央部床面の境で四隅から140~150cmほどの位置にあるピットであろう。木炭片と灰が含まれる炉跡は住居跡のほぼ中央にあり、長径100cm、短径80cm、深さ10cm前後に掘り込まれている。

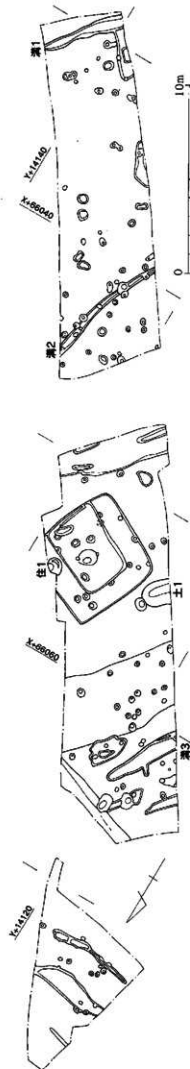
床面には拳大から人頭大の円礫と壺、甕などの土器片が所々に集まった状態に発見されたが、土器片と床面の間に円礫が挟まる例も見受けられた。

なお、住居跡内には龍泉窯系の青磁碗片、瓦質土器片、土師質土器片などが一部混入していた。出土土器 (図版42-2、第93・95図)

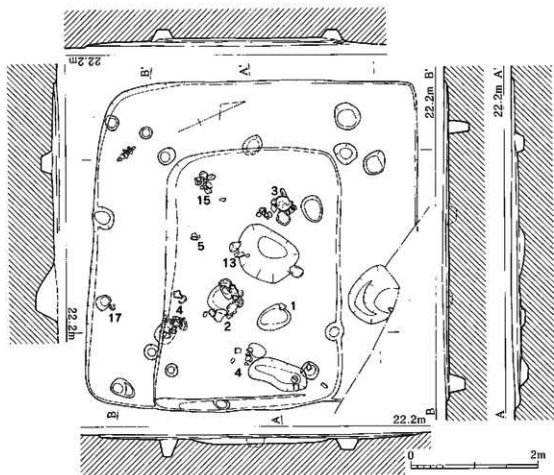
土師器壺 (第93図1~3) いずれも複合口縁壺で、1・2は細砂粒を含むが精良な胎土で器壁が薄めで、口縁部の外面には櫛目波状文が描かれている。1では体部内外面をハケ目調整している模様で、頸部外面に縦方向のハケ目、内面は横方向のハケ目が残るもののへら磨き調整されている。また口唇部に刻み目、口縁下端部に竹管状押圧痕のある円形貼文が2個単位に付けられている。2は体部内面をへら削りされているが、体部外面と口頸部内外面ともにへら磨き調整され



第90図 大郎堂ノ前遺跡・大郎神田遺跡・大郎校木遺跡位置図 (1/2,000)



第91図 大郎堂ノ前遺跡詳細配置図 (1/200)



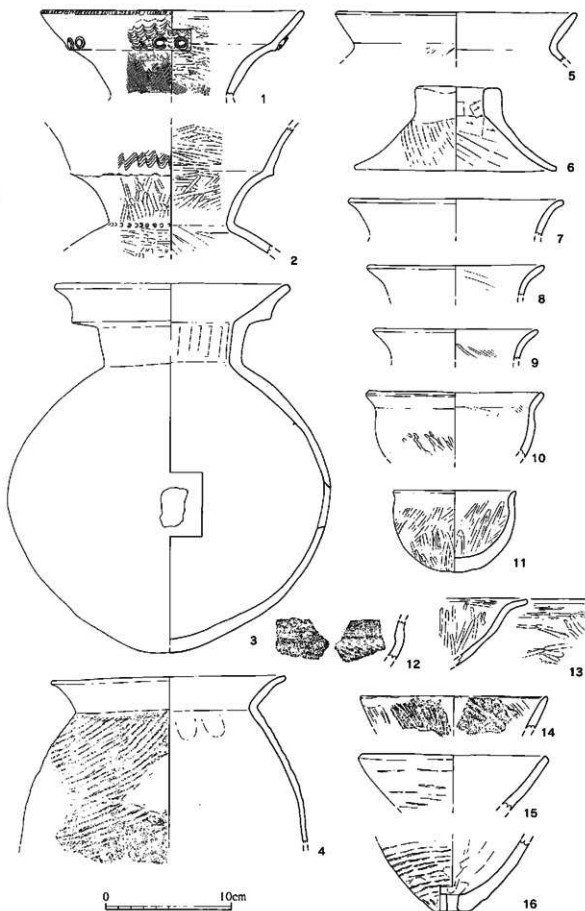
第92図 1号竪穴住居跡実測図(1/60)

ていて、頸部外面に小さな竹管状の連続刺突文が巡るようである。

3は完形で、口径18.4cm、器高29.3cm、胴最大径25.3cmの大きさ。倒卵形の体部で底部は鈍く尖り気味である。頸部は直立気味に立ち上がり、外面では開いた口縁部が明瞭に屈折するが、内面では緩やかな屈折となり、口頸部の器壁は厚い。胎土に砂粒を多めに含み、器面は内外面ともにナデ、板状工具によるナデや横ナデ調整されている。

土師器蓋 (第93図4・5・7～9) 4・5は胴部外面を粗い叩き目調整、胴部内面をナデ調整する蓋で、胴部から口縁部にはく字形に外反して開くが、4が薄めに外反するのに比して、5の口縁部はやや肉厚である。4は復原口径18.4cm、残存器高13.5cmの大きさで、倒卵形の胴部になるものと思われる。胎土に砂粒を多く含み、赤茶褐色ないし淡黄灰色に焼成されている。7～9は外反する口縁部破片で、ナデ調整されるものの内面に板状ナデ痕やハケ目が残る。いずれも胎土に細砂粒と金雲母粒を含み、茶褐色系の色調に焼成されている。8・9は復原口径が13～14cmと小さく胴部への窄まりが緩やか気味なことから鉢かも知れない。

土師器蓋 (第93図6) 器高6.7cmの大きさで、巻き付け痕が明瞭に残る筒状の摘み部の直径6.8cmから、口径16.0cmの口縁部へ喇叭状に開く。外面には叩き目残り、内面は板状工具によ



第93圖 1号整穴住居跡出土土器実測圖1 (1/3)

るナデで調整されている。

土師器鉢 (第93図10~16・第95図17) 10~13は丸みをもった体部に外反する口縁部が付く鉢形土器。10は復原口径14.0cmの大きさ。内外面ともにナデ調整されるが、内面の一部にハケ目、胴部外面にへら磨き痕がみられる。11は口径9.6cm、器高6.5cmの大きさの完形品で、半球形を呈する体部に短く外反する口縁部が付く。体部内外面ともにへら磨き調整されるものの、外面に叩き痕が残り、研磨は粗い。胎土に細砂粒を含み、橙褐色に焼成される。12は屈曲部内面に残がある破片で、内外面ともにナデ調整されるが、口縁部内面にハケ目小口痕が残る。13は体部が大きく開き口縁部が緩やかに外反する破片で、内外面ともにへら磨き調整されている。胎土に細砂粒をやや多め、赤褐色粒を少量含み黄褐色に焼成されている。

14~17は直線的に開く体部からそのまま口縁部に移行する鉢形土器。14は復原口径14.5cmの大きさで、叩き目調整された後にナデ調整されるが、内面に凹凸が残る。15は復原口径16.0cmの大きさの胴部が面取りされる口縁部破片で、内外面ともにナデ調整されるが外面に叩き目痕が残る。16は接合しないが15と同一個体の可能性があり、底部に直径0.8cmの焼成前穿孔があるので甕である。内外面ともナデ調整されるが、外面に粗い叩き目、内面にへら削り痕を残す。胎土に砂粒を含み、淡黄茶褐色に焼成されている。17は復原口径14.2cm、器高6.6cmの大きさの鉢で、口縁部がやや内湾気味。内外面ともに板状工具でナデ調整され、口縁部は横ナデ調整されている。胎土に細砂粒を含み、赤茶褐色に焼成されている。

土師器高杯 (第95図18~21) 18は杯部が碗状の高杯で、脚部は開くが裾部を欠く。復原口径11.2cm、杯部高4.0cm、柱状部の太さ3.6cmの大きさ。内外面ともにへら磨き調整されるが、脚部内面には板状工具によるナデ痕が残る。精良な胎土で、赤茶褐色ないし茶褐色に焼成され、柱状部は黚したような黒色を呈する。

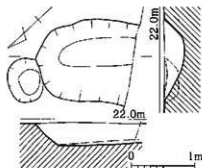
19~21はいずれも杯部の口縁部側破片で、口縁部は短めに外反する。19・21は器面が風化して調整手法は不明。20は内外面ともにへら磨き調整される。いずれも胎土に細砂粒、角閃石、金雲母粒を若干含み、黄褐色ないし茶褐色に焼成される。

これらの土器は、4の甕や16の甕にみられる叩き目を有するなど、弥生時代終末期の特徴を残すものの、3の甕にみられる口縁部の形状や丸みを帯びた底部からみて、古墳時代初頭頃に属するものであろう。このようにみれば、1・2の複台口縁壺の形状や、高杯の形状も概ねこの時期で問題ないと考えられる。

縄文土器鉢 (22) 屈曲する胴部破片で、内外面ともに条痕がみられるものの内面はナデ調整が加わっている。胎土に砂粒を含み、淡茶褐色に焼成されている。後期後半から晩期前半頃の鉢形土器であろう。

1号土坑 (図版41-1・2、第93図)

1号住居跡の西側に近接して発見されたが、南西側が調査区域外に潜る。長さ1.5m以上、幅1.4m、深さ0.3m強の規模で、主軸方向はN-51°30'-Eを向く。北西側に近接して円形の

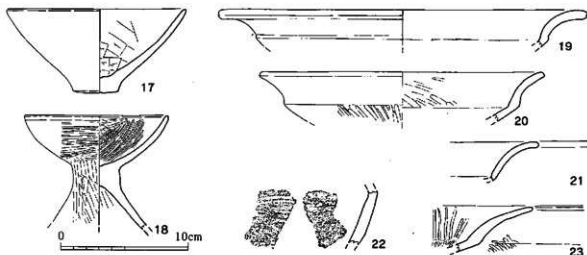


第94図 1号土坑実測図(1/60)

ビットが発見され、堆積土はほぼ同一であったが、関連は不明である。

出土土器 (第95図23)

土師器高杯 (第95図23) 杯体部から口縁部が長めで緩やかに外反する破片で、内外面ともにへら磨き調整され、内面には暗文がみられる。細砂粒、角閃石、金雲母粒を若干胎土に含み、黄褐色ないし茶褐色に焼成される。



第95図 1号竈穴住居跡出土土器実測図2、1号土坑土器実測図(1/3)

その他の遺構 (第91図)

1号溝

調査区のうち最も南東側の端で発見された溝で、N39°E方向に流れる人為的な掘削による溝で、幅0.5~0.8m、深さ0.3m程の規模である。畦道にも並行しているが、他の農道や畦道に並行する溝や畝状溝の堆積土が灰色系の色調を呈するのに比して黒色味の強い色調の堆積土であった。

出土遺物

須恵器の杯蓋と甕の小破片、土師器小破片、近世陶磁器片、瓦片、櫛破片が出土したが、土器類は図示に耐えない。須恵器杯蓋片は鳥嘴状のかえりを有するもので7世紀代のものらしいが、混入であろう。

櫛 (図版42-19) 龜甲製らしい櫛の破片資料が1点出土した。飴色の色調を呈し、残存長3.0cm、幅2.0cm、厚さ2.6~3.0mmの大きさ。体部両面に菊花の陽刻と透かしがみられ、背に浅い刻み目が施されている。

2号溝

暗茶褐色土が堆積する溝で、幅0.4m、深さ0.3m程の人為的な掘削による溝。併かに弧を描いていて南側では北北東方向を向くが、北側ではN10°E前後の方向をとる。

出土土器

内面へう割り調整されて器壁が薄い土師器甕の胴部小破片や頸部小破片、弥生土器小破片などが出土したものの、図示に耐えない。土師器甕は古墳時代前期のものであろう。

3号溝

N-28°-E方向に流れる溝で、東側に近接する落ち込み状の溝が暗茶褐色系の色調を呈するのに対して、やや灰色っぽい色調を帯びた土が堆積する溝。幅1.0m弱、深さ0.1mほどで、掘り込み角度は緩やかである。

出土土器

瓦器碗らしい小破片と土師器小破片が出土したのみで、細かな時期は判別しがたい。

柱穴状ピット

溝2付近のピットから出土した土器類は、弥生後期から古墳時代前期の土師器甕片などに集中していて、時期的に下降する資料は含まれていなかった。しかし1号住居跡内のピットやⅢ区東側のピットからは須恵器片や土師質土器片、瓦質土器片などが少量含まれていた。

3) 小 結

1号住居跡出土の土器類は古墳時代初頭庄内式土器段階の一括出土資料である。このうち複合口縁壺や高杯は瀬戸内系のものである。1号住居跡の約7m東側に掘削された2号溝は出土土器が時期的に近接することから関連する施設とみておきたい。また現在は住居跡が殆ど削平されているが、2号溝のあたりから西側は地形的に高く傾斜していて、その高まりのなかにも自然流路的な落ち込みが1号住居跡の約3m西側にあるので、起伏をもった扇状地地形の高い部分を選んで住居跡が構築されたと考えておきたい。ただし、同時期の集落がどのように形成されていたのかは、今のところでは積極的に判断しえない状況である。また古墳時代終末期ないし奈良時代頃の痕跡が1号溝堆積土内などで一部確認され、周辺に残る畦畔区画の方向と近いことから条里に関連する可能性を今後検討する必要がある。また中世の集落もこの付近に営まれていた可能性が高い。

3. 六郎神田遺跡

1) はじめに

六郎から掘屋に向かう市道との交差点付近の拡幅部分を調査した。調査面積は200㎡。旧地番では346-2と349-1番地で、境界のコンクリート壁を残したため、前者をⅠ区、後者をⅡ区と区別した。現道側に向かって深くなる緩やかな傾斜があり、北側に柱穴状ピット、東側に溝が1条発見された。遺構検出面では砂質粘土の部分にピットなどがみられたものの、砂礫がめだつ部分には明確な遺構は発見されず、西側の深くなった部分に遺物を包含する暗茶褐色砂質粘性土が堆積していた。

2) 遺構と遺物

1号溝 (第96図)

幅0.3m、深さ0.1m弱の溝で、約9.0m分の長さを確認したが、Ⅰ区とⅡ区で方向が若干異なる。溝内には少量の土師器小破片が含まれていた程度で時期的な判断は明確に難しい。

柱穴状ピット

建物跡と判断しうる明確なものはない。

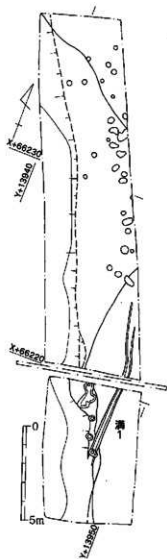
遺物包含層 (第97図)

調査区西寄りがやや深くなっているために、この部分を中心に暗茶褐色粘質土が堆積していて、遺物が含まれていた。

弥生土師 (1・2) ともにⅠ区包含層から出土した底部破片である。

1は復原底径7.0cmほどで壺の底部であろう。胎土に細砂粒、角閃石粒・雲母粒を含み、褐色に焼成されている。2は復原底径10.4cmで甕の底部であろう。胎土にやや多めの細砂粒と赤褐色色粒を含み、褐色ないし灰褐色に焼成されている。

土師器 (3~5) Ⅰ区包含層から出土した。3・4は外反する甕口縁部破片で、端部は丸みをもち、胴部外面をハケH調整している。3は胴部から殆どくびれないが、4は胴部が膨らむ器形であろう。胎土に多めの細砂粒、赤褐色色粒を含み、黄褐色ないし褐色に焼成されている。5は



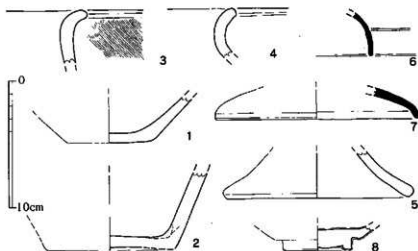
第96図 六郎神田遺跡
遺構配置図(1/200)

復原胴部外径15.0cmの大きさの高杯脚裾部破片で緩やかに開く。胎土に細砂粒・褐色粒・角閃石粒を含み、褐色に焼成されている。

須恵器（6・7）Ⅰ区包含層から出土した。6は立ち上がり深めの杯蓋の口縁部破片で外天井部はヘラ削り調整される。7は退化した鳥嘴状

かえりを有する杯蓋で、復原口径16.0cmの大きさ。

青磁碗（8）Ⅱ区包含層から出土した。精良な胎にオリーブ色の釉がかかる底部破片で、外面の釉は高台までかかることから、龍泉窯系の碗であろう。



第97図 六郎神田遺跡出土土器実測図(1/3)

3) 小 結

六郎神田遺跡では、集落の中心部ではなく、周辺部に相当するらしく明確な構造物を判断しえる遺構はみられなかった。しかし、弥生後期、古墳時代後期、中世の遺物が含まれていることから、周辺にこれらの時期の集落が展開していたものと考えられる。

4. 六郎桜木遺跡

1. はじめに

この遺跡の北側は豊前東部工業団地造成に伴い小石原泉遺跡として広く発掘調査が行われていて、この調査区の北隣でもすでに数条の溝状遺構の発掘調査が実施されていた。したがって、本調査区内でも溝の続きが想定されたために発掘調査を実施することとしたが、工事内容が幅2～3mの拡幅であり、面的な調査は非常に困難が予想された。併せて遺構の内容も勘案して、南側拡幅部でのトレンチ調査を実施することとし、最大幅1m、長さ21mのトレンチを設定したものである。

発掘調査は平成5年12月15・16日の2日をあて、すべて人力で作業を行った。

2. 遺構と遺物

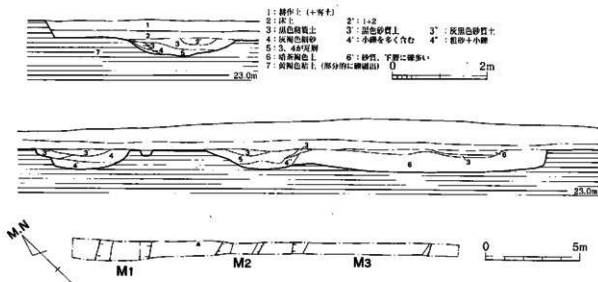
1) 遺 構

土層は地表から30～60cmの厚さで客土および耕作土、その下位に20cm前後の厚さの床土があり、床土を除去して黄褐色粘質土ないしは灰黄褐色土が現れて溝状遺構をその上面で検出した。なお、地山面は部分的に小礫を交え、あるいは礫が露出する箇所もある。

検出した遺構は3条の溝状遺構と柱穴1基である。

1号溝状遺構 (図版44-2、第98図)

西端で検出した遺構。幅2.3m、深さ40cmの規模で、壁の立ち上がりは緩やかである。西側お



第98図 六郎桜木遺跡土層図(1/80、1/200)

よび上面で再掘削を思わせる土層ラインが見える。最下層となる4層は灰褐色細砂層で、緩やかな流水があったものと思われ、5層も細砂層が互層を成していて、似た状況を思わせる。3層の段階で流れが停止したようである。最上層は床土状の土を交えており、水田化に伴う溝であろう。

2号溝状遺構 (図版44-3・45-1、第98図)

幅2m、深さ40cmの規模をもつ。西側の肩に段があり、再掘削された可能性がある。

最下層には1号溝最下層と同様の細砂層が一樣にみられるが、ここでは小礫を多く含む。その上方には細砂層が厚く堆積する。

3号溝状遺構 (図版44-1、第98図)

東端で検出した幅7.3m、深さ40cm前後の規模の溝。東側の肩はほぼ直に近く、住居跡を思わせたが、堆積状況から溝であろうと判断した。下層には一樣に暗茶褐色砂質土が堆積し、中でも下位では小礫を多く含んでいた。この上面にはさらに2条の溝が再掘削されている。

東側のそれは幅3.5m、深さ0.1m強で、下層全面には耕作土が堆積していて、比較的新しいとの印象を受けた。西側の溝は幅2.3m、深さ0.4mの規模で、最上層を除いては砂礫が混入しており、本来的には流路であったと思われる。

2) 遺物

遺構に伴うものとしては1・3号溝から若干の土器および石製品が出土している。

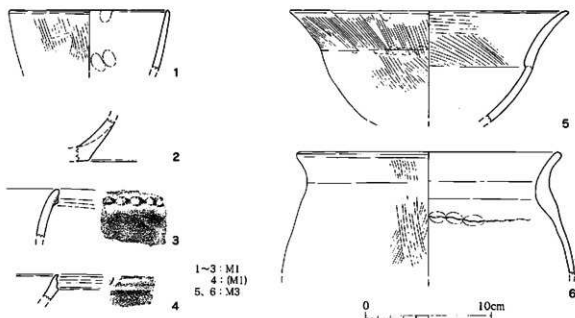
1号溝状遺構 (図版45-2、第99図1~4・第100図1~4)

土器 (第99図1~4) 1はコップ形となると思われる小片で、復原口径や傾きには不安がある。口縁部は直行してそのまま丸く終わる。外面に刷毛目が見えるが内面は判然としない。胎土粗く、作りも雑で弥生後期に属するものであろう。2は甕の底部か。これも甕表が荒れるが、粗雑なつくりのようである。平底を残す。3は縄文晩期突帯文土器の小片。刻みは幅広く、縦指側縁がちょうど収まる大きさである。突帯から内面にかけてが黒色、突帯以下の外面が黄褐色～灰赤褐色となる。

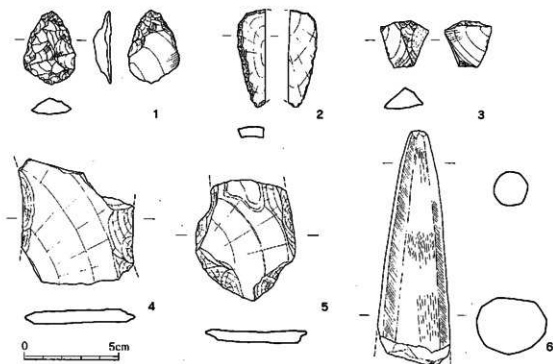
4は注記の不備で出土地不明となるが、遺物が乏しい中で縄文土器を出土する遺構はこの溝だけということでここで紹介する。後期三万田式と思われる小片で、屈曲直立する口縁部外面に2条の門線を刻み、口端部をわずかに外反させている。

石製品 (第100図1~4) 1はスクレーパーである。姫島産黒曜石製の剥片を素材とし、端部に刃部加工を行っている。背面は周縁より面調整、腹面は素材面を残して上端部のみ面調整を行っており、石鏃未製品転用の可能性も考えられる。重さ6.3gを測る。2は素材側縁に刃部加工を行っているスクレイパーである。粘板岩製で、重さ5.5gを測る。3は微細剥離を有する剥片である。姫島産黒曜石の不定形剥片を素材としており、左側縁に微細剥離を観察できる。重

さ6.1gを測る。4は打製石斧の欠損資料と考えられる。ただし、安山岩製の板状剥片の素材面を大きく残すことや、両側縁を並行させた丁寧な加工は刃部の可能性もある。その場合、石鐮の可能性が高い。重さ44.4gを測る。



第99図 六郎坂木遺跡出土土器実測図(1/3)



第100図 六郎坂木遺跡出土石製品実測図(1/2)

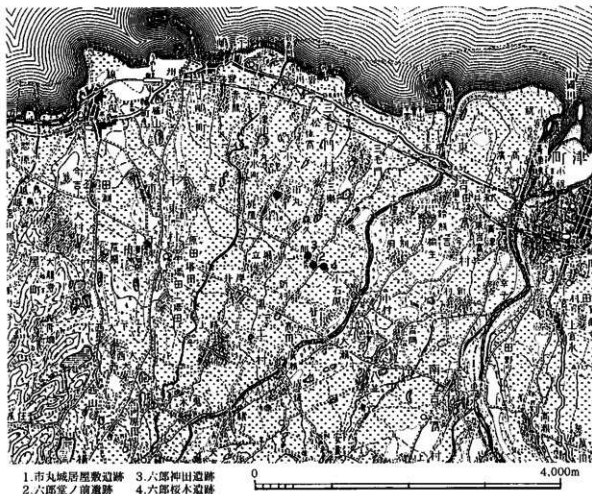
3号溝状遺構（図版45・3、第99図4・5、第100図5・6）

土器（第99図5・6） 4は口縁部の1/3ほどが残存する鉢であろう。丸く立ち上がる体部から緩やかに大きく外反する口縁部へ続く。口端部は丸く終わる。全体に灰黄褐色を呈し、粗い刷毛目で調整する。胎土・作りともに雑である。5は蓋の小片で、口端部はあるいは欠損するかも知れない。口頸部は緩く外彎し、その下位には明瞭な粘土紐の継ぎ目が残る。

石製品（第100図5・6） 5は、打製石斧の欠損資料。左側縁と下端部右側の剥離の風化はやや新しい。ただし、その後も調整加工がみられるためリダクションされ、使用されたと見てよいであろう。緑色片岩製。重さ41.4gを測る。6は蛇紋岩製で棒状に研いで加工されている。側縁部に使用痕などは認められない。下端部を欠損するため器種を確定し得ないが、石刃、石棒などの可能性を考えて良いのかもしれない。重さ198.0gを測る。

3. 終わりに

今回はトレンチ調査で、隣接して調査された小石原泉遺跡の延長を確認したものである。内容的にも小石原泉遺跡を越えるものではなく、縄文時代後晩期、および弥生時代後期の遺物を主体とする。中で、石斧として報告したものは形状が円錐形をしており今後の問題を残すものである。



第101図 明治30年頃の豊前平野 (1/50,000)

圖 版

1. 市丸城居屋敷遺跡周辺地形
(南上空から)



2. I～III区全景
(上空から)



3. I区全景 (上空から)



2号礎石建物跡

1号礎石建物跡

1. 1区1・2号礎石建物跡
(上空から)

2. 1区1号礎石建物跡柱5・10 (東から)

3. 1区1号礎石建物跡柱12 (西から)

4. 1区1号掘立柱建物跡
(上空から)



1. I区2号土坑（東から）



2. I区3号土坑（東から）



3. I区4号土坑（東から）



4. I区1号円形土坑（東から）



5. I区1号円形土坑土層断面（東から）



6. I区1号井戸（西から）



7. I区1号埋壁遺構（西から）



8. 作業風景



1. 1区1号石組土坑（北東から）



2. 同（南東から）



3. 同上遺物出土状態（南東から）



4. 1区1・2号大土坑（上空から）

1. I区1号大土坑（南東から）



2. 同石列部分（南東から）



3. I区1号大土坑・1号集石遺構（南東から）



4. I区1号大土坑土層断面（南西から）





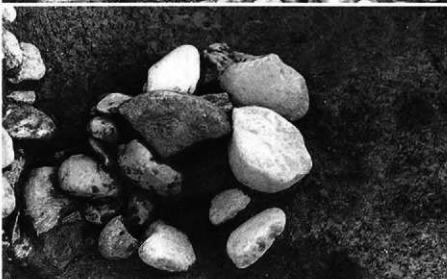
1. I区1・2号集石遺構（北東から）



2. I区1号集石遺構東部（北東から）



3. 同上土層断面（南東から）



4. I区1号大土坑石臼出土状態（南西から）

1. I区3号集石遺構（北西から）



2. I区1号溝状遺構漆器出土状態
（北西から）



3. I区1号溝状遺構石組裏込土層断面
（南西から）



4. I区1号溝状遺構土層断面
（北東から）





1. II区全景（上空から）



2. II区1号掘立柱建物跡
（上空から）



3. II区1号土坑（上空から）



4. II区3号土坑（北東から）

1. II区4号土坑（北東から）



2. II区5号土坑（南西から）



3. II区6～8号土坑（西から）



4. II区6号土坑遺物出土状態
（南東から）





1. II区7号土坑土層断面 (南東から)



2. II区9号土坑 (東から)



3. II区10号土坑 (北東から)



4. II区11号土坑 (北東から)



1. II区12号土坑・1号桶埋設遺構（上空から）



2. II区石桶遺構（北東から）



3. II区1号胎衣埋納遺構（東から）



4. II区2号胎衣埋納遺構（北西から）



5. II区1号桶埋設遺構（南西から）



6. 同遺物出土状態（北東から）



7. II区1号井戸（南西から）



8. II区2号井戸（東から）



1. II区2号溝状遺構土層断面（北東から）



2. II区3・4号溝状遺構土層断面（北東から）



3. II区5号溝状遺構土層断面（北東から）



4. 作業風景



1. II区北側落ち込み（南東から）



2. II区西壁土層断面1（南東から）



3. 同上2（南東から）



4. 同上3（南東から）



1. III区全景（上空から）



2. III区1号土坑（北から）



3. III区1号井戸（西から）



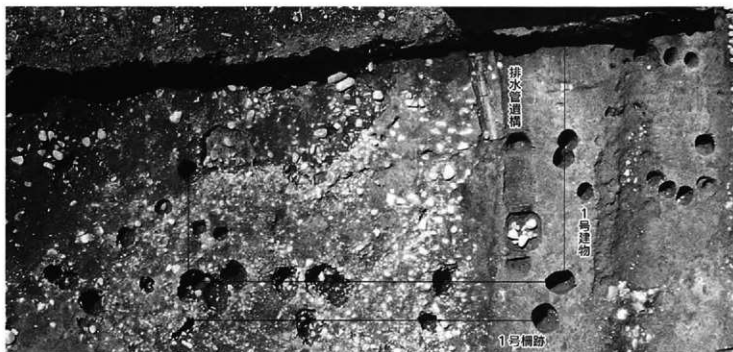
4. III区2号井戸（北から）

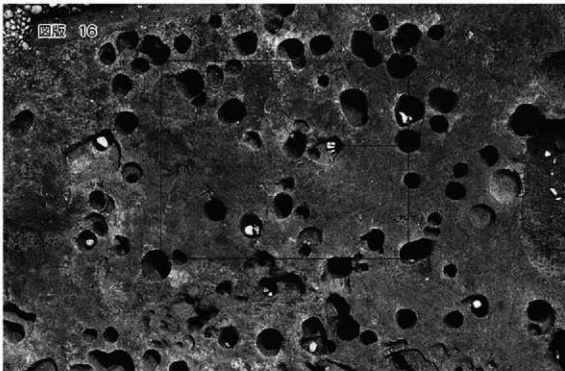


5. III区3号井戸（北から）



1. IV区全景（上空から）

2. IV区1号掘立柱建物跡・1号柵跡・排水管遺構
（上空から）3. 同上柱1柱礎出土状態
（北東から）



1. IV区2号掘立柱建物跡（上空から）



2. IV区1号土坑（北東から）



3. IV区2号土坑（南東から）



4. IV区3号土坑（北東から）



5. IV区4号土坑（北から）



1. IV区8・9・14～16号土坑・1号井戸（東から）



2. IV区7号土坑（北から）



3. IV区10号土坑（北東から）



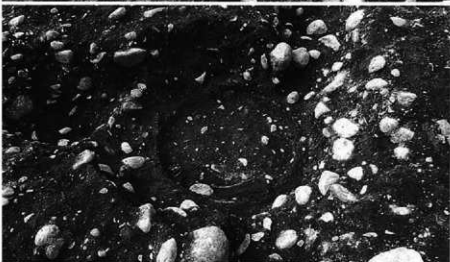
4. IV区11号土坑（北から）



5. IV区13号土坑（北東から）



1. IV区15号土坑（西から）



2. IV区1号桶埋設遺構（北西から）



3. IV区1号埋竈遺構（南から）



4. IV区2号埋竈遺構（北から）



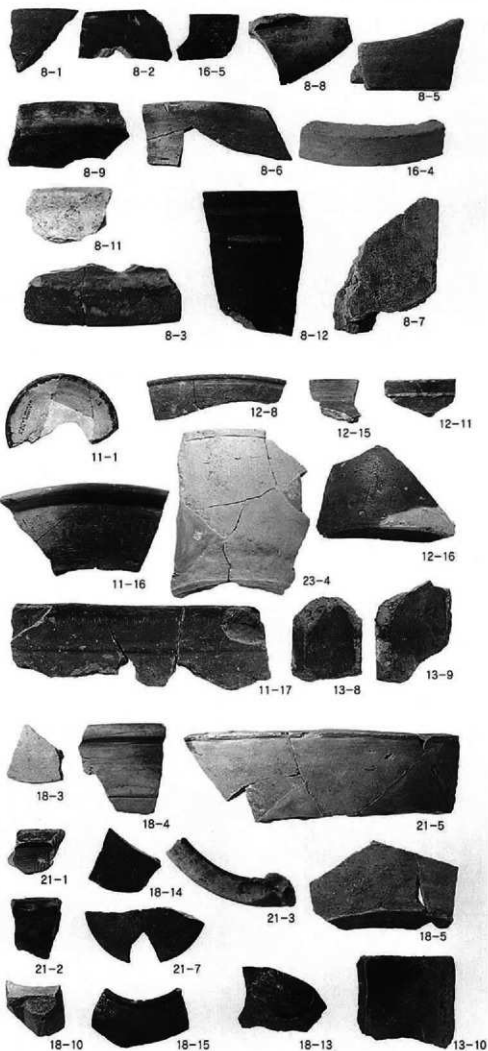
1. IV区2号井戸（南から）



2. 7号溝状遺構石組部
（西から）



3. 同上（北から）





16-8



19-3



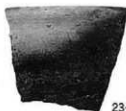
18-11



21-8



23-6



23-2



23-5



23-3



23-16



23-17





19-1



20-2



22-7



26-7



22-2



22-6



23-10



22-4



23-1



23-9



23-8



23-11



23-7



23-14



23-13



23-15



23-12



37-18



30-3



30-1



30-4



30-2



30-7



27-1



30-5



27-3



28-1



34-1



28-2



30-6



32-18



34-13



34-5



34-14



34-4



34-12



34-3



34-11



35-21



35-19



35-3



35-22



35-18



35-8



35-11



35-17



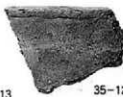
35-9



35-15



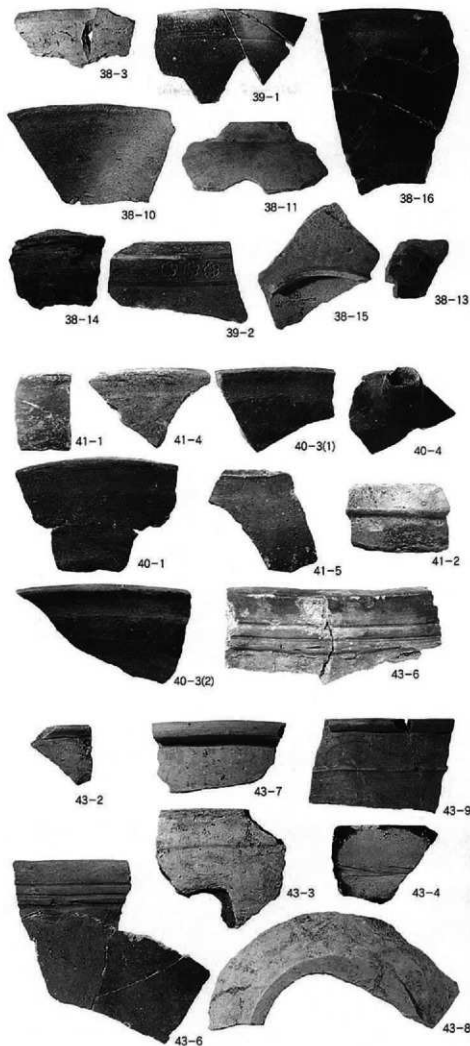
35-13



35-12



35-10



Ⅱ区出土土器



II区出土陶磁器 1



46-6



36-9



37-3



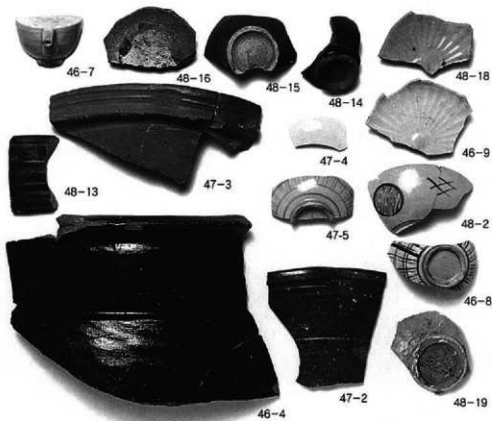
40-2



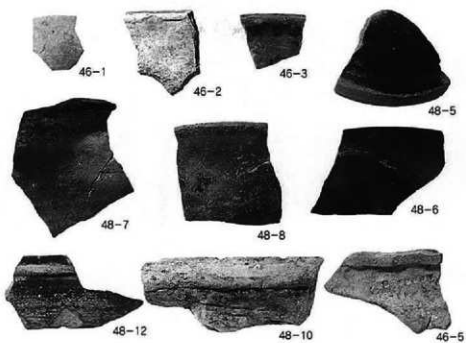
II区出土陶磁器2



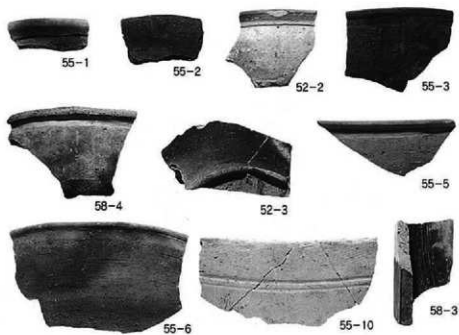
1. II区出土陶磁器2



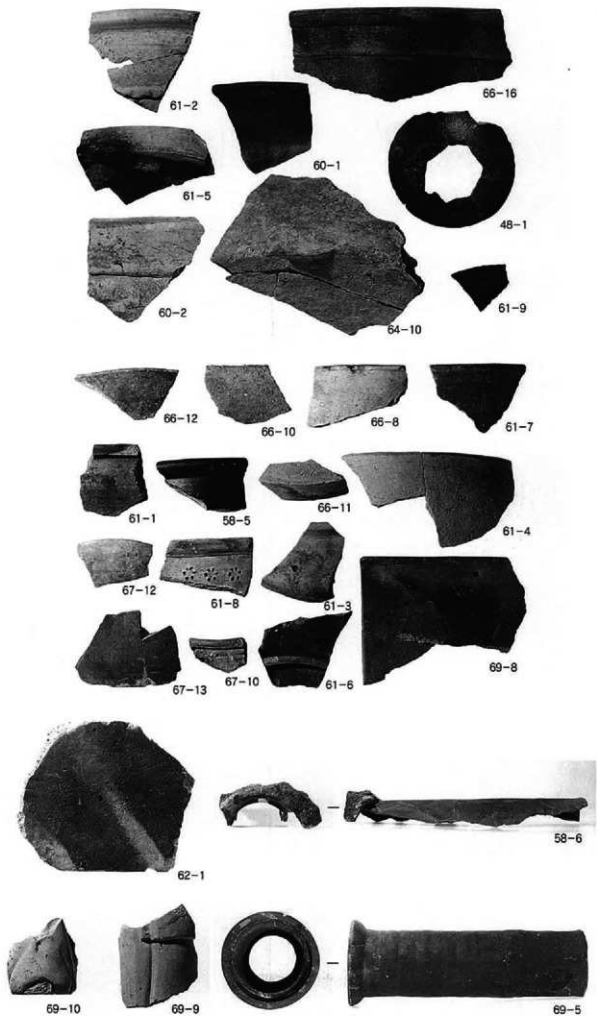
2. III区出土陶磁器



1. III区出土土器

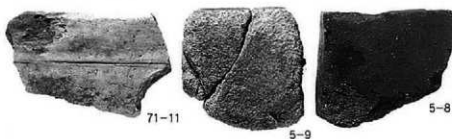
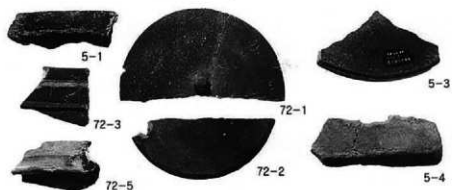


2. IV区出土土器 1



IV区出土土器2・土製品





71-12

72-4

1. ビット出土土器



76-1



76-4

2. 攪乱出土土器・土製品



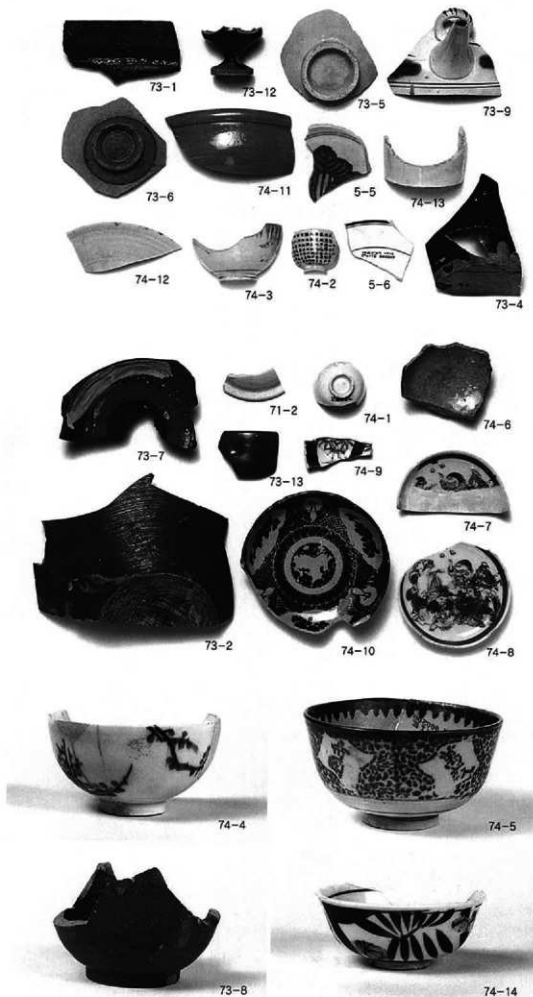
75-7

3. 遺構検出面出土陶器

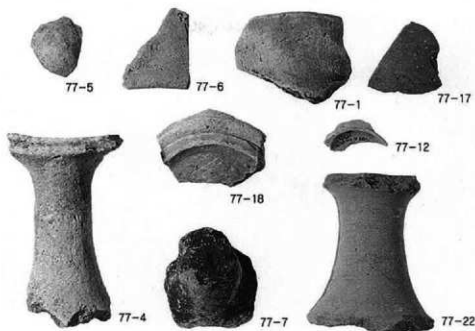


76-6

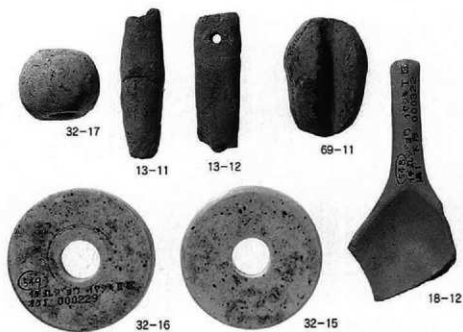
4. 出土地不明ガラス瓶



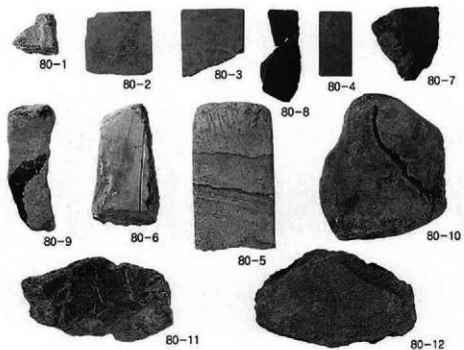
ビット出土土器2・陶磁器



1. 弥生・古代の出土土!



2. 土製品・磁器製品



3. 礫石・石製品



81-1



81-3



81-2

83-2



82-1



82-2



83-1



82-3



83-3



84-2



84-1



78-12



78-1



78-2



78-5



78-4



78-6



78-10



78-7



78-8



78-9



78-11



79-2



78-13



79-3



79-4



79-1



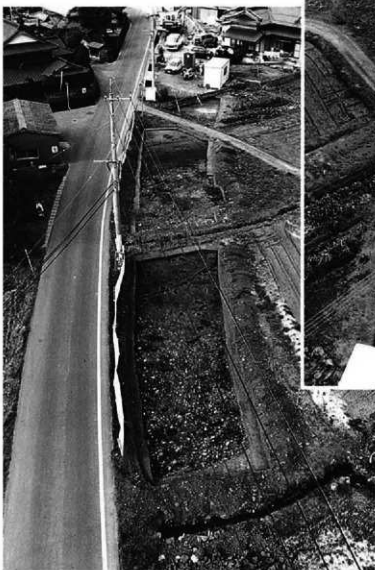
79-5



1. 六郎堂ノ前遺跡空中写真1
(東南方向を望む 正面は雄熊山と八面山)



2. 六郎堂ノ前遺跡空中写真2 (北西から)



3. 六郎堂ノ前遺跡空中写真3 (南東から)

1. 1号竪穴住居跡と
1号土坑
(北から)



2. 同上 (東から)



3. 1号竪穴住居跡遺物
出土状況
(東から)





1. 六郎堂ノ前遺跡調査風景



1



2



3



4



6



11



16



17



18



19

2. 六郎堂ノ前遺跡出土遺物



1. 六郎神田通跡調査区全線1 (北から)



2. 六郎神田通跡調査区全線2 (南から)



3. 六郎神田通跡調査区1区 (北から)



1. 六郎桜木道跡調査区全景
(北西から)



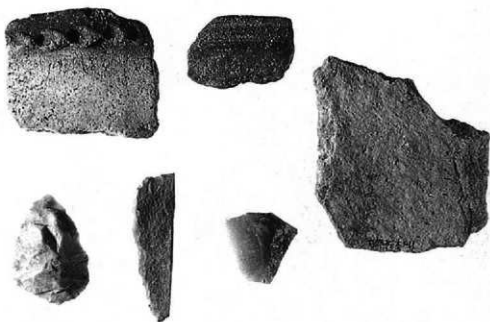
2. 1号溝 (西から)



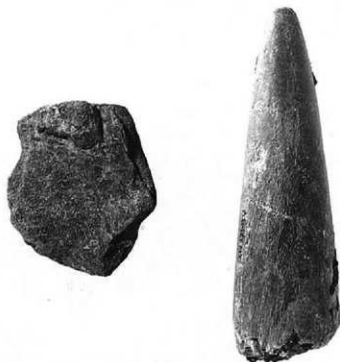
3. 2号溝 (南西から)



1. 3号溝西半 (西から)



2. 1号溝出土遺物



3. 3号溝出土遺物

報告書抄録

ふりがな	いちまるいじょういやしき・ろくろどうのまえいせき・ろくろかんたいせき・ろくろさくらだせき
書名	市丸城居屋敷遺跡・六郎堂ノ前遺跡・六郎神田遺跡・六郎桜木遺跡
副書名	福岡県豊前市市丸・六郎所在遺跡の調査
巻次	
シリーズ名	福岡県文化財調査報告書
シリーズ番号	第179集
編著者名	小池史竹・飛野博文・秦 意二
編集機関	福岡県教育委員会
所在地	〒812-8577 福岡市博多区東公園7番7号
発行年月日	西暦2003年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
いちまるいじょういせき 市丸城居屋敷遺跡	ぶぜんしいうきまる 豊前市市丸	40214	150193	34° 14′ 47″	131° 8′ 47″	2000.01.26) 2000.03.31	約3,000㎡	県道拡幅
ろくろどうのまえいせき 六郎堂ノ前遺跡	ぶぜんしいうきろう 豊前市六郎	40214	150187	34° 21′ 06″	131° 9′ 12″	1998.01.27) 1998.02.16	370㎡	
ろくろかんたいいせき 六郎神田遺跡	ぶぜんしいうきろう 豊前市六郎	40214	150188	34° 20′ 10″	131° 9′ 02″	1998.02.02) 1998.02.16	約200㎡	
ろくろさくらだいせき 六郎桜木遺跡	ぶぜんしいうきろう 豊前市六郎	40214	150114 (豊前市市丸)	34° 20′ 09″	131° 9′ 01″	1997.12.15) 1997.12.16	21㎡	
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
市丸城居屋敷遺跡	集落	戦国 近世 近代	礎石・竪立建物跡6 土坑39 井戸8 集石遺構3 埋蔵3 溝25		土器・陶磁器 磁石・石臼 鉄・銅製品			
六郎堂ノ前遺跡	集落	古墳 近世	竪穴住居跡 1 溝 3		古墳時代 江戸時代	古式土師器 櫛		
六郎神田遺跡	集落	中世	溝 1 ピット		弥生時代 中世	土器 青磁		
六郎桜木遺跡	集落	縄文	ピット		縄文時代	土器 石器		

福岡県行政資料	
分類番号	所属コード
JH	2133051
登録年度	登録番号
14	8

市丸城居屋敷遺跡・六郎堂ノ前遺跡 六郎神田遺跡・六郎桜木遺跡

福岡県文化財調査報告書
第179集

平成15年(2003年)3月31日

発行 福岡県教育委員会

福岡市博多区東公園7番7号

印刷 株式会社 三光

福岡県福岡市博多区山王1-14-4